ユキナDiaryーＡＬ　～Attack Legion～

PM8:00

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ユキナＤｉａｒｙｌＡＬ　～Ａｔｔａｃｋ　Ｌｅｇｉｏｎ～

【Ｎコード】

Ｎ８９２５Ｊ

【作者名】

ＰＭ８：００

【あらすじ】

二百年前、森の方で新たな怪物を発見したのでその討伐に向かった眼の使い手と呼ばれる双子の姉弟。しかしそこでの戦闘で思わぬ負傷を負い……一方二百年後の世界である現代では海洞護熾とユキナはＦ・Ｇで行われている一番強い生徒を決める大会の観戦に誘われて行くがそこで……

一週目目　～プロローグ～　灯る時計盤（前書き）

どうも！　前作から知っている方はお久しぶりです！　名も存在すら知らなかった人は初めまして！　関東という名のジャングルに住んでいますゴリラことＰＭ８：００です！

いや～どうにか始めることができましたよこれ。

今回のコレは“追いつめられる”をコンセプトに仕上げています。まあ簡単に言えば新たなる挑戦ですかね。（そう言いつつ何に挑戦しているのかよく分かっていないｗ）

因みに初めての方＆興味がある方は目次の下にあるタグから前作の『ユキナＤｉａｒｙ』をお読み下さい。それともう一つ、この作品はあくまで作者の置き忘れた作品です。書きたいモノ書く、それが私の作者存在理由なのさ☆　以上、物語をお楽しみにしてください！　では！

一週目目　～プロローグ～　灯る時計盤

Ｉｓ　ｔｈｅ　ｐｒｅｐａｒａｔｉｏｎ　ｇｏｏｄ？（準備はいい？）

神と対為す『邪神』此処にあり――――

少年達の覚悟、少女達の想い彼方にあり――――

邪を壊し、絶望の中の光、我にあり――――

あなたと私を繋ぐ心、一つにあり――――

～あらすじ～

人ならぬ者たちが、この世の日に陰に跋扈(ばっこ)していた。
その者たちは日々人をどこかに連れ去り、自分達の同胞を作り、勢力を徐々に拡大していた。
それを阻止すべく異世界の住人は現世に人を派遣し人々を影から護らせていた。

その者達を、異世界の人々は総称して“異世界(パラアン)の守護者”と呼び、主に十代から二十代の若者が任を背負って対怪物戦闘人員として活用していた。
そしてさらに、ある街でのみ、不思議な能力を持つ者達がいた。
彼らは生物に流れる循環生体エネルギー、総称して“気”と呼ばれるエネルギーを常人を遙かに凌ぎ、さらには力の具現化に至って各固有の能力を生み出す。

人々は気を解放したその外見から、“眼の使い手”と呼んだ。
そして現世で、高校一年の護熾はひょんなことから守護者(パラアン)及び眼の使い手の少女“ユキナ”と出会い、違う世界を明日から踏み出すことになる。

これは真実を知った少年海洞護熾とオレンジの瞳と髪を持つ少女ユキナの物語である。

〜プロローグ〜

風が聞こえる。
それは遠い雷鳴のような、今いる場所が中心かのように渦巻いている。
だが此処は、人間及び生物の常識を越えた場所。
呼吸をするのでさえ忘れ去られてしまいそうな、亜空間。
この場所を言葉のみで語りきるには少々難儀なことだが一つだけ今伝えられることがあった。

最悪。
ハッキリ簡単に言ってしまえば、それは眼の使い手の全滅と言えるであろう。
太陽を取り除いたような永遠の闇が続き、石英でできたような円柱が立ち並ぶこの空間の中、動くモノは邪神のみであり、さっきまで動いていたモノはいなくなっていた。
残された眼の使い手はおそらく自分一人のみ。
だが、自分は胸部を貫かれていて戦闘どころか動くこともままならない状態だった。

……聞こえる……

そう思ってからピクンと指が動いた。
もう動かない腕、動かない足、動かない頭、動かない身体。
動きを止めようとしている心臓の鼓動を感じながら、血溜まりの中で確かに何かが聞こえる。

……海洞くん……死なないで……

すぐ隣で、自身を抱き締めている少女の声だろうか。
致命傷を負った自分の耳にはほとんど掠れて聞こえないが、誰かが自分に向かって声を掛けていることだけは分かった。しかしその言葉に応えようとも、身体は言うことを聞かないし、むしろ重くなっていくようだった。

……護熾……お願い、生きて……

……海洞、もう一度死んだら容赦しないし許さないからね！

……ゴオキ、どうか、無事で……

不意に頭の中で３つの声、少女達の声が聞こえた。
その声は、自身にとって護らなくてはいけない存在、又は護らなくてはいけない世界。
そう思うと今度は聞いたことがある声で、聞いたことがない言葉が頭に響き始める。

……これは俺たちの戦いだ……奴は喧嘩を売った。それを買って、蹴りを付ける。

……どんなに暗い世界でも光は輝きます。みんなで帰りましょう！

……奴に伝えてくれ……クソったれってな

……私がみんなを護るから、あなたは私達の世界を護って

……全員無事だ！　頼んだぞ！　奴を倒せるのはお前達だけだ！

……絶対命令だ！　生きて帰ってこいよみんな！

……ああ、そうだよな……帰らねえとな……

帰りたい、みんな無事で一緒に。
そう思うと、少しだけ顔が綻ぶ。最悪のこの状態から何とかした

い。
でも身体は動かない。それが歯痒いことであり、自身の望むことに応えられない。
もっと自分に力があればみんなを護れる。
一度捨てた命じゃねえか、もっと力をとそう、ふと思ったときにそれは来た。

“力ヲ貸シテ欲シイカ？　海洞護熾”

その声を主と思われる闇が、自身の意識を奪っていった。

ユキナDiaryーAL　〜Attack　Legion“I

ｗａｎｔ　ａｌｌ　ｏｆ　ｙｏｕ”～

時は、現在のような都市が立ち並ぶ世界より約２００年前のこと。
人々は互いに終結して大きな街を作り上げ、異形なるモノへの対抗を固め、技術も、団結力も、“起源”より遙かに向上してきたこの時代。
そんな時代の中で、眼と髪の色を変え、人の人智を超えた力を発揮する者達“眼の使い手”なる者が住まい、生まれるある街で、それは起きた。

ある夜のことだった。
鉛色の空が重く垂れ込み、月明かりも朧ろなこの日。
この日の六日前、最近、他とは比べものにならないほどの強大な強さを誇る異形が、近くに来ているという情報が入っており、その報告を受け、街の部隊は少し離れた場所まで趣き、野営を張って、各部隊ごとに捜索をしていた。
そして今日、まず、一部隊の全滅から始まった。

全員、発見された当時、干涸らびたような容貌をしており、武器を持ったまま、或いは背中から一突きされ、傷は一人一つから複数と、反撃する暇も逃げる暇もなかったことが窺えた。
そしてその緊急事態に、ついに全部隊が動き出し、その周辺を野営を張って待ち伏せた。
そして日が沈み、視界が暗くなる中、“奴”は来た。

ズザザッ

脳裏に浮かぶ二本の物体。

ズザザザッ

それは、一瞬のウチに兵士達を薙ぎ払い、

ズザザザザザッ

その先端で兵士を防具ごといとも簡単に貫き、血しぶきを纏い、尚も木の葉のように兵士達を追いつめ、

ズザザザザザザザザザザッ！！

あっという間にその場は血生臭い阿鼻叫喚の地となった。

ズザザザザザザザザザザザザザザザザザザッ！！！

ザン！

街の兵士部隊壊滅からおよそ三十分後。
胸に勲章を付けた鎧を全身に纏い、後ろに束ねた髪を２つに分けたやや赤めの髪をした少女は、森の中から飛び出し、小道を跨ぎ、そしてもう一つの森の中へと走っていた。
一瞬のウチに葉を纏いながら移動した少女は顔立ちは少し大人びており、少し小柄ながらも不安定な道筋を駆け抜けていた。

「ハァ……ハァ……怪物め……！」

息を少し切らしながら悪態を付く。
場所はどこかの森林で、夜空は銀白色の月が飾られているはずなのに、曇天の空と木々の葉が光りを遮り、さらに悪いことに夜なので木々を避けて走るのが精一杯だった。
背中には先程使用したのだろうか、折られた剣が飾られている。

「……！　こっちに来たか……！」

この少女、必死で何かから逃れる……ではなく何かを引き付け、自身を囮にしているのだ。
理由は簡単、今、自分が引き付けているのは“人外のモノ”。
及び、巻き添えを周りに与えるほどの強大な力を持った相手。
故に、一般人である自分達の兵達をこれ以上危機に晒すわけには

いかない。
それは正しい判断である。正しいのだが、今の彼女には、それしかできないのも事実である。
「姉さん！　無事だったんですね！」
不意に横から声を掛けられ、少女は一瞬足を止めそうになるが、すぐに声を掛けてきた人物に顔を向け、安堵の表情と怪訝そうな表情を混ぜたような感じになる。
自分と同じように軽量で、防御力を重視された身体に密着する作りの近代的な鎧を纏った少年。
髪の色は黒で、短く刈り込んでいて、顔はやや幼さが目立っている。
少女は横から葉っぱを纏って現れた少年と併走し、自分と隣り合ってきた少年に向かって疾走しながら今の周りの状況、戦況などの急いで報告するように聞く。
「どうして来たの！？　囮役は私一人で十分なのに」
「姉さんにもしものことがあったらどうするの！？　あれを一人でどうにかするっていうのか！？」
「……今、どんな状況？　奴は強い！　負傷者、及び確保ルートと安全な休息地はとれたの！？」
「うん、でも奴はすぐ見つけるだろうから……僕たちが倒さないと、安全は保証されない……」
「戦える？」
「もちろん、死ぬまで姉さんに付いていきますよ」
「その息だ」
少年の意気込みを買った少女はフッと微笑みを見せてから前を向いた。

此処では今し方戦うには不利な地形と場所である。
それは相手の出方、攻撃方法、そして見切るためのどれをとっても最悪な以外なかった。
とりあえずは月明かりがある、森の外へ抜ける必要がある。
「この道を真っ直ぐ行けば――――――」
抜けることができる、と記憶した地形どおりのナビを申しつけようとしたときだった。
少年と少女の拍動、そして森の静寂を破るかのように――――――

ルッ、ルゥルルル

「奴がこちらに気が付いたぞ！」
「分かってる！　姉さん早く！」

遙か後方で人一人分くらいの太さがある木々を棒のようにへし倒しながらこちらに急接近してくるのが分かる。二人は目前にある木々のない、開けた場所へと急ぐ。
急速に距離が縮まってくるのが分かる。
木々が簡単にへし折れ、道を造り、二人の背中に向かってきていることが。

「出たらすぐ後ろに振り返って迎撃するよ！　私達の“能力”２つを合わせれば……！」
「分かってる！　カウントダウンを言ってくれ！」
「分かった！　行くよ！　……４……３……２……１――――――」

少女のカウントダウンが終わりに近づき、木の葉を纏いながら、森の中から広場に飛び出す。
そして二人とも、髪の色を元の色とは別の色に変えながら、振り向く。
少女は、やや赤色の髪を、銀色に変え、銀色の瞳を携え、銀白色のオーラを纏う。
少年は、黒い髪を、金色に変化させ、金色の瞳を携えながら、金色のオーラを纏う。
二人は、自分達の姿を月光下に露わにしながら、その両眼で見据える。

「ゼロ！！」

少女のカウントダウンの最後が告げられる。
途端、二人は地面の上を滑りながら、身体を反転させ、片手を自

分達の来た森の中へと向ける。
そして二人とも、波動を生みだし、小さな光球を作り出す。
生物の体内、つまり生き物全てが持ち携える“生体エネルギー”の“気”を凝縮させ、フルパワーで迎え撃とうというのだ。

高い金属音が、広場の空間に広がっていく。
その音を纏わせながら、やがて大きくしていくと、光球は二人の今の色と同じになる。
銀色の光球は波打つように回転をしながら、金色の光球は闇を従えるかのように、希望の如く強く輝く。
そして反動を纏いながら、２つの光球は夜の中に光を刻みつけるかのように――――放たれた。

奴は接近していた、そして見る。
二人が森の外へ出た途端、こちらに身体を向けながら地を滑り、片手を同時に向けたことを。
そして手に急激に高いエネルギー反応が出現し、それが自分に放たれたと言うことも。
その自分に放たれた攻撃は、地面を波動で削りながら、迫ってくる。

（暗い森の中、二人で逃げて自分を人間達から引き離し、障害が無くなれば勝てると思っているのか）

本当に小賢しい、それが二人に対する最初の感想。

二人の手から放たれた光球は、寸分の狂いもなく、森の中にいた奴に命中する。

爆炎がそこに引き起こされ、その周辺にあった木々が中程から薙ぎ倒され、新しい地形と烈風を生み出す。
二人は、自分達が放った“飛光”を命中させた後、烈風を浴びながら、やったかどうか、視覚で確認する。
黙々と白煙を、雲の切れ目から覗く月光が照らし、着火地点を中心に薙ぎ倒された木々が映し出される。
再び訪れた、静寂。
不気味で耳鳴りが痛いほどの静かな場所に戻っていく。
その場所で二人は互いに無言だったが、やがて少女の方が先に口を開いた。

「や……ったか？」
「分からない……気配がない……」

まともに受けたというのは手応えで感じていた。
あれほどの直撃、もし元気でいても、負傷は避けられないはずである。
二人ともそう思っていた。
煙の中からあるモノが出なければ――――――

ヒュッ――――――ベシャッ

煙の中から、白煙を纏いながらこちらに投げ出された物体が、二人を瞬時に臨戦態勢に戻す。
だが、それはすぐに敵ではないことは、同じく刹那の間に分かった。

干涸らびて、ミイラになった兵士。
飛光の直撃を食らい、鎧以外、原型が無くなった死体。

それが、空中で力無くしわくちゃになった水分のない皮膚を纏った身体を投げ出されながら、そして焦げたような後を多く残しながら、二人の前に白煙を纏って落ちてきた。
奴は、こいつを使って自分達の攻撃を瞬時に防御した。
二人とも、すぐにそれが頭に浮かんで、視線をミイラ化した兵士から白煙に向ける。
だが――――少し遅かった。

白煙の中から、こちらに向かって鞭のようなモノが、獲物を見つけた肉食獣のように、襲いかかってきた。
先端は鋭利な刃物状になっており、弾丸の如く空気を切り裂きながら向かってくる。
避けきれない。
二人は回避するために横に跳躍する。
その瞬間、触手の先端は下から上へ奔り、少女の脇腹を、少年の肩を抉り去るように通過していき、先端を赤く染めながら、夜空に向かって飛んでいく。

「ぐっ……！」
「がァっ……！　くそっ……！！」

血沫を散らせながら、横に飛んだ二人は血液を身体に付着させながら、地面に転がり落ちる。
通り過ぎた触手は、一度上空で動きを停止、それから進行方向を変え、怪我を負い、その痛さに呻いている二人に向かって追撃を掛けるために今度は上から下へと急降下で接近を開始してくる。

触手の先端には、二人には見えない殺意を帯びながら。

少女は、脇腹を抉られた痛みで、すぐに気が付くことはできなかったが、耳に急降下で降りてくる音を聞きつけハッとなり、少年に注意を呼びかける。

「気をつけろォ！！　まだ攻撃は終わっていない！！」

「！！」

少女の警告をいち早く聞きつけた少年は、すぐ横に転がる。

すると上空から流星の矢のように急降下をしてきた一本の触手の先端が、さっきまで少年が居た場所に突っこみ、周りに少し土をばらまきながら刺さる。

「あ、ありがと！　姉さん！」

「！！　まだ終わっていない！！」

まだ、第二撃は来ていない。

少女はそう叫ぶが、少年の反応は一回避けたという安堵感で僅かながら、隙が生じ始める。

それを狙うかのように、一撃目を上から、二撃目を真横からに進路を変えた触手が、迫る。

そして、その殺意に気が付いた少年は、そちらにゆっくりと顔を向ける。

その時、金色の瞳に映ったのは――――――月光で残酷に光る、触手の先端。

「カイトォオオオオオオオオオオオオオオ！！」

少女の弟の名を叫ぶ声が、森の中の広場に広がる。

そして少女の銀色の瞳に映るは――――少年の胸を何の躊躇もなく貫く触手の図だった。

少年は自身に起きたことが信じられないのか、目を人生の中で一番大きく見開き、胸の激痛と貫かれた衝撃で、顎を天に向かってあげる。

その瞬間、激痛で意識を保つことが難しくなり、眼の色と髪の色から色が引き始め、元に戻り始める。

そして胸から血が勢いよく溢れ、鎧と、服と、そして月光下に照らされた大地を濡らし始める。

カイトを貫いた触手は、人体を貫いた手応えを感じたことに満足がいったのか、ビュルッと今度は勢いよく身体から引き抜く。

そして両膝をガックリと地面に付け、眼の色も髪の色も元の黒に戻し、瀕死状態のカイトから完全に引き抜くと、今度は勢いよくそれこそ鞭のように横に薙ぎ、その身体を横に飛ばす。

「カイト！！　カイト！！！！」

少女は、重傷を負わされた弟を助けるべく、自身の傷の痛みも忘れて走り、自分の横を通り抜けようとしたカイトに向かって両腕を伸ばして掴まえ、地面を転がりながら、やがて止まる。

「カイト！！　しっかりしろ！！　こんな傷で死ぬんじゃない！」

「ね……ねえ……さん……ごめん……油断……しちゃった……」

転がり終え、体勢を立て直した少女は介抱したカイトに必死になって呼びかけるが、口から血を流し、胸の傷からの出血を見る限りでは、相当危険な状態に犯されているのは分かる。

だがここから医療班の元へは遠いし、何より敵はまだ白煙の中に

潜んでいる。
状況は――――最悪。

ルッ、ルルルルルルルルルルルルルルルッ

そして最悪の状況を作り出している根源が、二人に向かってまたあの泣き声を発する。
少女は身を固め、カイトを抱き締めている腕の力を強くする。
先程まで忘れていたが、相手の触手の攻撃によって抉られた脇腹の傷も、浅くはない。
気が付けば、痛みで既に立つこともままならない状態。
その上此処まで来るのにスタミナを消費している。
逃げる光明も、体力も、もう残されてはいない。絶体絶命、それが今の状況に一番合う言葉だった。
でも――――――

「安心しろカイト、お前の傷は“停止”させておく！　これで死ぬことはない」

少女はカイトにそう呼びかけるようにしながら、右手を胸の傷に当てる。
すると光の渦のような、銀河系を縮小したような光が胸を照らし、カイトの呼吸が瞬時に軽くなる。

「ホォ、キサマ、オモシロイ能力ヲ持ッテイルナ。」
「！」

その様子を、白煙の中から見ていた“奴”は、少し驚いたような

声で言い、少女はそれに反応して顔を上げる。言葉は少し驚いているような感じだが、声には一切の感情が含まれていない。
それが何より、無機質な声が、少女に恐怖を覚えさせる。

「ダガ、ソンナ事ヲシタトコロデ、何ガ変ワル？　何ヲ求メテイル？　所詮キサマラハ只ノ生物。強イモノガ勝ツノガ自然ノ成リ行キダ。ソレガ、オレタチ“怪物”ニ対抗シウル眼ノ使イ手デアッテモダ」
「それをお前が決めることではない！　私は諦めない！　必ず生きてみせる！」
「……戯レ言ダ、死ネ」

その言葉は、相手への興味が失せた、つまらないことを言うな、それらに対しての苛つきのような、それでも感情の含まれていない声色で、静かな殺意を二人に向ける。
少女は身構え、見えない殺意に対抗するために心を固める。
そして、ある種の作戦が、既に彼女の頭の中で一つ浮かび上がっていた。
この作戦の成功率は、相手が直接、もう一度攻撃してくること。

二人に向かって声を走った“奴”は、白煙の中からもの凄い速さで地面を蹴り飛ばし、衝撃波を生み出しながらこちらに向かってくる。
そして白煙を纏ったその姿は、まるで、“邪神”のようなイメージがあり、触手が二本とも先端の刃物状の物体を二人に向けて、飛び出してきた。

彼女の、一か八の作戦が、始まる。

触手は寸分の狂いもなく、二本とも少女の許へ向かっていく。

少女の腕の中で倒れているカイトは後からでも始末できるから、今は反撃ができる可能性を少しでも持った少女へ攻撃対象を向けると判断したからであろう。
触手は、少女の胴体と、首へ向かって延びる。
少女は、風を切って疾風を纏う触手の先端を睨みながら、その機会を窺う。

「呆気ナカッタナ、人間ドモ。ツマラナイ幕引キダ」

そう、相手が言葉を発し、終わりを確信する。

触手は、寸分の狂いもなく、まず初撃は胴体を狙う。
だが、胴体を貫く瞬間、少女はカイトを介抱していた腕を上げ、触手の先端を掴み、瞬時に気を最大限に上げて力を通常の何倍にも持ち上げて、手を先端で切りながらも見事に止める。
そして二撃目の触手は首を狙ってくるが、それはギリギリまで引き寄せ、そして先端を睨んだかと思えば、敵の意志に関係なく、空中に挟まれたかのように動きを止めてしまった。

「……！　何ヲシタ？」

突然の不確定要素に驚いた敵は、いくら触手に殺せという意志を送っても動かせないでいる。
その原因を、静かに、少女に問いてみる。
だが少女は、この時を待ち侘びていたかのような、残忍で、軽い微笑みで代わりに返事をする。

「答える必要はないわ。でも、一緒に“飛んでもらう”」
「……！」

敵は、相手が何かをしようとしていると即座に判断し、触手をすぐに引き抜こうとする。
だが、突如触手の先端の方に銀色の時計盤が出現し、それが動きを封じているモノだと瞬時に判断した。
そしてそれと同時に少女が実行を開始する。
敵が身を引く前に、少女の銀色の瞳に時盤のような紋様を刻みつけられる。
その瞬間、自分がいる場所と、敵がいる場所を囲むかのように、少女の瞳の模様と同じ銀色に発光する時盤が地面に出現する。
銀色の光が、二人の少年少女と、敵を映し出す。
時盤の針は、ゆっくりと時を刻むように、動き始める。

「……クソ」

そう悪態を付いたのは、身体の形は人型そのもの、そして両肩の後ろから触手が生え、本人の代わりに困惑するように波打っている。
痩身で真っ白な肌をした黒髪の男、そう呼ぶのにふさわしい姿をしている。
その人物は、地面に突如出現した銀色の光で姿を露わにさせられながらも、この魔法陣のようなモノを発動させた少女を見据える。

「女　サッキ言ッタ飛ブ、トハドコヘダ？」
「……私達の、知らない領域だ。もちろん、私自身の気力の消費は著しく多く、確実に無事ではすまない。だがお前を生かしておく方が危険だ……だから、道連れだ」
「……小サキ望ミニ懸ケルカ」

この女は、俺を倒す気で最後の手段に望んできたのか。
そして、少女とこの男を閉じこめている陣は、先程よりも著しく輝きを増し、天に向かって一筋の光を延ばす。それは、遠くで非難

していた、街の兵士達からもよく見えていた。
陣の中で、重力が無くなったのか、少女の銀色の髪と少年の黒髪が、不自然に浮かぶ。
「覚えておけ、私は“麟眼(りんがん)”の“シルナ”　お前との決着は、これからだ」
そして、少女は瞼をソッと、閉じた。
すると、周りの光景が、積み上げていたモノを崩していくように、光景が光景として無くなっていき、白く、無の領域へと変わっていく。
そして、怪物は、その中で、意識が遠のくのを感じながら、その領域に引きずり込まれていく。
そう簡単には、俺はやられない。所詮、人間共の力だ。
そう思いながら、意識を、沈めていった。

二週目目　等価交換故の観戦（前書き）

何だかタイトルに凝っちゃうのが私の弱みなんですよね、で、そのくせ大したことがないという（笑）もう一度言いますがこの作品は作者の置き忘れのようなものでコレを書ききらないと死にきれないっ！　そんなモノです。

二週目目　等価交換故の観戦

昨夜の激戦から二日後。
現場では約二十数人のミイラが、最初に発見された部隊と同じような姿で発見され、生き残った生存者の兵士達がその死体の始末や帰還などを行い、街への報告も完了してきたこの時。

未だに部隊の隊長の一人で貴重な眼の使い手である“麟眼”のシルナ。
そして今回、双子の姉弟で実力は隊長にも引けを取らないほどの英傑のカイトの行方が知れていないことも今回の戦いで分かった。

ワイトの上層部は全力を持って二人の無事を確認、及び保護次第、すぐに急速と治療を施せと命令をを下したが、肝心の眼の使い手の二人は、一向に、見つかることはなかった。
それから数日が経ち……――――

この時世ではまだ知られてはいないこの世界とはもう一つ別に、

“現世”と呼ばれる異世界がある。
“理”という2つの世界の命の循環を司り、さらには2つの世界を繋ぐ“橋”の役割を担っている。
そのもう一つの世界というのは、地球と呼ばれる惑星であり、ユーラシア大陸、アフリカ大陸、北アメリカ大陸、南アメリカ大陸、南極大陸、オーストラリア大陸やらがあり、日本やアメリカなどの先進国と呼ばれる国があり、その中で、日本の関東地区という場所に世界を揺るがしかねない人物が普通に暮らしていた。

その場所の名は七つ橋市“七つ橋町”
関東中部に位置する七つ橋町は、自然豊かな土地として発展している。
豊かな川面に流れる風が、心地よい街である。
田んぼが多く、夏には虫がわんさか湧き、毎年開催される花火大会は、近隣からも見物客が訪れ、秋の思い出として堪能できる。
また、充実した学生生活が送れるよう、設備の整った高校があり、生徒達が勉学に励んでいる姿も目にすることができる。
そしてこの町も例外なくパラアン達の守護区域なので異世界の先端技術、名称を覆世孤立空間発生装置（ふくせいこりつくうかんはっせいそうち）、通称“結界”と呼ばれる対怪物用の空間が敷かれているのだ。

そんな町、七つ橋町。
しかし近日では、高校の生徒全員と教職員を含めた約１０００名が突然、授業中に少数の生徒を残して消失する事件が発生。
だが程なくしてその翌日の昼頃、突然前ぶれもなく消えていた１０００名が元の場所に忽然と現れ、保護者が競い合うように連れ帰ったことが、日本全国でトップニュースを飾り、学校の方でも原因が結局不明だったため七不思議の一つとして後世に伝えられることとなった。

それはもちろん、ある人物達のおかげである。
そんな珍奇な出来事があったこの街で、今回の大きな鍵を握る人物達が身を寄せ合って暮らしていた。

ある蒼天下の七つ橋町。
その中で、住宅街が立ち並ぶある一軒家。七つ橋高校への距離橋を含めて約一キロ、途中商店街あり。
表札には“海洞”と書かれ、質素な一軒家が住宅街の中にドンと立ち構えている。
今日は祝日の金曜。学生ならばこの日を感謝するであろうこの日で、朝１０時にあることが起きていた。

それはこの海洞家の居間で現在進行形で起きている。
居間で、少年が、片手に持った鋭利で対になっている刃物を顔の横に立て、そして少女の向かって何か言っている。
少女の方は、そんな刃物を持った少年を不機嫌そうに睨んでいる。

少年は、金平糖のような髪型の黒髪で、瞳の色はブラウン、身長１７４ｃｍほど。
表情は眉間にシワを常に寄せたような不機嫌そうな顔つきになっており、今し方不機嫌な事態の所為でより表情は険しくなっていた。
少女は小柄で身長は１４５ｃｍほど、顔つきは幼さを残した顔で凛々しい、又は可愛らしい顔立ちをしており、髪は艶を帯びた背中に掛かるほどのセミロング。

そんな二人が今、互いに睨み合っていた。

「――切るぜ」
「嫌だっ！」

護熾は、手に持った髪切り用のハサミを髪の横に立て、明かりで金属光沢を醸しながらユキナに向かって言うが即答で返事が返ってくる。
だが護熾に引く気は一切無いし、ユキナも切られる気はサラサラない。

事の発端は、護熾がふと、ユキナの髪がだいぶ長くなったことに気が付いたことから始まり、一家の家事を全て担う身なら当然髪を切るのもお手のモノなので休みの日を機に是非と、説得をするのだがユキナはまるで我が子を庇う母親のように一瞬の隙も見せない。

「髪を切るのが何故ダメなんだよ？　いい加減切っても可笑しくないだろ？」
「嫌なのは嫌なの！　私の髪はもうちょっと長くなってから切るのがセオリーなの！」
「おまっ、俺と会う前はどうしてたんだよ？」
「それはもちろん床屋さんにいって揃えてたわよ。だからあと一ヶ月待って！」
「一ヶ月も今も変わらないだろうが！　何か気になるんだよ、会ったときより１０ｃｍくらい延びてんだぞ？」
「い～や～～だ～～」

まるで親子のようなやりとりである。
ユキナの髪はそれはもう、つい触りたくなるような不思議な艶を奏でており、よく手入れがされていると一目で分かるほどの綺麗な髪で確かに切るのには少々躊躇いがいる。
だが、ここで引いてしまうと自分のこんなチャンス「ＭＯＴＴＡＩＮＡＩ」（もったいない）精神が許さず、面倒なことを後回しにしたくない潔癖性の所為で足が自然とジリジリとユキナに寄る。
それに対してユキナもジリジリと後退。

「五センチでいいから、さ？」
「やだ」

ズタタタタタタタタタッ！
ユキナ、途端後ろに振り返って逃走開始。
ズドドドドドドドドドッ！
護熾、すかさずハサミを机の上に置いて捕獲行動に入る。

「待ちやがれユキナ！　二センチはどうだ！？」
「一ミリでもやだ！」

するとユキナは二階の護熾の部屋に向かって延びている階段に向かい始め、護熾もそれに続いて階段に向かう。すると二人がやかましく上るため家中に音が響き渡る。
そんな中、食卓のイスに座っている人物が口を零す。

「あ～もう、うっさいわねえ二人とも」

腰まである黒髪、凛とした顔立ち。
一言で言えばユキナと同じく美少女で、スタイルは一目瞭然でこちらの方が良く、身長も高い。

その少女、イアルは今し方自身の携帯電話のような形状の通信機でメールを覗き込んでいた。
F・Gで風紀委員長の彼女には同じく風紀委員のギバリやリルからしょっちゅうメールが来る。
内容は大体問題の解決策の要請や、学校の近況報告などが主だが
――――――

「ん？　……あー、そういえばもうそんな時期か…」

先程送られてきたメールの返信文を書きながらそう呟く。
『分かった。二人に言ってみる』と書き終えた後、パタンと閉じてから席を立ち上がる。
そして廊下の方に趣き、ガララと引き戸を開け、そして壁に少し寄りかかり、誰かを待つように佇む。
そして十数秒後。

「いい加減観念しろユキナ！　今切れば当分切らないで済むだろ！？」
「う～！　嫌なのは嫌なの！　この髪切り魔！！」

足音を立てながら廊下を駆け抜けようとする二人が見えたのでイアルは壁により掛かるのを止め、腕を一回グルンとし、何かの準備体操のようなモノをやったあと目の前でユキナが駆け抜け、そして次に来る人物に向かって、

「海洞ストップ！」
「おわ！？　ってぐっっはあああああ！！」

見事ユキナを追跡していた護熾に強烈なラリアットをかまし、オマケに向こうも走っていたのでダメージが倍増され、首にえも言わ

ぬ衝撃が奔り、後頭部から派手に倒れ込む。
一見あまりにも危険だが彼女はそんなことお構いなしで倒れた護熾にしゃがんでから話しかける。

「ねえねえ海洞、ギバリ達からあるメールが来たんだけど……」
「痛って！！……ごほっ！　……げほっ！　おまっ……止めたいなら声を掛けろよぉ～」
「いいのよ、風紀員として男子が女子を追いかけている行為は見逃せないから」
「……さいで」

正論を言われた護熾は渋々と身体を起こし、床に胡座をかき、何だ？　と尋ねる。
それを見計らってイアルの方も話したいことをさらっと伝える。

「明日F・Gで大会が行われるんだけど来ない？」
「大会って……何の？」
「簡単に言えばF・Gの生徒達で腕を競う大会。誰が一番強いかを決めるの」
「そんなのあるのか？　……ってそういえば」

最近割とゴタゴタしていたので忘れていたが、イアルはF・G最強のガーディアンなのだ。
その実力は開眼状態でない眼の使い手達を超えるので特に、護熾は相手をしたくない。
大会の形式はトーナメント式で参加者は生徒内で自由。
使用武器は訓練用の武具限定で重火器は爆弾はNG。
対戦者が降参を申し込んできた場合、それを認めることができる。
それ以外は正式な審判の判定か、武器飛ばしなどの試合続行不可の判断で勝者の判定を決める。

それ以外にも細かいルールはあるが、もちろん眼の使い手は規格外なので参加は認められてはいない。
会場はＦ・Ｇで、予選は三階の戦闘訓練場で行い、そこで上位三十名が最上階にあるスタジアムと呼ばれる場所で優勝を争う。

「さしずめ夏休みの時が文化祭なら今回は体育祭だな……」
「何々？　もうそんな時期？」

夏休みにシバの代わりに何故かイアルの訓練を引き受け、殺される思いをしてきたのをじわじわと思い出してきた護熾に、逃走どこか行ってたユキナが話を聞きつけて二人の元へ来る。
イアルはやって来たユキナにそうよと返事を返すと、早速護熾に催促する。

「ねえ護熾いこいこ～」
「え～？　めんどくさっ、ってか一樹と絵里を残しておくわけにはいかねえし……」
「全部見なくてもいいじゃない。因みに私は予選（シード）免除だし。昼過ぎくらいに行けばいいよ」
「別に俺は、Ｆ・Ｇの生徒達のイチャコラに興味ねえし」

元々あまり野球の試合やサッカーの試合を観ない護熾にとって興味の対象には成りえない今回の大会。
一方、ユキナはどうにかして護熾との思い出作りをしたいので一つの提案を出す。

「そんじゃあさ～一緒に行ったらその後で髪を切らしてあげるよ」
「何っ！？　マジか！？　……いやいや所詮髪切りのために行くほど俺も暇じゃねえよ」

思わずユキナの言葉に反応してしまうが、護熾は首をブンブン振って否定する。

「え～、海洞って顔からして何かこういう血の気がありそうな大会に興味ありそうなのに……」

「うっせえっ、顔で判断すんじゃねえ！　俺は行かねえかんな！」

護熾はそう言うとスクッとその場を立ち上がり、昼何を作るのかを考えるために台所の方に歩み始める。

こう言った以上、頑固なので本当に行かないのだ。

そのことが分かっているユキナははぁ～と溜息を付き、イアルも同じく溜息を付きながら立ち上がるとポッケに滑り入れ、何かの引換券を取り出して顔の横に出す。

「……ユキナの髪切りプラス、四日後にある秋季商店街大安売り祭の――――」

その言葉に護熾がビクンッと台所に向かおうとする足を止める。

その引換券を見たユキナは心の中で『おおっ！』と目を輝かせ、イアルもそれに気が付いて顔を向けてにやりと笑う。何か勝利を確信したかのような微笑み。そんな感じ。

そしてこちらに背を向けたまま硬直している護熾に向かって顔を戻し、こう言ってあげた。

「お米券があるんだけど見に来てくれたらあげないこともないよ？」

護熾、大会観戦決定の瞬間であった。

そして翌日。
イアルは準備を手伝うため昨日のウチに戻っており、一樹と絵里を心配させたが護熾が心配するなと言ってあるので問題はない。
午後は一樹は友人宅へ遊びに、絵里も友人宅兼護熾依頼の買い物をするので二人に夕方には家に戻ってこいと言い付け、二人は出かけた。

それから三十分後。
眼の使い手の生まれる発展都市ワイトに着いた二人はユキナの母ユリアに挨拶を済ませ、既にF・Gの前に来ていた。
なるほど本当にやってるみたいだな、そう零した護熾は一度ユキナの方に顔を向ける。

「……これ終わったら本当に髪切るからな？」
「わ、分かってるよ！　それよりほら！　いこういこう！」

あんなに嫌がっていた髪切りをこの大会で犠牲にするなんて本当に何て言うか……祭好きだよなこいつ。
昨日打って変わって態度の違うユキナの背中を見ながら歩き、後を追いかけるようにすると丁度カードリーダ付近に三人、二人の姿を見かけると大きく手を振ってこちらに近づいてきた。

「おうっ！　護熾！　ユキナ！　よく来たな！　今は丁度準決勝が始まる前で時間が少しあるんだ」
「すごいもんよイアルはん。相変わらずの暴れっぷり、むしろかなりパワーアップしてるもんよ！」
「上の方で一番良い席がありますのでそこにいきましょうユキナさんカイドウさん！」

そう言いつつ二人をエレベーターに案内する人物は少し短めの髪で身長は護熾と同じほどの少年とガーディアンの制服を着た大男と同じく制服姿の眼鏡を掛けた小柄な少女。
名を順にラルモ、ギバリ、リルと言い、このウチラルモは称号『琥眼』を持つ眼の使い手の一人である。
一方ギバリとリルはイアルの幼なじみであり、友好関係上彼女と同じ風紀委員に入っている。

「あ～もう準決勝か～～あんパン買う暇ないよぉ～」
「何か思ったより予定が早くなっちゃったんだよな。降参者が割と多くて」
「カイドウはんとイアルが再戦すればそれはそれですごいことになるだけど……」
「！　誰があいつともう一度戦うんだよ！？　怖えーよ！」
「でもこの大会の大目玉になることは間違いありませんね！」

そんな談話を続けながらエレベーターに乗り込み、そして最上階の方へ向かう。
エレベーターのランプが最上階を示し、そしてドアが開かれる。
そしてドアが開いた直後、大きな歓声が耳に届いた。

スタジアムに天井はなく円形に切り取られた青空があり、心地よい日差しを全体に降り注がせている。
そして観客席は生徒達で溢れ、今行われている試合に夢中であった。
そしてその試合会場はというと――――分かりやすく言うならばサッカーや野球のスタジアムみたいな感じになっている。ただ一つ、透明な厚さ五十センチほどのアクリル板が試合を行う場全てを覆っている以外は。

「あの特殊アクリル板があるのは眼の使い手が此処を鍛錬場に使って周りに被害が出ないようにするためだよ。それに試合中って結構武器が飛んだりするからそれも兼ねてるんだぜ」

護熾の疑問に答えるかのようにラルモが言う。

「へえーそうなのか？」
「そうそう、結構丈夫でよ。でも第二解放でやったらどうなるんだろうかね～～。ま、とりあえずこっち来いよ」

そうポツリと言い、二人を観客席に案内した。

「あ！　ユキナ！　それと護熾さん！」
「やっほミルナ！　そしてアルティ～～～ぎゅ～～」
「ユキナ、よく来たね」
「おっ！　護熾、ユキナ来たか。」
「ご無沙汰ですシバさん。……よぉガシュナ」
「ん？　……なんだ貴様か」

「そういえば何でてめえがいるんだ？　こういうのは疎いんじゃねえのか？」
「ミルナが来たいって言ったんだ。もし参加者が怪我をしても大丈夫なようにな。俺は付き添いだ。」
「ああそうかい」

三人が案内してくれた一番前の席にお馴染みのメンバーが揃っていた。
まず一番奥から、髪はショートカットで手には本、顔立ちの良い少女で感情があまり表れておらず、目は半分ほど眠そうに閉じている称号『柴眼』のアルティ。
そのすぐ隣にユキナと身長が変わらない髪の色が薄茶色でウェーブのかかったふんわりとした長い髪の毛を持った少女で称号『輝眼』のミルナ。
そして護熾とは明らかに仲が悪そうな会話をしたのが、つまらなさそうにミルナの隣で腕を組んで座っている少し長めの黒髪で、三白眼と端整な顔立ちの少年は称号は『蒼眼』のガシュナ。
そして最後に、怒った護熾を宥める無精髭で歳は三十代前半ほどの黒髪の男性はワイト軍の特別戦闘管轄部隊隊長を務め、同時にF・Gの教師でもあり、今は過去のトラウマの所為でなれないが一応開眼者、称号『玄眼』のシバ。

「あれ博士は？」
「あいつなら今日は仕事で来れないそうだ。」

護熾はキョロキョロと辺りを見渡して一人いないこと聞くとシバがすぐに答えた。
おそらくは強化服の設計や微調整で忙しいのであろう。
護熾はそうか、と一言だけ言うと開いている席にソッと腰掛けた。
それからユキナも護熾の隣に座って何か思いついたかのような口

調で言った。
「そういえば斉藤さんも連れてくれれば良かったかな？」
「……いや、止めといた方が絶対良い。ハラハラしっぱなしそうだから」
「それもそうだね。おっ、準決勝が始まるよ」

ユキナの言うとおり、試合の場となるスタジアムの方に二人の人間が移動していた。
その二人の姿が出てきたとき、盛大な拍手がスタジアムを包み込んでいった。

『“さーてっ、とうとうあと残り三試合となりました！！　みんな気合いを入れて見ようぜ！！”』
（……ん！？）

スピーカーから試合が開始される放送が流れるが聞き覚えのある声で思わず護熾は怪訝顔で驚く。
そしてどこで喋っているのかを探すとスタジアムのフィールドの観客席の下の空間の控え室にテーブルとマイクが置かれており、試合に参加しないガーディアン達が切り盛りしているのが分かるが一人だけ制服を着ないでマイクを握って観客の生徒達に向かって言っていた。

『“みんな！　楽しんでっか！？”』

ワー！　ワー！　ワー！　ワー！　ワー！　ワー！

『“もうすぐ準決勝だ！　これまで残ってきた四人の生徒に盛大な拍手を送れ送れー！”』

「あいつ、いつの間に……」
「おおっ、ラルモいいポジションに居おって〜」

護熾とユキナが見ている視線の先には自分達を案内してくれたラルモがいつもどおりのテンションでマイク握って観客全員に呼びかけているところであった。
二人には知らされていないが大会運営のプログラムの進行係は彼なのだ。
生徒達はいよいよこの大会のクライマックスを迎え入れたことを噛みしめたのか、ラルモの言葉に盛大な歓声で応える。いわゆるお祭状態最高潮ってところである。

「ま、ラルモが一番こういうの好きだからな。」

そうシバは嬉しそうに呟く。
護熾はそんなシバを見てから顔を前に戻し、そして改めて観客から拍手で迎えられている準決勝で戦う相手に目をやる。
一人は一目で男子だと分かり、腰に長剣のような武具を差している。
もう一人は髪の長さから女子だと分かり、そして顔を見たら一目で分かった。
それからギバリ、リルに顔を向ける。
「そういえばお前ら出ねえのか？」

「ええっと、何て言うか、人相手に戦うのってちょっと苦手なもんよ」
「ギバリは優しいんですよカイドウさん。因みに私のは戦うと怪我が免れないので……」
「……そういえばお前爆弾使いだったな」
あとイアルが怖いから、これが二人が出ない大半の理由であった。

一方準決勝まで勝ち残った唯一の女子、イアルは対戦者をじっくり見ていた。
スタジアムの中央は楕円のフィールドになっており、さらにその中に直径二十メートルほどの円形の空間があり、それ以外は非常にスッキリ、何もなかった。
試合はその円の端と端にお互いが立って、試合開始の合図で始める。
イアルの相手は男子。制服から同じガーディアンと分かる。
持っている武器は今までの参加者が使ってきたのと同じ殺傷力を抑えた長剣を一振り。
それを見たイアルは何を思ったのか折りたたんだ状態の鎌を横に投げ捨てると後ろ腰に差していた同じ長剣を抜き、それを構える。
「？　それでいいんでしょうかイアル班長さん」
「当然でしょ。相手と対等の方がいいし、鎌じゃ色々と剣相手に小回りが利かないから」
しめた、と対戦者の男子はそう思った。
彼女は鎌使いの中では学園一だが長剣使いならば経験上練習も鍛

錬もこちらの方が費やしている。
それに彼女は鎌で今まで勝ち残ってきたので急な武器のシフトで戦術の切り換えもままならないはずである。
しかも女子。鍔迫り合いならば力で勝り勝機を見いだせるはずだ。
そう思うと、少しだけ安堵の表情が綻ぶ。

それから少しして観客がやがて静まる。
ピーーーーッ！
その瞬間試合の開始を告げる、笛の音がスピーカーから響いた。

「うおおおおおおっ！！」

ほとんど同時に男子が飛び出し、横に剣を向け、イアルに向かって疾走する。
イアルはその様子を見ながら、柄に少しだけ力を入れる。
そして男子がイアルの一歩手前で踏み込み、力を込めた横薙ぎを繰り出す。
これだけの力を女子が不慣れの長剣で受け止めれば必ずやバランスを崩し地面に倒れるであろう。
それが彼の読みなのだが、突如見当違いに何かが割れるような音が近くで響き、そして彼の顔を何かが掠って飛んでいった。

「……あれ？」

男子はしばらく何が起こったのか分からず、手元に残ったものを見た。
それは長剣と呼べる代物ではなく短剣以上に短り、重さも以前より軽くなった武器がそこにあった。

「ええーっと……」

そう呟いてイアルを見る。
彼女の体勢は剣を振り抜き終えたような感じであり、手には日光で輝く剣が握られている。
男子が一歩踏み込み、そして剣を振り抜いた。イアルはそれに応じて一瞬で振り抜く。
たったこれだけのことで男子の持っていった剣はへし折れ、刃は今はフィールドに突き刺さっているのだ。
あの捨て去った鎌を拾えば……男子はそう思ったがその前に決着をつけられてしまう恐れもあるし第一何の考えも無しで鎌を投げ捨てるような相手でもないのでうかつに動くことができない。
そしてイアルは少し溜息を付きながら切っ先を男子の喉に向ける。

「降参、する？」

イアルがそう聞くと、

「すいません、そうさせて下さい」

男子は直ぐさま答えた。

「……化け者か、あいつは」
「おお～～すごいねイアル～」
「わあイアルさん！　また秒殺ですよ！　すごいねガシュナ！　ア

ルティ！」
「まあイアルはんだったら何の心配はいらんもんよ」
「まあね、イアルは本当に戦い相手じゃないとああやってこきゅっと折っちゃうモンね」
「でもそうやって相手の自信もこきゅって折っちゃうから困るんだけどね」

一瞬で決着の付いた準決勝の試合の各々の感想。
普通に考えて一瞬の判断で一瞬のウチに剣をへし折るなど並大抵な凡人ができるわけがない。
それができるからこそイアルは先輩もいる中でＦ・Ｇ最強なのだろうが。
イアルは自分への黄色い歓声がアクリル板越しに聞こえる中、ふとこちらを見ている眼の使い手達に顔を向ける。そしてその中で護熾の姿を見つけると、女の子らしく微笑んでみせる。
一見、珍しく可愛らしい笑みだったが護熾はその笑みにどこか違和感を持った。
何て言うか、あんま良い予感がしないような、護熾は顔に少し青筋を立ててそう思った。

そして決勝戦――――は当然の事ながらイアルの勝利。
流れはと言うとまず大戦相手の男子（同じくガーディアン）は背中にイアルと同じ折りたたみ式の鎌を装備し、手には槍を持っていたのだがまず初撃で槍自体が折られ、続いて背中の鎌を取り出したが良いが出した瞬間に今度は間合いを攻められ、いつの間にか持ち替えられた長剣を喉元に向けられていた。

『良い？　鎌は確かに攻撃範囲は広いけど、こうやって間合いが近いと役に立たなくなるのよ』

そう言って剣を引き、『どうする？』と聞くと当然相手はこう言った。

『……参りました』

こうしてこの後この大会はプログラム最終ナンバーのメダルの授与式に移り、一位から二人の三位まで色の違うメダルを授与しＦ・Ｇの学園長から表彰されるという形式でこの大会も終幕を迎える――ハズなのだが……

「さ～て、んじゃメインイベントを始めましょうかね」

剣を後ろ腰に仕舞い込んだイアルは暫定二位の男子に一瞥をくれてやった後、顔をラルモがいる大会運営放送の方に向ける。それからキビキビと歩みを始め、運営放送の方に向かう。

それに気が付いた試合に参加しないガーディアン、及びラルモは不思議顔でこちらに来るイアルを見る。

『“え～、イアルどうした？　試合は終わったよな？”』

「ちょっと貸しなさい」

スピーカー越しから尋ねて来たラルモに対し、イアルは軽く言って手からマイクをブン盗ると振り返って観客席の方に顔を向ける。

観客の生徒達は暫定一位の校内最強の少女の突然の行動に注目し、しばらくざわついていたがやがてこのざわめきの中心の少女の言葉に耳を傾けようと一斉に静かになった。

「……何か嫌な予感」

護熾はそう零す。

やがて、イアルによる全生徒に向かってのスピーチが始まる。

『“皆様、今大会にお越し下さり誠にありがとうございます。私は風紀委員長兼ガーディアンのイアルです”』

スタジアム会場のスピーカーからよく通る声が響く。

『“私は、予選免除と運良くこの本会場で試合をし、何とか優勝できましたが……――――”』

何とかぁ？　と、生徒達のそんな感想。

『“そして誰が勝ち残るかを予想して密かにお菓子を懸けている全教職員もいるなか……――――”』

全く大人って奴はよぉ――――――生徒達からの感想その２。

『“何とか無事に終えられそうですが予定より三十分も早く終わりそうなことに皆様はどう思いますか？”』

そりゃー、ねえ。

思ったより早めに終わってしまう学園の行事に生徒達は互いに顔を見合わせて呟く。

腕に自信のある者同士が力を競い合う。これほど人間の奥底の欲求を満たす大会でこの終幕は実に惜しい。だが降参者が今回多かったこの大会（主にイアルの対戦者）が幕を閉じようとしている。

ではこの余り時間、じゃあ彼女は何か良い案があるのか。

そんな期待が一斉に集まる。
生徒の期待の視線を浴び、にやっとしたイアルはマイクの持っていない手を高く上げ、人差し指を出す。
『“なのでこの余った時間、優勝者の権限として――――――”』
そして腕を振り下ろしてある方向に指を差す。
その指先に生徒達の視線が注目し、そして見る。
『“海洞！！　私と戦いなさい！！”』
「いいっ！！？」
嫌な予感が的中した瞬間であった。

三週目目　現れた異変

「あれって確かイアルに勝った眼の使い手？」
「再戦？　リベンジ？」
「来てたのかあの眼の使い手！？」
「まさかこの場でそんなイベントを行うのか？　でも眼の使い手は出られないんじゃ」
「いや、でもあのイアルなら眼の使い手の方が丁度いいハンデなんじゃない？」

イアルの指さした方向に視線を注目させた観客席の生徒達はかつて学園祭の前に戦闘訓練場でイアルを開眼しながらも打ち負かした少年の姿を発見し、伝言ゲームのように観客席を駆け巡っていった。
一方、この騒動の中心にいる護熾はたまったものではない。

「あ、あいつこのために俺を呼んだのか！？」

そしてこの大会に出向いてしまったことを後悔した。
いや、確かに秋季商店街大安売祭のお米券に釣られてきた自分も悪いけどさ、こんなのは聞いてねェ！！
準決勝であの時見せた微笑み、おそらくイアルは昨日誘った時点でこの大会のプログラムが早めに予想し、そして的中通りこうして三十分近くも早めに終わり、しかも生徒達の欲求不満に答えるためにこうしたメインイベント用意していたのだ。

あの夏の日、初めての眼の使い手との戦いで初めて土を付けたのが護熾本人。
性格からして負けず嫌いそうなイアルにとって今日この状況は打って付けだった。

「イアルそんなこと考えてたんだ……でっ、護熾どうするの？」
「逃げる！」

ユキナに尋ねられ、即答で返事をした護熾は席を立ち上がり、振り返って急いでこの場から逃げようとする。イアル、残念だけどお前の思い通りには――――そう思いながら早速逃げようとすると、

ガチャンッ

「すいませんカイドウはん。」

振り返った瞬間、ギバリの申し訳なさそうな声と共に両手に突然重みと金属音が耳に届く。
へ？　と護熾は気の抜けた声を出し、見下ろして見てみると両手首に銀色に輝く手錠が施され、さらに手錠の鎖には引っ張り連れるために二本ヒモが付いている。
唖然。
そして手錠を掛けた張本人ギバリに怪訝そうな顔と一体これはどういうことなの？を混ぜたような表情で説明を求めると、

「いや～、実はイアルにプログラム進行上、必ず時間が空いちゃうから何か無いかと昨日聞いてみたもんよ。」
「そしたら『私に良い案があるから待ってなさい』って返事があってね。そして今日、イアルにカイドウさんが逃げないように見張り兼取り押さえを頼まれて……」

「お前ら！　初めからグルだったのか！？」
「グルというより、被害者と呼んでほしいもんよ」

ヒモを持った二人からの説明を受けながら、手錠を掛けられた護熾は二人に付き添われながら現行犯のように連行され始める。
だー！　もうっ本当はこんな手錠なんかぶっ壊して逃げたい！
と、護熾は直ぐさま頭に浮かび上がったが、何というか、今両脇にいる二人からどうか逃げないで欲しいという気持ちがヒモを伝ってヒシヒシと伝わってくる。
此処で逃げればこの二人が被害に遭う。
実に良心が痛むことなので自然と逃げようなどと言う考えは融かされていき、観念したようにガックリと肩を落とした。

「ごめんなぁ、こうしないとイアルに……」
「はいはい安心しろ。俺は逃げねえよ。……っていうか眼の使い手は出ちゃいけないんじゃ？」
「それだったらイアルは学園長から許可を得ているし、第一カイドウさんは眼の使い手“代行”ですからその点は大丈夫です」
「……はぁ」

大きく溜息を一つ。一体どれほど手際と盲点を突いているのだろうか。
こうして護熾は他の眼の使い手達に背中を見送られながらあっという間に連れて行かれてしまった。

「……いや、まあ貴重な体験だからいいのかな？」

ガックリと肩を落として連れて行かれてしまった少年の背中を見

ながらシバはそう言い、他の眼の使い手達に顔を向ける。するとミルナが両拳を作ってハキハキと言う。

「だ、大丈夫ですよ護熾さんは、きっと上手い方法で終わらせると思いますよ」

「それは相手があのイアルだと知っててての発言か？」

「え？　あ……あぅ～～～」

ガシュナの注意に思わず顔を赤くして恥ずかしくなるミルナ。

一方、ユキナはジーッと護熾が出てくると思われるフィールドの出入り口を睨むようにしていた。

その様子に気が付いたアルティが尋ねてみる。

「どうしたの？　ユキナ……」

「うんアルティ……何かさ……」

ユキナはどこか不満げで、何か嫉妬しているような表情で目の前にある手すりに顎を載せると頬を少しだけ膨らませ、フィールドを見下ろしながらボソッと一言だけアルティにだけ聞こえるように零した。

「ずるいって、思うんだよね～」

「あっはははは！！　護熾お前災難だな～！」

「うるせえ！　だったらお前代わりに出ろよ！」
「お前がご指名だから俺はその傍観者だ。ま、精々気をつけて」
フィールドの出入り口から出てきた護熾は出てくるなり早速爆笑中のラルモに声を掛けられ、このようなやり取りをするが今回は観戦者だ主張され、元の席に戻られてしまう。
ラルモが背を向けたときと同時にギバリが手錠が外され、両手が自由になる。
護熾は軽く両手首を振る。
そしてギバリとリルからどんな武器がいいのかを聞くと、
「いらねえよ。俺の戦い方は基本を素手だし」
「で、でもそれじゃ不公平じゃあ」
「俺は眼の使い手、全身武器みたいなもんだ。……それに」
そう言いつつイアルの方に顔を向ける。
「何とか説得してとっとと終わらせたいんで、じゃあな」
そうして渋々とスタジアムの中心の円に赴いていった。

「よっ、海洞。ご機嫌いかが？」
「……お前それわざと言ってんのか？　斜めだよ。……このために俺を呼んだのか？」
「まあね、夏の時のリベンジってとこかしら」

円の縁で互いに向かい合うなり会話をする二人。
やっぱり、と護熾はそう思い後ろ頭を掻きむしる。

「……だったら何でこんなすんげー人目に付くとこでやんの？　適当な時間見つけてやればいいのに」
「それじゃあ私が勝ったときの保証人はどうなるのよ？　夏の時だって生徒いっぱいいたじゃない。だったらその時と同じ条件で戦いたいの。海洞、準備はいい？」
「へえへえ、説得は無理そうだなこりゃ」

最早、意気揚々の状態のイアルには説得のせの字も聞き入れないだろうと確信した護熾は軽く溜息をついてそして改めて辺りを丹念に見渡した。
三階の戦闘訓練場のフェンスで囲まれたフィールドよりは遙かに広い。
なるほど、眼の使い手の鍛錬場にはもってこいの場所だな。
そしてアクリル板のドーム、その向こうに試合の開始が今か今かと始まっている観客達。
その観客達から『眼の使い手はずるいよ！』や『イアルをもう一度倒せ！』や『二人とも良い試合を見せて』などなど様々な思考の言葉が飛び交っていた。

『“ああー、お二人とも準備はいいか？”』
「いつでも」
「とっとと始めてくれ。終わらせたいから」

スピーカーからラルモに聞かれ、二人ともそれぞれ返事をする。
二人の返事を受け取ったラルモは一度観客のざわめきを宥めてから、

『“えー長らくお待たせ致しました。時間の都合上、本大会の優勝者イアルとええ～っと、あ、そう呼ばせてんのかあいつ？　ごほんっ、眼の使い手のカイドウとの試合が始まります。尚、この試合は学園長から既に許可をとっており、今回だけの試合となっているようだぜ！　それでは……試合の合図を”』

ピーーーーッ！

その瞬間試合の開始を告げる、笛の音がスピーカーから響いた。

最初、両者は動かなかった。

観客達が見ている中、護熾は改めて聞く。

「なあ、やっぱ止めにしね？」

「その言葉、お断り！」

そしてイアルは猛烈な勢いで背中の折りたたんだ鎌を取り出すとそれを解除しながら護熾に鋭い踏み込みを放つ。一瞬で間合いを詰められた護熾は少し驚いた顔で身を一歩早く引く。

護熾が身を引いた瞬間に抜刀した鎌の刃先が護熾の額に少し掠る。

振り抜いたイアルはその場で回転するように遠心力を逃がして直ぐさま体勢を立て直す。

護熾は後ろに下がりながら、両手を地面についてスピードを殺して止まる。

そして同じく体勢を戻すとイアルはこちらを指さしていることに気が付く。

「海洞、開眼しなさい。今のあなたの状態では私には絶対勝てない」

「お前、俺が普通の奴に開眼で行くわけねえだろう。前にも言ったよな？　開眼は人を傷つけるものじゃなくて――――」

「分かってるわよ。でもあなたは前回開眼状態で私に勝ったのよ？

だから開眼状態で戦わないと私が勝っても意味がないの。」
「お前ホント好戦的だよな〜〜、……でも確かに開眼状態じゃなきゃお前に勝てなさそうだな。ただ気を高めた状態でも俺気の操作下手くそだからすぐ切れるし……お前、ホント強いな」
「！！　……バ、バカ、褒めたって何もその……」
「？　どした？」
「う、うるさい！！　とっと開眼しなさい！！」
「へいへい」

どうやら前よりもっと腕を上げているのは先程の斬撃と踏み込みから大凡推測した護熾は仕方なしに一度息を吸って、吐く頃には既に姿が変わっていた。
黒髪と瞳が鮮やかなエメラルドのような翠色に変わり、身体から同じ色のオーラが包み込むように溢れている。観客達はイアルの相手をしている少年の姿は先程と大きく違うことに大いに驚き、目が釘付けになる。イアルは姿の変わった護熾を睨みながら、両手で鎌の柄を握りしめる。
「……ホントになってくれたのね……これで思う存分、戦える！！」
そして再び踏み込んで鎌を構え、一直線に――――護熾がいきなり目の前に現れた。
「え？」
まるでテレビの映像が飛んだかのように、鎌の有効範囲よりも内側に既に護熾は来ていた。
「お前さっき対戦者に鎌は間合いが近いと意味がないとか言ってい

たような。だからそうさせて貰っ……たっと！」

そして左手で鎌の刃を掴むと語尾を強調しながら一気にガラス細工を握りつぶすかのように砕く。

鎌の刃の部分は見事に砕け、そして亀裂が後から続いて最早只の鉄の棒となる。

刃がただの鉄片となり、地面に散って跳ねる光景に観客達はその規格外な行動に思わず感嘆の声を漏らし目を見張る。

「くっ……！」

ただの鉄の棒ではこの男には敵わないと思ったイアルはすぐに柄から手を離すと同時に後ろ腰に差している長剣を取り出そうとすぐ手を回して掴み、引き抜くがその鍔の上に刀身は載っていなかった。

「え……何で？」

「ルール上、武器は武器の役目を果たさないとダメなんだよな？」

護熾がそう言い、右手に根本から折った刀身がつまみ上げられていた。

その事にイアルは驚愕の表情を隠しきれず、生徒達の方も唖然としてその光景に驚いた。

開始一分でこの結果。パッパと決着は誰の目でも明らかだった。

しかも先程までのイアルの対戦者の立場が今度はイアルに降りかかっているのだ。

護熾は最初から思いっくそ戦おうなんて思っては居ない。

それは分かっていたことだが以前の護熾にはこんな芸当はできなかった。

おそらく、死を自らに取り込んだ結果第一解放自体の能力も大幅に向上したのであろう。

護熾は手に持った刀身を後ろに適当に投げ、投げた刀身は弧を緩やかに描いてそして金属音を立てて静かになる。

「どうする？　降参するか？」

「……」

（こりゃー、来るかな？）

前回の夏の時には負けたことが悔しくて自分でそれを認めず素手でまだ来たことがあったので護熾はそれを覚悟しつつ何時来ても大丈夫なように防御の姿勢をとる。

イアルは折れた剣をジッと見つめたまま顔を俯かせている。

そしてそれを力なく地面に落とし、護熾は反射的に身構える。

だが来たのは蹴りでも拳でもなく――――――鼻を擽る甘い香り。

「あっ！」「あっ！」「あっ！」「あっ！」

不意に生徒達から驚きの声が上がる。

生徒達の視線の先には――――――護熾の胸にイアルの頭が載っている図があった。

「な、な、イ、イアル～～」

時同じくして、その光景に目を奪われたユキナはとうとう我慢できなくなったのか、みんなが釘付けになっている隙にこっそりと席を抜け出した。

「いやあの……どうしたイアル……さん？」
「……」

今起こっている状況で観客はもちろん、一番驚いているのは護熾以外の何でもない。
護熾はコツンと頭を突いたイアルにどう対応すればいいか分からずあたふたと慌てる。
これは一旦、身体を離した方が良いな。
そう判断した護熾は肩を掴んで離そうと手を伸ばすとそれと同時にイアルの顔が上がった。

「ふふっ」

上がった顔には前回のように負けた悔しさでいっぱいの表情ではなく嬉しそうな微笑むだった。
護熾はその表情を見て、ますます混乱に陥る。
イアルは護熾の胸板から頭を離すと元の姿勢に戻り、顔を合わせて言った。

「やっぱ負けちゃった。開眼状態のあなたはやっぱ強いね」
「え？　え？」
「参りました！　降参！」

ハキハキとした声で笑顔でそう答えたイアルの言葉に護熾、及び観客の生徒全員が驚愕する。
あのイアルが降参を申し出た！？
護熾はしばらくイアルの言葉を信じられなかったが、やがて息を飲み込んでからゆっくり言った。

「……意外だな」
「ま、私だって本当はあなたを追いつめて第二解放まで解放させたかったわよ。でもね、よかった。あなたが強いことを再認識できたから」
「???　それは、どういうことだ？」
「どうにもこうにも言ったまんまよ。それに、自分で言うのも何だけど私だって少しは強くなっているのよ？　分かる？」
「ああ、それはな」

現世の方で生徒のほとんどが敵の異空間に連れ去られたあの後、此処にいる眼の使い手と一蓮托生の思いで敵を撃破し、連れ去った張本人も撃破したと安堵した瞬間、護熾がユキナに降りかかった閃光から身を張って護り、一度は命を落としたのだ。
そして護熾は、あまりにも信じられないことだが胸に“真理”という現理に代わる新しいこの世の秩序のおかげで自分を後から追ってきた“死”をも取り込み、寿命半年間しかないという人生を今は送っている。
だから、だからこそ、彼に護ってもらうなんてことはされたくない。
護ってもらった結果、この人がもう一度命を落とさないように――

「その前に海洞、あなたいつまで開眼状態なのよ」
「あ、そういえばそうだった」

意外な状況に我を忘れていた護熾はまだ開眼を解いていないことを指摘され、気付いたので早速解除をしようと力を抜こうとしたときだった。

耳に届く誰かがこちらに軽快に走ってくる音。

その音に気が付き振り向いた瞬間、ドーム内に差し込まれた光で反射する一筋の銀色の刀身。
それを紙一重で横に回避した護熾は直ぐさま体勢を立て直しつついきなり襲ってきた相手を睨む。
そして、睨み表情から一転して驚きの表情に切り換える。

「ユ、ユキナ！？」

自分に攻撃を仕掛けた人物――――既に瞳も髪を鮮やかな夕陽を思わせるオレンジ色になった少女ユキナが振り下ろした武具『紅碧鎖情ノ太刀』を戻し、護熾と改めて対峙する。

「ちょっ、ユキナ！？　あなた何してるの！？」
「イアルだけずるい！　私にも護熾と戦わせてよ！！」
「なっ、それはちょっと横暴よ！」
「ずるいずるいずるいっ～～～！」

そう言って刀をブンブン振って頬を膨らませてイアルに返事をする。
それから、イアルにしか聞こえない声で話し始める。

「……私だって、イアルと同じように護熾に思い出あげたいもん。そのためにこんなイベント用意したんでしょ？」

残り半年の寿命ならば、自分も同じように思い出を作ってあげたい。
ユキナにとって、護熾は大切な人。
なので今回のこの大会が護熾とイアルだけの思い出になるというのは無性に歯痒く居ても立っても居られなくなる気持ちになるのだ。
だからこそ半ば強引にイアルにそう申し出る。

一方、いいところを邪魔されたイアルは少し腹が立ったが、彼女もまた自分と同じ“気持ち”の身、それを思うと分からなくはないし、何しろ決着は付いたのだ。
これ以上自分がこの場を引き受けるわけにはいかないのでゆっくり、ソッと言った。

「……さすがというか、同じ気持ちだと見破られやすいのね」
「だから私も戦いたい。いい？」
「……急な話ね。でも、確かにこんなに早く決着ついちゃうなんて予想外だったから勝手にすれば？　私じゃ海洞本気にさせられそうにないし……」
「イアル……」
「ん？　何？」
「その……ありがと」
「お互い様でしょ？」

そう言い、イアルは護熾を一瞥してから、二人の邪魔にならないようにラルモ達のいる運営放送の持ち場に歩みを向け始めた。

「イアル、どうだった？　護熾と戦って」
「ええ、彼は相変わらず強いわ。手も足も出なかった」
「で、ユキナが出てきたけど何て？」
「私にも戦わせろだって。まあ、時間もまだあるし互いに眼の使い手だし、安全対策は万全だから任せたの。ほら、私一応実行委員の一人だから大会を盛り上げなきゃ行けないの。だから放送で言ってあげなさいよ。」

「ああ、ハイハイ　ごほんっ『“ええ～、カイドウＶＳイアルの試合がカイドウの武器破壊によって予想以上に早く終わっちまって、何と代わりにかつて武人と呼ばれた英雄の娘、ユキナが対戦を申しつけてきて、プロローグ通りの時間調整のため、皆様にカイドウＶＳユキナの試合をしてもいいかと尋ねるが、どう？　みんな？”』

マイク越しから観客達にそう尋ね、生徒達は互いに顔を見合わせてこの想定外の試合に目を丸くするばかりであった。

あの英雄の娘が？　あの眼の使い手と対決？

しかし、眼の使い手同士の戦いはほとんどの生徒は観たことがないので自然とその答えは一向性のモノへと変わっていった。

是非見てみたい。

かつて街を一つ救ったことがあるあの翠の少年と英雄の娘、一体どちらが強いのかを。

「あわわ、ま、まさか護熾さんとユキナが戦うなんて……」

「大丈夫、危なくなったら止めに行けばいいから……」

「はっは、まさかこんな面白い展開になるとはね。楽しみだな」

「シバ先生、随分楽しそうですね」

絶対に怪我するのではと懸念するミルナはアルティに顔を向けて意見を求めると優しく返事が返ってくる。

一方珍しく子供のように楽しそうな表情のシバにガシュナがそう訊く。

「彼女のなら護熾の本気を出させてくれるかも知れないし、何よりも護熾が第二解放を見せてくれる貴重な場面だ。それにはガシュナ、君も興味あるだろう？」

「……確かに、さっきまでの此処の生徒達の試合よか、楽しめ

そうだな」

そう言って二人に視線を戻す。

一体あの日、どんな第二解放を発現したのか、あの男が、どうしていとも簡単に対怪物最終奥義の領域を踏み越え、さらにユキナの話によるとあまつさえ、それすらを超える力を持っているというのだ。

それはおそらく解放させないだろう、だからとくと見せてもらおう。

そう思い、イスを座り直した。

「あの～～～俺もう帰りたいんだけど……」

「ダメダメ、許可も下りたし、第一進行上ここで時間潰さないといけないらしいから」

「そこでお前が出てこなくても……あ～もうっ」

イアルの次に現れたユキナにげんなりとした護熾が言う。

しかしユキナは闘気満々で軽く準備運動なんかを始めちゃっている。

「で、何でお前なんだそういえば？　お祭で気分で火がついたのか？」

「う、ま、まあそんなとこ。それに……護熾の本気が見たいしその……」

「その？」

「い、いいのいいの！　ほら行くよ！！」
「って、ちょっ、おまっ！」

始まりの合図の前に、ユキナが武具を携えて前に飛び出し、護熾がそれに気が付いてしゃがんだときには頭上を銀色の刀身が横薙ぎで通っていく。
髪の毛が数本、切られて翠色から元の黒髪に戻って、地面に落ちる。
ユキナは右手で振った刀を今度は左手に持ち替えてそのまま護熾に向かって振り下ろす。
護熾はそれにもすぐに対応して後ろ向きにその場から飛び出す。
すると先程まで居た場所にユキナの一撃が繰り出され、刹那、爆音と共に土煙がその場を支配した。
生徒達はその光景に口を開けてポカンとし、騒然とした。

「おお、すっげ！　大丈夫かな護熾」
「平気でしょ、彼なら。」
「おおっと、イアル、少し引っ込んだ方がいいぞ」
「？　どうして？」
「まあまあ、俺の言うこと聞いてくれ」

不思議顔のイアルの背中を押しながらラルモは非難させるようにベンチの方へ移動していった。
そして顔だけ振り向かせ、もくもくと立ち上る土煙を見る。
一瞬だけ、土煙が赤く光った。

「ごほっ、あのヤロ。マジで殺す気かよ！？」

土煙の中で咳き込んでいた護熾は目に入った砂を指で拭いながら周囲を警戒する。
周囲は赤茶色の空気がその場を支配し、目を細めて集中力を増す。
今は土煙で互いに見えない、ハズ。
そして――――見つけた。

「おいユキナ！　てめえ怪我したらどうすんだ！！」

気力探知で大凡の方角を割り出した護熾はその方角に向かって指をビシッとさし、大声でクレームを叫ぶがとうの相手からは返事はなく、そのまま数秒が経つ。
そして数秒後、何かが猛烈な勢いこちらに向かって来ていることに気が付き、何だ何だと指を指したまま土煙を睨む。
そして――――

＞i4630―237＜

突如斜め上から二連撃の紅と蒼の“疾火(しっか)”が周りの土煙を巻き込みながら護熾に向かって飛び出し、護熾は唖然としたままその爆発に巻き込まれた。
突然の爆発に観客達は目を見張り、驚愕の表情を隠せずに居られなかった。
そして、煙が少し晴れた頃、フィールドから１０メートル地点に誰かがいることに気が付き、そちらに目線を向ける。
ギザギザの緋色のコートを羽織り、身体から火花を出し、片手に刀を携えた少女が足から作った気の足場で土煙を見下ろしながら、その場に佇んで浮かんでいた。
第二解放、二人目の第二解放者。
時折溢れるオレンジのオーラは見るものを圧倒し、同時に神々しく見える。

「……来る！」

土煙を見下ろしていたユキナは嬉しそうにそう呟き、そしてそのまま見る。
すると土煙が巻き上げられるように、渦を作り、そして周辺へとサーッと流れる。
静かに、ゆっくりと煙は周囲にばらまかれ、そしてその中心にそれはいた。
「たくっ、派手な爆発の割りには威力は全然ねえな。まんまとなっちまったよ」
身体に付いた土を手で払いながら立ち上がり、見上げてユキナの姿を捉える。

常磐色の袖無しのコートを羽織り、全身から翠色の火花を放ちながら立ち上がった護熾は後ろ頭を掻き、それから丹念に辺りを見渡す。
そして、観客席の眼の使い手一行を見つける。
「……よく見ててくれよな」
そして顔を再びユキナに戻す。
「ユキナ、やってやろうじゃん。ただし試合じゃなくて修行ってことでいいか？」
「いいよ、でも私の方が強いと思うよ？　……準備はいい？」
「……いつでも、そして改めてよろしく。」
「こっちこそ、よろしく――――」
観客の生徒達は第二解放状態になったあの少年の姿に驚きの表情を隠せないまま固まっていた。
まさか、二人目がいたとは。
どよめきの波が起こる中、ガシュナは護熾の姿をマジマジと見て、少し驚いたように目を細める。
「あれが護熾の第二解放か……すごいもんだな」
シバがそう呟き、他の眼の使い手の意見を聞くために顔を見る。
アルティは、いつも通り。ミルナは、素直に驚いて護熾とユキナを交互に見ている。
すると突如、ドームが揺れた。
何事かと思い、シバが顔を前に戻すとフィールド内が既に土煙に覆われて見えなくなっており、凄まじい轟音が中で響いていた。

ダンッと地を蹴り一気に間合いを詰め、護熾の右拳が茶色い風を切って、ユキナの顔に延びる。
ユキナは護熾をモノともせずにあっさりと体を左に向け、拳がオレンジの髪を掠めたと思ったら護熾の顔面に蹴りが飛んでくる。護熾はそれを両手で受け止め、その衝撃で風が生まれ、煙が吹き飛ぶ。

ようやく煙の中に姿を現した二人に生徒達が握り拳を作って歓声と共に大騒ぎする。

こちらが攻撃した瞬間のカウンター、うおっ！　と護熾は背中を仰け反って蹴りをギリギリ回避。
だがこんな程度でユキナの攻撃が終わるはずがない。
続いてトンと軸足を持ち上げ、蹴り上げた足を軸足にしての続けざまの回転蹴りが護熾を支えている足に延び、見事ヒットして護熾のバランスが崩れる。
そして速さを生かし、すぐにユキナは後方に高速で移動すると刀を横に構える。
ユキナから発生したオーラが刃先に集まって超高密度の生体エネルギーが生み出される。
そしてそれを打ち飛ばすように、横に思いっきり薙ぎながら叫んだ。

「疾火！」
「おっと危ねえ！」

すぐに護熾は空に手をついて体を無理矢理そちらに転がすように回避し、瞬間、距離を縮めてきていたユキナの蹴りが空間を切り裂く。護熾はそのままバックステップでユキナとの距離を大きく取り、滑りながらやがて止まり、集中を利かせた表情で見据える。

このやり取りがおこなわれた後、避けた疾火がアクリル板のドームに直撃し、地震のような揺れを観客席にプレゼントしていた。

「……護熾、もう少し本気が見てみたい」

親しい人間が強くなることはユキナにとってはこの上ない喜びである。

その表情は誰が見ても嬉しそうで、可愛らしい微笑み。

護熾は一瞬呆気に取られるが、そのあと楽しそうに笑う。

「まさか、第二解放同士で組み手とは、こりゃいい汗掻けそうだぜ。」

そして呟いた刹那、さっきと逆の順で今度はユキナが一気に間合いを詰め、鯉口を切って刀身を滑らせ、護熾から一歩手前で踏み込むと一閃の居合い抜きがそこで生まれる。

護熾も瞬間、腰に差してあった小刀を逆手で途中まで抜き、黒い刀身で斬撃を受け止めると続いてユキナの体を捻っての回転を加えた斬撃。

生徒達があまりにも人間離れした戦いに言葉を失っていようとも構わず続ける。

「楽しそうね、二人とも」

イアルが二人の様子を見てそう呟くと同時に護熾も即座に短い刀身で器用に攻撃の矛先を変え、打ち払う。

しかし直ぐにユキナの剣撃が護熾を襲う。

何度も何度も、とてもリズミカルに、しかし連撃はどんどん速くなっていく。刀身がぶつかり合い、火花が何度も散って護熾は苦悶の表情になるが心の奥底は決して苦しいなどとは感じない。

……重い斬撃、相変わらずだ

ほくそ笑むようにユキナの斬撃を弾いた護熾はユキナに飛び込んでその表情を見せる。

するとユキナは心を読んだのか、同じく笑ってシュンとその場から残像を残して掻き消えるといつの間にか距離を大きく取って対峙するように刀を持った手をぶら下げて、佇んでいた。

「……護熾、次で決めるよ。」

「……ああ、いいぜ」

次に一撃で二人の試合のケリをつける。

ユキナは片手で振っていた刀を両手で握りしめ、一撃で決める態勢に入る。

護熾は刀身に手を当てて、ふうと深呼吸をして集中力を高めてから瞼を開け、右足を少し引く。

剣術ではこちらが上、もしかしたら怪我をさせてしまうかもしれない。

それでも行こう、良い思い出になるはずだ。

生徒達が息を呑んで見守る中、覚悟を決めた両者は距離を一気に縮め――――そして土煙が辺りをもう一度覆った。

「どっちだ？　どっちが勝ったんだ！？」

「お、俺あの可愛い女の子の方！」

再び湧き起こった煙が晴れようとしている中、生徒達は各々の勝負の行方を口に出す。

勝者はあの英雄の娘か、イアルを秒殺したあの少年か。

そして数十秒掛けて、その答えが見えてきた。

その答えは――――両者とも立っていることで解った。

数十秒前、護熾とユキナは互いにぶつかる瞬間、両者とも急ブレーキをして攻撃を中断していた。
別の気配が、両者の間に突如現れたからだ。
そして煙が晴れ、二人が突然止まった原因がそこに現れる。

胸に酷く怪我をした、鎧を身に纏った同じくらいの歳の少年が、無造作にそこに倒れていた。

四週目目　虹の少女推参

太陽、雨、月、流星、――――虹

ああ、私は此処にいる。
太陽によって作り出されるこの橋に、私はいる。
太陽とは反対の方に、私はいる。
この場所は、私が決して望んだ場所ではない。
私の下には、灰と血が浮かんだ地上しかない。
それを私は、仮に世界と呼んでいるのだ。

少し冷たい風が、蒼天から降り注ぐ太陽の光と相殺し、丁度良い温度の流れを町や住宅街に運んでくる。
そしてその住宅街の中、車の通りが少なくなる二時頃、やや長め

のショートカットの少女が買い物袋に買ってきた品物を確認しながら住宅の垣根沿いの道を歩いていた。

「ん～、これで間違いないと思うから、大丈夫だよね？」

誰に話すわけでもなく、そう呟き、そして品物の確認を終えた千鶴は袋を閉じて太陽を背に歩く。

今日は土曜日。倹約家の母親に部活から帰ってすぐにお使いを頼まれたのだが、それを快諾して商店街に行き、頼まれたモノを買いに行ってきたとこである。

中身のたくさん入った持参のバックを揺らしながら歩いていると、やがて一軒の家が目に留まり、その玄関門の前で足を止める。

その表札には『”海洞”』と書かれており、数秒後、

「元気でやってるかな？」

そう一言だけ言い、歩みを再開する。

何しろこの家には異世界の人間が二人も居候しているのだ。家族が二人増えて、それを一人で切り盛りしているあの人は、相当すごい。

そんなことを思いながら次の右の曲がり角に足を進め、曲がったところで、それはいた。

道端の方で、誰かが倒れている。

少し離れているのでよく分からないが、やや赤めの長髪と顔立ちから少女だと分かり、鎧のような防具を身につけ、そして全身切り

傷などでボロ雑巾のようになっていた。

「……！　大変……！」

直ぐさま千鶴は駆けつけ、少ししゃがんで少女を見る。
少女の足の方には這った跡があり、血が渇いて線になっていた。
千鶴は一度少女に意識があるかどうか顔に触れて起こそうとするが起きず、ならば安全な場所へと脇下に頭を入れて支えながら立ち上がり、買い物袋を支えていない方の手に持つ。

「しっかりして、手当してあげるから」

しかしここからでは自分の家に行くまでに少女を介抱したままいくのは困難だと気が付き、頭の中で混乱したが先程前を通ったあの家なら何とか、いいや絶対入れてくれるだろうと思い、そちらに足を進め始めた。

必死に暗闇の中を逃げていた。

黒い影が後ろに迫ってくるからだ。あれは敵わない、強すぎる。
だから逃げた、血を分けた家族を必死に捜しながら、逃げていた。
ふとした拍子に足を踏み外し、転んでしまう。
ルッ、ルルルルルルルルルルルルルルッ
「うわあああっ！！　来るな！！　来るな！！」
あの無機質な生物とは思えない泣き声がすぐ後ろで響き、すぐその場から逃げるように立ち上がって走り出す。ここが一体どこなのか、分からない。
しかしとにかく、この暗闇から出て行きたかった。
そして前方に光が見え始める。そこへ足が千切れ飛んでもいいくらい、思いっきり速度を上げて地面を踏み込んで走っていった。そしてそこへ飛び込み――――

ゆっくりと意識が浮上し、目が覚める。
そして温かい日差しに包まれたような温もり。身体は何か柔らかいものに乗っかってるような感覚。
目を開けて、ゆっくりと身体を起こす。暖かい、毛布が前へとずり落ちる。

「……此処は、どこだ？　確か僕は、胸を刺されて……」

ハッキリしない視界の中、首を動かして現状を確認する。
知らない天井、知らない壁、窓、椅子、机、ベット、ドア、簡単に言えば自分は知らない場所で寝かされていると言うことだ。

とりあえずここから降りよう、そう決めて足を動かそうとしたが異様に重い。
何かが両膝の上を押さえつけているような感覚があったので少し驚いてそちらに視線を改めて向ける。
カーテンから差し込む光で、綺麗な黒髪を一層艶出させた可愛い、又は凛々しい顔立ちの小柄な少女が寝ていた――――正確にはヨダレを遠慮無く垂らしながら幸せそうに顔を横に向けて突っ伏し、寝ていた。

「この子は……？　いっ……！」

手を伸ばして起こそうと身体を曲げると、胸に静電気がいくつも奔ったかのような鋭い痛みが襲った。見ると身体に包帯が巻かれており、誰かが手当をしてくれたらしい。
これは、ということはやはりあれは……
あの悪夢は結局本物であり、この胸の傷は何よりの証拠だった。

そういえば姉さんは何処に？　その疑問が頭に浮かび、辺りをもう一度見渡そうとすると、突っ伏して寝ていた少女がムックリと無言のまま腕立て伏せで身体を持ち上げるように上半身が十センチベ

ットから離れた。よだれを腕で拭っている。
それから少しキョロキョロと寝ぼけ眼で辺りを見渡すと少女の大きな目の黒い瞳に自分が捉え、そして何故かベットの上をほふく前進でこちらに向かって移動し始める。

「あ、あの君は……誰？」

こちらに向かって身体の上の毛布を這ってこちらに移動してきている少女に少年は尋ねてみるが一向に止まる気配も答える気配もなく、ただゆっくりと移動してくる。
そしてとうとう少年の真ん前に来る。
少年は不思議顔でその少女の顔を見る。
今は寝ぼけているが、改めて見ると何て可愛い顔をしているのだろうか。
そんなことを思いながらふいに身体が押し倒される。
？？？
この少女が自分を押し倒したのだ。そして、首に手が回され始める。
その突発的な行動に思わず顔を赤くするが、

「え？　ちょっと！？　痛い痛い痛い！」

少女の遠慮のない抱擁が自身の胸の傷に響き、気持ちを正直に吐き出し少女の背中をペシペシと叩いてギブアップ宣言を出すが、肝心の相手はそれを聞き入れずギュ～～ッと抱き締めてくる。

「あ、あのつかぬ事をお伺いしますが……離して下さい」
「う～～、ごおき～～、どうしたの～？　……えへへ～」
「あの、言葉分かりますか？　……痛いです」
「ふみゅぅ～～」

謎の甘えた可愛い声で、少女はスリスリと少年の胸に遠慮無く頭を押しつける。
少年にとって痛い以外の何でもなく声にならない叫びがブンブン振られる手が代弁していた。
だが、やがて少女の方も意識がハッキリし始め、徐に頭ゴシゴシ攻撃を止め始めると、

「う～～……う？　……あれ？　……護熾じゃなかった」

ようやく目を完全に醒まし、そして自分がやったことを思い出すと急に恥ずかしくなったのか怪我人である少年から毛布を剥ぎ取り、それを身体に素早く巻き付け、見事な毛布団子を少年に披露する。
一方、勝手に抱きつき、頭ゴシゴシをやった少女の次から次へと行う行動に口を開けて唖然としており、そしてそのまま暫し動きを止める二人。

「……」
「……」

やがて恐る恐る、少女が毛布から顔を出し、少年を見る。

「あ、あの、ごめんね？」
「いいえ、それよりあの～、此処は一体？」

コンコン

「う～っす、目を醒ましたか？」

ドアのノック音が響き、そして別の少年の声がし、ドアが開けられる。
入ってきたのは少女と同じ黒髪で、不自然に眉間にシワを寄せたような表情をしている少年で、二人の姿を見るとその状況にますますシワを寄せた怪訝そうな顔をし、

「何やってんの？　ユキナ」
「べ、べ、別に変なことやってないよ護熾！」

毛布団子の状態で一欠片の信憑性のない言葉を言ったユキナが顔を赤らめて、護熾にそう叫ぶように言った。

「で、あなた達は一体……？」

身体の向きを横にし、ベットに座った少年は顔をゆっくりと右に動かしながら、その場にいる全員に一瞥を向ける。この部屋には先程スタジアムのフィールドに倒れた少年が目を醒ましたとの情報を聞きつけて、眼の使い手全員、及びガーディアン数人を含む人がいた。

少年に質問された全員は互いに顔を見合わせ、代表にシバと休憩の合間に来たトーマがその質問に答える。

「俺たちは眼の使い手だ」

「眼の使い手……！？」

「そうだ……君は？」

「……」

眼の使い手という言葉に驚いているのか、それとも単にこの場にいる全員を信用できないのか、少年は押し黙ったまま喋ろうとしなかった。

十数秒、進展のない中、

「あ、あの～、傷の方は？」

怪我のことについて気になったのか、ミルナがヒョコッとガシュナの後ろから顔を出し、傷の具合について少年に尋ねる。すると少年はその言葉に反応し、

「ああ、これなら大丈夫です……あなたがしてくれたのですか？」
「え、ええ」
「治療の技術がすごいですね。一体どうやって」
「あ、あのそれは私の治癒の能力でして……」
「治癒？　あなたは、眼の使い手ですか？」
「あ、はい」
「簡単に素性を明かすなミルナ、そして得体の知れない、まず、貴様の正体を明かせ」

少年とミルナとのやりとりの間に鋭い声が入り込む。
少年はその声の主に顔を向けるとガシュナが少年の方にこれまた鋭い眼光を向けていた。

「お前は突然、スタジアムの方に現れた。何の拍子もなくな」
「？　突然、現れた？」
「そうだぜっ、俺は間近で見てたから分かるけど、お前突然現れたんだぜ？　しかも胸に大怪我背負ってよ。そういえばボロボロになった着替えと鎧みたいな防具はこっちの椅子に置いてあるよ」

ラルモが指を指した方向には確かにイスに掛けられたボロボロの衣服と胸当たりに大きな損傷をした鎧があり、静かにその場に収ま

っていた。
それを少年は暫しの間見つめ、そして苦しそうに目を細める。
それから、やや睨み付けるような視線になり、その視線を全員に向ける。
静寂の空間が出来上がる中、

「……やっぱ、大人数で此処にいるのは不味いかな。警戒されているようだし」
「……そうだな」

少年の様子からこの部屋に大人数でいるのは不適当だと感じたのか、シバとトーマは周りの人にどうしたいか？という眼差しを向けてみる。

「此処は、一対一の方がいいんじゃねえか？」

護熾からそんな意見。じゃあそれは誰がいいか、ということになると。

「それだったら護熾とガシュナは止めといたほうがいいな。脅迫みたいになるから。なんちゃって！」

ラルモからそんな一撃。
するともの凄い形相で般若のようになった両者が同時にラルモに

振り向き、凍てつく波動をプレゼントする。そんな茶番はともかく、アルティは男子に対しては無口になるのである意味拷問になってしまう。ラルモはその逆になるであろう。ミルナは仕事があるし、第一逆にミルナが参ってしまう場合がある。

と、なると護熾、ユキナ、ガシュナ、シバ、トーマ、イアル、リル、ギバリの七人になる。

「あ、じゃあ私が残るよ。さっき迷惑かけちゃったし」

そしてユキナが自ら残ると主張し、とりあえずユキナに任せようということで互いに顔を見合わせ、残りのメンバーは何かあったらすぐ呼ぶようにと言い付けた後、その部屋を後にして二人きりにした。

「えっと、じゃあ自己紹介。私の名前はユキナ。称号”烈眼”を持つ眼の使い手です。」

「……烈眼のユキナさんですね」

「え～っと、さっきはごめんね。つい寝ちゃって……毛布汚しちゃって……」

「……大丈夫ですよ。僕は、うん僕なら……」

一人残ったユキナが椅子に座って、ベットの上にいる少年に話をするが、返事はしてくるものの若干曖昧であった。やっぱり私じゃあ話してくれないかな？　それとも、舐められているのか？
ユキナはそんなことを思い、う～ん、と頭を少し抱えて悩んだポーズをする。
その仕草に気が付いた少年はユキナをジーッと目の前の少女を見つめる。

思えば、此処で目覚めたとき少女は自分のような見ず知らずの男に対しあまりにも無防備であった。その後に起きた謎のゴシゴシ攻撃は置いといて。
それに有無言わずこうして手当も施してくれた。
敵意はない、むしろ友好的だと判断した少年は肩の力を抜き、目の前にいる少女に向かって言った。

「カイト」
「う～ん……え？　今なんて？」
「カイト、僕の名前だ。」
「カイト？　カイトっていうの？」

ようやく名を明かしてくれた少年に、ユキナは満面の笑みで喜ぶ。
太陽のような笑み、カイトはその笑みを見て、驚くと同時に不意に顔が赤くなる。
今まで見てきた少女達に比べ、ダントツにいい笑顔。こうして幼い姿だが、将来はきっと美人に、美人に？　そういえばこの子歳いくつくらいだろう？
そんな疑問が頭に浮かんだのでとりあえず恐る恐る訊いてみる。

「あ、あの～」
「ん？　何？　カイト」
「と、歳はいくつで？」
「！　む～～～、私はこう見えても１６才だから～～」

どうやら相手は自分の外見を見て年下だと思ったようでこの質問で顔を膨らませたユキナは拗ねたようにうるうるした瞳で上目遣いで睨むが、寧ろ可愛く見えてしまう。
カイトもカイトの方で歳の割に幼……いや若いことに驚き、さらに機嫌を損ねてしまったこの少女に大いに慌てて別の話題に無理矢理移そうとする。

「え、えっとすいません！　僕と同じ歳ですね。えっと、一番肝心なことを聞き忘れたのですが……――」
「ん～～？　何？」
「此処、どこですか？」
「ああ、此処はね、ワイトの中央病院だよ――――」

「え！？　海洞くんとユキちゃんと黒崎さんは出かけてるの！？」

少し前、道端で怪我をした少女を運んでいた千鶴は海洞家の玄関を尋ね、今護熾の弟の一樹と妹の絵里が護熾達が出かけたことを話していた。

千鶴は本人がいない今、勝手に赤の他人を押しつけるわけにはいかないと思い、困り果てるが、二人は千鶴の困惑振りと怪我をした少女の様子で察しが付いたのか、

「と、とりあえず上がって斉藤さん！　護兄にはあとで何とか言えばいいんだし！」

「あたしのベットにとりあえず寝かせようよ！　救急車とかその後にでも！」

「え？　いいの？　じゃ、じゃあこの人ベットに寝かせたら私一回家に戻ってからもう一度来るから、ありがとね！」

二人の応対に感謝の微笑みを浮かべた千鶴は、玄関を上がり、絵里の案内で部屋に運び、そしてゆっくりと仰向けに寝かせる。そして鎧のような上半身を覆っている防具の留め金とベルトを外してみると、脇腹当たりが血で滲んでいた。しかし怪我の具合は幸い、出血が少し多い程度で瘡蓋が既にできあがっていたので、軽い消毒とパットを貼り、千鶴は一旦、家に戻った。

「ワイト？　……此処が？」
「うん。結構有名な街なんだけど、知らない？」
「ワイト……此処が、ワイト」

此処は一対何処だと聞いたカイトはユキナからの返答に目を丸くし、首を回して辺りを見渡す。
自分が知っているワイトにはこんな施設はないし、第一見たことないモノだらけのハズがない。
しかしこの少女が嘘を付く義理もない。

それでも真相が知りたいカイトは一度、ユキナの意に介さず部屋の外を見るためにベットから降り、目を見開いて窓の縁に両手をかけ、身を乗り出すように窓から外を見る。
やはり此処は知らない場所。自分が育ち、身に感じてきた環境は一切、ない。

「ど、どうしたの？」

カイトの突然の行動に驚いたユキナは、恐る恐る訊く。
だが返事はなく、縁にかけた手がフルフルと小刻みに震えるだけであった。

「ここが……」

不意に、呻くような声でカイトは言う。窓の縁がミシッと変な音を立てる。

「ここが、ワイトのハズが……」

そしてユキナに不意に、その表情を見せる。
さっきまでの表情と打って変わり、まるで憎しむばかりのような憤怒の表情でユキナを睨み付ける。
その様子に、思わずユキナは時間が止まったかのように固まってしまう。

「此処がワイトのハズがない……だって僕の知っているワイトは……――――――ここは何処なんだ！？」

怒号のような声がユキナに向かって放たれ、ユキナはビクッとするが、慎重な声で言う。

「わ、私はあなたの言っている意味が分からない……ここはワイトよ？」
「嘘を付くなァ！！　此処はどこだ！？　姉さんも居るはずだ！！」

「姉さん？　ねえその姉さんって誰なの？」

完全に不乱に陥ったのか、冷静さを失ったカイトはユキナを敵と見なし、殺気立った感情を容赦なくぶつける。彼の知っているワイトがこんな場所ではないことは本人が一番分かっている。

ならば此処は別の街か敵国なのだ。

いや、正確には他の街は自分達眼の使い手を欲しがるため、自分の街以外では信用が行かないのだ。

「ちょっ、落ち着いて！　私は敵じゃない！」

「口では何とでも言える！！　姉さんを返させて貰うぞ！！」

ユキナの言葉は虚しく聞き入られず、カイトは指をさし、そして身体に力を入れる。

カイトの髪が、金色に変わってオーラを纏い、眼も同時に同じ色になる。

開眼状態。

ユキナはカイトのその姿に驚きを隠せず、目を見開いて見つめる。

「あ、あなた開眼者なの？　そんな、私達以外に開眼者なんて……」

「それはこっちの言葉だ！　開眼者は僕と姉さんの二人だけ！　情報を吐き出して貰うぞ！」

カイトは叫ぶように言いながらユキナを睨み付け、そして一度両手を合わせるようにする。

そして両手を離すと手と手の間から金色の気が精製され、そしてそれが火花を撒き散らしながら形が精製されていくと、やがて長さが二メートルほどの槍の穂先に斧頭、その反対側に突起（ピック）が取り付けられている棒状の武器、ハルバードが片手に収まる。
眼の使い手特有の気からの武具精製。

それに呆気に取られたユキナは、一瞬だけ動揺の表情をとる。
カイトはその隙に負傷させないようにするためにハルバードを回転させて突起の部分をユキナに向け、胸が針を刺すような痛みを伴っても関わらずそれを胸の方に向かって突く。
ユキナは一瞬遅く反応したときには既に突起が胸を突く瞬間であった。
ここで突かれれば小柄な身体は簡単に後ろに吹っ飛び、壁に叩きつけられ、あとはその隙に捕まえてこちらの言うことを聞かせればいい。そう考えていた。
目の前で、突起のついた短い棒が弧を描きながら飛ぶまでは。

「え……？」

呆気に取られ、世界がゆっくりと流れる中、鮮やかなオレンジ色の髪が、さらりと目の前に流れる。
そして金色の眼に映ったのは、綺麗に短くなったハルバードと、小柄な少女の大きなオレンジの瞳、そして一瞬で横切る銀色の刀身。

……な、何だと

こっちは確実に相手の一瞬を突いて攻撃をした。
それはこの少女が例え眼の使い手であろうと、避けられないハズだった。

しかしこの少女は一瞬で変貌し、一瞬で自分のミスを取り戻すほどの速さで開眼し、抜刀し、難なくとこちらの武具を斬り捨てたのだ。

不意に、ガラスと何かが割れる音。
カイトのハルバードが斬り捨てられ、武具としての形を為さなくなり崩れた瞬間、背中から誰かに押し倒され、そして体重が思い切り乗る。
金色の少年が振り向く前に、両手が床に押さえつけられ、束縛した状態になる。
そして後から、ガラスが床を叩きつけるけたたましい音が鳴り響く。

「念を入れておいて良かった」
「貴様がいなくとも、俺一人で十分だったんだがな」
「やっほーユキナ大丈夫か？」
「ユキナ……！」

窓のガラスを蹴破って入ってきた開眼状態の護熾、ガシュナ、ラルモ、アルティのうち護熾とガシュナはカイトの両腕を封じ、ラルモは手を軽く振ってカイトの背中に乗って全身を封じ、アルティは珍しく心配そうな表情でユキナに近づいて我が子のように抱擁する。
次々と現れた眼と髪の色がさっきまでとは違う五人を見て、驚いた表情で言う。

「開眼者……！？　話は、本当だったのか……？」
「それより貴様は何者だ？　その姿、開眼そのものではないか？」
「じゃあ此処は……本当に……ワイ……ト」
「ん？　おい、こいつ……」

声が段々と掠れていったカイトに護熾は顔を覗き込ませようとすると、その瞬間、気を失ったかのように床に頭を打ち付けて、髪と瞳を元の色も戻し、そのまま動かなくなる。
見ると、開眼の反動と無理矢理身体を動かしたことが災いしたのか、胸に巻いた包帯から血がにじみ出してきており、それが床を濡らしていた。

「シバさんの言う通りにしていたから、何とか大事には至りませんでした」
「うん、それにしても、この子が眼の使い手だって？」
カイトをもう一度寝かせ、ミルナを呼んで治療の間、眼の使い手だけで集まった病室では先程のこの少年の開眼について話していた。
病室は窓が四人によって破壊されたので別の場所である。

「それで、ユキナは何か聞き出せたのかい？」
「はい、その人の名前はカイトって言って、何だかこの街のことをよく知って居るみたいで……」
「カイト？　カイトって言ったのかい？」
「え？　あ、はい」

幸い怪我を一切しなかったユキナから聞いたこの少年の名前にシバが目を丸くして驚く。

「どうしたんですか先生。」
「いや……どこかで聞いたことがあるようなんだが……まああとで自分で調べるかトーマに訊いておくよ」

カイトと名乗った少年を寝かせておき、明日にもう一度訊いてみる、大丈夫、俺が見張っておくからいざという時は何とかするよ、っとそう言い、今日は戻ると良いよとシバにそう言われ、ガシュナはもう一度こいつが起きてミルナに被害が及ばないか心配だから一緒に見張り、ラルモとアルティは寮へと戻ることに決めてその場にいる全員に別れの挨拶を告げた。

「んじゃあ、俺たちも一度お前の母ちゃんのとこへ言って、それから帰るか」
「うん、そだね。」

護熾とユキナも一樹達が待つ家に戻るため、シバに挨拶をし、そして病室を後にした。
余談だが、このどさくさに紛れてこの場にいた全員は、この前の学園祭より片付けの量の少なさも相まって今回の大会の片づけに参加しなくて済んだ。

陽が、少し沈もうとしていた。
西の地平線に、完璧な円をつくる光の塊が、あとほんの少しで隠れようとしていた。その右上には、宝石のような小さく赤い粒が輝く。
雲一つ無い空はオレンジから蒼、そして紫へと変化しながら、全天を覆っていた。

「ふ～ん、それは驚きね。あの男子が眼の使い手ね～」
「でしょでしょ？　私達以外にもいた何て驚き！」

異世界から現世へ、降り立った三人はとりあえず海洞家に向かって歩いていた。
今はもう４時半、一樹と絵里に言っておいた大凡の時間より遅れてしまったため言い訳を考えながら玄関の前まで来た。

「う～っす、ただいま一樹、絵里」
「ただいま～」
「ただいま～」

玄関のドアを開けながら、少し大きな声でそう言い、そして靴を脱いで上がる。

一方、その声を聞きつけたのか、廊下の方に慌てた足取りで五月蠅く玄関に向かって走ってくる音がし、三人はほぼ同時にそちらに顔を向ける。

「か、海洞くん！　ユキちゃん！　黒崎さん！」
「……？　あれ？　斉藤？」
「あ、斉藤さん？」
「あら、斉藤さんだ」

廊下を小走りでやって来たのが千鶴であったことに三人は眼を丸くする。
千鶴はやや遅れてから『あ、お邪魔してるね』とそう言い、それからなに不利構わず護熾の腕を手に取ると、

「海洞くん！　勝手に入れちゃってごめん！　でも怪我をしていたから……！」
「うおーい、一体何があったんだ斉藤！？」
「それは絵里ちゃんの部屋に来たら分かるよ！」

グイグイ引っ張っていき、玄関に二人を置き去りにしながら護熾に急いで来るように叫ぶように言う。
そして絵里の部屋まで強制送還され、そして名前の入った掛札のドアを開けると一樹と絵里が護熾が入ってきたことに気が付いて顔を向ける。

「あ、一樹、絵里、お前ら何でこの部屋に？」

護熾は二人にそう聞き、二人は言葉で返事ではなく、自分達が向けた顔の方向で返事をした。

それに釣られて、顔を絵里のベットの方に向ける。

顔に絆創膏を貼り、気持ちよさそうに寝ているやや赤めの色の長髪をした少女が、そこにいた。

護熾がその光景に固まっている中、あとから来た二人も顔を覗かせ、そしてその少女を発見する。

『”嘘を付くなァ！！　此処はどこだ！？　姉さんも居るはずだ！！”』

怒号のような、カイトの言葉が、ユキナの頭の中で再度繰り返された。

五週目目　三人目の居候

翌日、朝の日の光がだんだん強くなる頃、誰かが廊下を歩く音で目が覚めた。
陽の光を十分に吸ったシーツが全身を包み、惜しげもない温もりをくれていることに気が付き、それから首を動かして辺りの現状把握をする。
一言で言えば見知らぬ部屋と言ったところか。
とりあえず身体を起こすと、脇腹にチクリとした痛みが奔り、見ると包帯が上半身を隠すように綺麗に巻かれていた。

「……生きてる」

やや驚いたような口調で第一声を呟く。
それから一体何があったのかを額に手を当てて思い出すと随分な無茶をしでかしたことを思い出す。　すると壁の向こうからこちらに向かって歩く音が聞こえ、そしてドアが開かれ、明かりが付けられる。

見たこともない服を着た少年がそこに立っていた。
背は自分よりも高く、黒髪に眉間にシワを寄せたような不機嫌そうな表情、そして手には何やら湯気が立ったお椀が持たれている。

「おっ……」
「あっ……」

少年は起きたことに気が付き、少女は驚いたように動きを止めた。

「……」
「……」

見つめ合うこと数秒、まず少年から挨拶する。

「あ、えーと、起きたみてえだな……痛いか？　まだ？」
「え？　あ？　あ、……だ、大丈夫だ」

少女は少し慌てた口調でそう返事をし、警戒しているのか、シーツを口元まで上げる仕草をし、ジーッと少年を見つめる。いきなり警戒されたことに少年は仕方がないよな、と思ったかのような表情をし、それから思いついたように口を開けた。

「あっ、自己紹介まだだったな。俺は護熾、この家の……まあ今のところは家主ってとこか」
「ごおき、か？　えと私は……シルナ」
「シルナか、傷の方なら大したことはねえ。跡も残らねえし、因みに俺の友達がお前を此処に運んできた上に手当もしてくれたんだ、あとで呼ぶからそん時礼を言えよ」

絵里の机の上にお粥の入った茶碗を置き、向き直ってシルナにそ

う説明を付け加える。
一方、シルナの方はというと、こちらは怪我を負った身でしかも著しい気の消費で疲れがドッとたまった様な状態なので護熾と会話を交わしてみて、この人が敵かどうか判断する必要など無いと思ったのか、溜息を付きながら肩の力を抜いた。
この人に敵意はない、そう思った。

「あっと、そういえば……」

まだ動かないほうがいいぞ、とそう言おうとしたときだった。

グゴゴゴゴゴゴゴォォォ……

シルナのお腹が鳴った。

「……分かった分かった、お前のお腹の方が正直だな」

顔を赤くしてそっぽを向いたシルナに対し、珍しくニマニマ顔で茶化す護熾。
彼女の空腹を満たすために、レンゲをさしたお椀を机からとるとそれを渡そうと手を伸ばす。
シルナはそれに気が付き、そのお椀の中身を見て不思議そうな表情をする。

「別に変なモンじゃねえぞ。これは病人食って言ってな、消化にいいもんが入ってる。」

そう言いつつ護熾はレンゲで一掬いのお粥を自分の手の平に載せ、それを口に含んで食べてみせる。
護熾の証明により、シルナは空腹が限界になると奪い取るようにレンゲとお椀を受け取り、そして口にレンゲで一盛りしたお粥を運ぶ。
口に広がる軽く塩味の柔らかい食感、美味しいと思った。

「護熾～起きた～？」

ドア越しから声がし、シルナは一瞬だけ警戒態勢に入ったが、ドアから覗いた顔にすぐに解いた。
護熾に聞いたユキナはお粥を食べている少女が起きていることに気が付くとそのまま部屋に入り、護熾の隣に座って改めて顔を見合わせる。

「……君は？」
「あ、私はユキナ。分け合ってこの家に居候させてもらっています。どう、調子は？」
「おかげさまで……」

シルナはそう言って丁寧に頭を下げる。
そして顔を上げると、二人が必ず聞いて来るであろう予想していた質問が出される。

「ここは、一体どこなんだ？」
「えっとな、此処は七つ橋町って言う場所でな……ああっと、先に言っておくけど別に此処はお前の敵になる人間なんていねえし、むしろ探す方が難しいぞ。」
「ナナツバシチョウ？　聞いたことがない名前だな」

護熾の付け加えに一応は安心したのか、初めて聞く名前に眼を丸くしながらも納得したシルナはふと、思い出したかのように急に二人に尋ねた。

「そういえば私と同じくらいの歳の男を見なかったか！？　あいつは大怪我をしていて――――」

そう聞かれた護熾とユキナは一旦顔を合わせ、それからシルナの方に向いて言った。

「……カイトのことだな、安心しろ。あいつはワイトで最高の治療を受けてベットの上で寝ているよ」

護熾はこう答えながら、彼女の身につけていた鎧等なども含め、間違いなくカイトの姉だと確信する。

ユキナも同じくそう思い、護熾の言ったことを助長するように頷いて見せる。

それを聞いたシルナは身を乗り出しそうなほどの勢いで言う。

「ほ、本当か！？　本当に！？」

「この状況で嘘言っても仕方ねえし……とりあえず寝とけ。あんただって怪我はあいつに比べれば軽いけど十分ひどいから」

「本当に……本当に……よかった……！」

弟の安否を聞いたのか、シーツを両手で握り、顔を俯かせて、一筋の線を両眼から零す。

この人の言っていることは嘘ではない、そう信じた結果の涙だった。

一方安心して涙を不意に流してしまった少女に二人は大慌てで何

か拭うモノを用意し、それを渡そうと手を伸ばすと　ありがとうの一言で受け取られ、軽く拭われる。
　しばらくして涙が乾いたシルナはふと、不安げな表情でチラッと護熾の方を見る。

「そ、そういえばこうして助けられた身なのだが……生憎礼ができるモノを持っていないのだが……」
「あ～別に。俺はそんな見返りを求めているわけじゃねえから安心しろ。こっちもこいつとかあいつとか色々あんだよ。それより怪我人の分際なんだから寝な。トイレはこの部屋出てすぐ左にあっからな。じゃ、怪我が治るまでゆっくりと休むといい」
「あ、ありがとう護熾、ユキナ。しばらく世話になる」

　スラスラと長い言葉を言い添えた護熾はユキナも一緒に出るように言い、部屋から出るときは最後にユキナが微笑んで『じゃ、お大事に』と言ってからドアが閉められた。
　シルナはシーツを胸元まで手繰り寄せ、それをギュッと抱き締めてから、いい人達に出会えた、とどこかにいる神様に感謝した。

「……で、海洞はあのシルナって人を家に居させるわけ？」
「当たり前だ怪我人だぞ？　それに彼女がカイトとかいう暴れた奴の姉だったなら完全に元気にして二人を合わせればいい」
「そういえば護熾、私達を眼の使い手だって言わなくていいの？」
「それ言うとカイトの二の舞だ。今は伏せとこうぜ」

居間で合流した三人は昨日から看病しているシルナという少女が目覚めたことと、事情を飲み込んでこっちを信頼しているとのこと、そして至近距離から気を探ってみたところ眼の使い手かどうか怪しいと護熾が言う。

「怪我をしている場合は気力は極端に低くなるの。治癒に力が回るから操気法が下手な護熾には分からないかもね」

ユキナがそう言い、護熾は少し不機嫌そうな表情になった。

昼過ぎ、シルナはベットの上で聞き知らない玄関のチャイムに驚き、辺りを見渡して警戒したが、どうやら玄関の方で来客があったらしく、護熾の声がした後にこちらに向かって廊下を歩く足音が聞こえ始めた。

そして足音がこの部屋のドアの前で止まる。ドアの取っ手が捻られる。

そしてこの部屋に護熾と、初めて見る顔が入ってくる。

「あ、ホントだ。目が覚めたんだ」

千鶴は少しおどおどしながら昨日介抱した少女が起きていることに素直に喜び、シルナの寝ているベットの前でゆっくりとした動作で正座する。

シルナはこの家に来た少女を見て、それから護熾の顔をチラッと見て感づいたのか、すぐに軽く礼をしてから、

「じゃあ、あなたが私を助けてくれたという」
「え、あ、はい。えっと私は斉藤といいます。ま、まあ人として当然のことをしただけで……」
「さいとう殿か……私はシルナ。過程がどうあれ、あなたが私を助けてくれなければ此処にいるかどうか分からなかった。……感謝する。」

シルナはそう言って今度は大きく礼をする。
人から感謝されることに慣れていない千鶴は逆に慌ててしまい、チラチラと護熾の方にどうすればいいのかの助言を求めてきたので、とりあえず助け船を出してみる。

「ああっとじゃあ、礼も終わったことだからシルナは引き続き休んで、斉藤はウチでユキナとイアルとお茶とお菓子でも食べながら話しな。俺は一樹と絵里と一緒に買い物行くから」
「え？　あ、うん。」

それに従った千鶴は立ち上がり、シルナに『じゃあ、また会いに来るからね』と言ってから部屋を出て行った。そして護熾も出て行こうとするとシルナに声を掛けられる。

「ん？　どうした？」
「あの……いや、何でもない」
「そうか」

そう言い、護熾は買い物のために部屋の外へ出て行った。

「あ、あの海洞くん、本当に此処で預かって良かったの？」
「んぁ？　あー、大丈夫大丈夫。どうってことねえよ。あと一人くらいシルナ奴みたいなのが来ても余裕だから」

護熾が部屋から出た後、すぐそこで待っていた千鶴から声を掛けられ、緊急事態だったから仕方なかったが、やはり迷惑なのではと懸念して彼女はそう言うが、護熾は逆に飯の作り応えが出るだけだしな、と安心させたいのか平気なのかは分からないがそう言って見せ、そして丁度外へ行こうとしているイアルに目が止まった。

「お～い、お前どこ行くんだ？」
「えーっとね、ちょっとカイトの様子見に行ってくる」
「え？　おまっ、ちょっ！」

何気なく言った言葉に護熾は慌てて玄関まで走ってイアルの元に駆けつける。
イアルは慌ててやってきた護熾に少し驚いたような表情を向けるが、すぐ軽く微笑んでみせる。

「お前昨日どんなのが起こったのか忘れたのか？」
「安心して、二度目だし、それにシルナさんのことがあるから大丈夫だって。それにもし攻撃してきても対抗はできるからさ」
「対抗って……ユキナも連れてったらどうだ？」
「大丈夫大丈夫、心配かけすぎ」

一般人が故のイアルに対し、護熾は心配そうな表情をするが、そんなことお構いなしでイアルは早速外に赴いていってしまった。そ

の場に残された護熾は一度頭を掻き、それから踵を返して仕方なしに買い物袋を取りに台所へ向かった。

ポツンと三人が残った家は、少し寂しい雰囲気になった。
今この家にいるのは自分と、正体が分からない少女、そして自分と同じくあの人に思いを寄せる小さな少女――――

「そういえばユキちゃんはどこかな？」

この家にいるハズのユキナの姿が此処に来てから見てないと気が付いた千鶴は二階の方にいるかと思ったが気配がないのと足音が聞こえないのでとりあえずコタツのある居間の方へ向かってみる。
コタツは電源が入っており、温度は微熱。上にはミカンが入った籠が置かれており、風流さを醸し出していた。
モゾッ
突然コタツの布がほんの少しだけ動いた。
一瞬お化けかとも思ったが、護熾のこの前学校で話していたことからすぐに正体が分かるとすぐ側まで行ってしゃがみ込み、そしてゆっくりと布を捲ってみると、

「ん？　あ、斉藤さんに見つかっちゃった♪」

コタツの仲でゴロゴロと引っ繰り返った状態のユキナが覗き込んだ千鶴と目を合わせ、そしてゴロンと腹這いになってモゾモゾと顔をコタツの外に出す。
何故ユキナがこの中にいるかというと千鶴を驚かせるためではない。
単純な理由としては彼女は小柄が故に寒がりなので家にいる場合は大抵この中に潜んでいるのである。

なので護熾が足を入れるとその足に擽ったりと悪戯をしてくると、このまえ学校で話していたのを千鶴は思い出したのである。

「ええ～とユキちゃん、温かい？」
「うん、温かくてとろけそう～」
「じゃ、じゃあ私も失礼するね」

そう言いつつ千鶴も座り込んでユキナの隣に足を滑り込ませる。
廊下の冷たい空気で冷やされていた足が、ほのかな温かみで温度が上がる。
するとユキナが顔だけではなく身体も出し、身を翻して千鶴とぴったり隣り合わせになるとミカンを一房取って皮をあっさりと剥ぎ、それを手で半分に分ける。

「いる？」
「あ、ありがとう」

半分に分けられた蜜柑を受け取った千鶴は早速一粒口に入れる。
さすが護熾と言ったとこか、それは良い蜜柑で一粒に甘みが凝縮されているようで思わず口が綻ぶ。　隣ではユキナも一粒ずつ食べて口に凍みる甘みを堪能していた。

「さすが海洞くん……美味しい蜜柑だね」
「うん、やぱり護熾は何て言うか、お目が高い人だから」

そう言いつつユキナは千鶴よりも早く食べ終え、そして顎をコタツの上に載せる。
そして顔を千鶴の方に向け、ジーッと大きな目で見たため千鶴は何だか恥ずかしくなってしまい、蜜柑が欲しいのかどうかを尋ねようとすると、

「……この際だから斉藤さんにも教えとこうか」
「え？　何を？」
「昨日此処に来たあの人と今ワイトで起こっていること」

ユキナはそう言って順に淡々と話し始める。
まず昨日、学園祭で誰が一番強い生徒かを決める大会があってそこでイアルが当然の如く優勝を勝ち取ったのだが時間が余ってしまったため思い出作りのつもりなのか、突然護熾に指名が下され、今度は護熾が武器をへし折ったり使えなくしたりして互いに無傷で勝利を決定させた。
それで何だか羨ましかったから今度は自分が乱入して、第二解放までして大いに暴れた。
そしたら突然、鎧を付けた男子が二人の間に倒れていたとこまで話した。

「それで、酷い怪我だったからミルナ治して貰ってから意識が醒めるのを待って、それから私一人で尋問をしたんだけど……カイトていう名前を知った途端にね……突然、開眼して襲ってきたんだよ」
「開眼って……じゃあユキちゃん達と同じなの？」
「うん、それでね、『姉さんはどこだ』って叫んで……今はイアルが見に行っているから様子は後で聞くとして、無理に動いた所為で傷口が広がっちゃって……」
「そう……じゃ、じゃあ今此処にいるあの人は……」
「たぶん、カイトのお姉さんだと思うの」

異世界でのちょっとした騒動が此処まで来ていることに改めて驚いた千鶴は振り返って絵里の部屋の方向を見つめる。ユキナの情報と信憑性を照らし合わせれば、自分が救ったのは間違いなく異世界の人間なのだ。誰か他の人が見つけていたら、それこそゾッとする

ことだ。

千鶴は暫しの間黙りこみ、ユキナも黙り込んで無情に時が過ぎていく。壁の高い位置に掛けている時計の針が不気味に音を刻んできていた。

「シルナさんも、眼の使い手だとしたら、一体……それにあの鎧も」

不意に静寂を切り裂いたのはユキナの方だった。

その声に気が付いた千鶴は顔を横に向けると、ユキナは拳を顎に押し当てながら悩んだ表情になっていた。

「どうしたのユキちゃん？」

「いや、だって眼の使い手が急に出てくるなんて奇妙だなって思ってさ。それに二人が身に纏っていた鎧も随分旧式だったし……ワイトを知って居るみたいだけどワイト人じゃないかも……」

「じゃあ、カイトさんって人もシルナさんって人も異世界の人間じゃない可能性があるの？」

「たぶん……何の根拠もないけどね。護熾のこともあるし、えへへ」

護熾の名前を出したことにユキナは照れたのか、頬を朱に染めて微笑む。

それから急に黙り込んで赤くした顔を隠すように後ろに背ける。

「……最近の海洞くんはどう？」

「ん？　……うん、元気だよ。相変わらず皿洗いの手伝いとかさせられるけどね」

「そっか、よかった」

ついこの間の話だ。

二週間ほど前、突然七つ橋高校の全学年の生徒及び職員千名が授業中消息不明になるという怪事件が発生し、そこで残った護熾とユキナが救出をするために他の眼の使い手達と合同で何とか成功したが、まだ生きていた敵の攻撃からユキナを庇って護熾が右胸に大きな穴を空けて、倒れた。

自分の腕の仲でドンドン低くなる体温。

最期に、自分に会えたことを嬉しく思い、無事生きることを願いながら息を引き取っていったあの少年の死に様を今でも思い出す。

そして次に、今度は異世界の少年の噂を聞きつけた世界屈指の大国から派遣された隊長達に護熾は拉致され、そして必死に助けに行ってみれば何故か金髪美少女に結婚をせめられていたということは腹立たしくつい握り拳を作ってしまうが、その前に今度は眼の使い手さえ超える力を手に入れ、寿命を半分に減らしていたことが何よりもショックだった。

千鶴は護熾が拉致られる前のあの辛そうな表情を見なくなったとそうユキナに言った。

「……よく気が付くよね斉藤さんは、そういうの。やっぱ好きだと細かいところもすぐ気が付くんだね」

「え！？　いや私はただそういうのを見る機会が多かったのであってしょっちゅう見てるワケじゃあ……」

「んふふ～近藤さんが聞いたら何て言うかな？」

「や、やめて～～ユキちゃん～～～」

意地悪をしたユキナに千鶴は顔を真っ赤にしながら顔を隠してしまう。

そんな乙女っぷりをしっかり感応したユキナはニヤニヤした後に視線を落とし、それから少し寂しそうな表情になると、

「ごめんね、もっと私が強かったら、もっと私が気が付けば、護熾はこんな目に遭わず、みんなを悲しませずに済んだのに」
「え……？」

先程とは態度が変わったユキナに千鶴は恐る恐る顔に置いていた手を退かす。
見ると、顔を俯かせて分からないが、身体が冷え切っているかのように小刻みに震えているのが分かった。

「私が護熾に庇って貰わなければ、護熾はこの先何十年も生きれたハズだから……そしたら斉藤さんだってイアルだって……ティアラちゃんだって……こんな悲しい気持ちにならないよね？」
「そ、そんなことないよユキちゃん！」

顔を上げたユキナの両眼からは、涙が溢れていた。
千鶴は急に泣き出したユキナに大いに驚いたが、すぐにコタツの上にあったティッシュを一枚抜き取ってユキナの両眼を拭う。

「ユキちゃんって……その、一人で抱え込もうとするところが悪いところだよ。私は恨んでないよ。だって海洞くんがユキちゃんを助けなかったら、此処にいないのはユキちゃんだよ？」
「でも……でも」
「私だって……ただ攫われるだけの無力な人間だよ？　ユキちゃんや黒崎さんみたいに強くないから……だからせめて、海洞くんが悔いのない生活を送れるように頑張ろうよ！」
「斉藤さん……」

千鶴の言葉に少しは励まされたのか、涙を流すのをやめたユキナは微笑んでそう返事をした。

まだまだこれからがある。護熾が救ってくれた命、それを護熾のために尽くしていこう。
そう改めて思い、涙を指で拭い去ると今度はジーッと千鶴の上半身の方を見つめ始める。

「でも、いろいろと不公平だ～」
「いや、あのユキちゃん？」

年頃にしては背もあるし胸もある、そんな千鶴にユキナは羨望の眼差しをたっぷりと注ぐのであった。

（半年？　一体……？）

丁度その頃、トイレに行くために部屋を出ていたシルナは、家の中を不思議そうに見ながら二人の話声に気が付き、つい立ち聞きをしていた。それこそ初めから終わりまで。
それからゆっくりと今聞いたことは全部胸にしまってから、歩みを再開した。

六周目目　少年、この世界から消失

ワイトの病院には三種類の部屋が用意されている。
一つは最大六人の患者を受け入れる設備が整った大部屋。
二つめは患者本人の希望によって入れる個室。
そして最後に、治療中に大暴れをする患者や、病気の進行が激しい患者や負傷した眼の使い手が運ばれる『特殊治療室』と呼ばれる個室があり、今のところでは一名入室している。

「さて、面会時間開始はあと一分か……」

特殊治療室のドアに向かい合うように壁により掛かって時間を確認したイアルは息を吐いてからそう呟く。
先程受付で眼の使い手一名を同伴させるという条件の下で面会の許可を得たのだが、肝心の眼の使い手がまた到着していない。
因みにその眼の使い手というのはF・Gでも有名な問題児のラルモであったりする。

「まったく、相変わらずマイペースな奴ね」

昔から約束通りの時間に動いたことがないのでここで愚痴を言っても何の意味も為さないのは知っているが一応言ってから正面のドアに視線を向ける。

この先には、正体不明の眼の使い手が構えている。

一体何故、どんな理由で、そして何故あんな深手を負っていたのか、さらには今護熾の家で療養の身でありシルナとの関係は本当に姉弟なのか、さまざまな疑念が渦巻いていくのが頭の中でよく分かる。

（……そういえば）

が、ここぞとばかりに大きな溜息をついて思考を切り換える。

（な～んで気付かないのかしらあの鈍男は……）

イアルは不満げな表情でそう思う。

あの時は単なる思い出作りと一緒に密かにアタックする機会でもあった。

だからこそ、負けると分かってたからあえてそっと、何百人もいる生徒の視線の中思いっきり自分が考える中で一番効果的な想いのぶつけ方をしてみたのに慌てるだけでやっぱり気が付かなかった。

要は、護熾との試合でソッと身体を寄せたのにそれを好意と気が付いてもらえなかったことに不満を持っているわけである。

（私の中では一世一代のさりげない告白だったのに……ユキナの所

為で台無しだわ）

せっかく大勢の証人（生徒達）がいるなかで行なった告白作戦が、見事嫉妬心を露わにしたユキナの所為で中断され、さらには今までの生徒同士の試合とは比べものにならないほどの人離れした戦いにすっかり置いてけぼりにされたことを思うと、溜息をついてはいられない。

まあ、当の本人は何故ユキナが乱入したかについても鈍感なようであるが。

「ああ～、待った？」

面会時間残り三十秒前にようちゃくラルモがこちらに軽く手を振りながら到着。

それに気が付いたイアルは壁から背中を離し、ギリギリであるが珍しく遅刻せずにやってきたラルモに向かい合い、腰に両手を当てる。

「珍しく遅刻じゃないみたいだけど遅い！　五分前には来なさいよね！」

「いや～こっちにも事情ってもんがあってね？」

「あんたの事情は知ったこっちゃないの！　ほら……行くわよ」

「ああ」

軽く会話を済ませ、そしてもう一度病室のドアに目をやる。

此処には正体不明の眼の使い手が居る。そして理由も真意も分からず襲いかかってきたことがあるのだから十分、いやかなり用心してこの場に望まなければならない。
イアルはドアの取っ手に手を掛け、そして捻って中に身体を滑り込ませていった。

ラルモが入室し、ドアを閉め終えた後、改めて二人で正面に顔を向ける。
そこは窓もなく、殺菌兼用の空気洗浄機が設備され、ベットが一つ置かれているという殺風景な部屋であるが他の部屋とは違う、さらに澄み切った空気がそこにあった。
そしてそのベットにはこちらに気が付いたのか、上体を起こしてこちらに不思議顔を向けている人物がいた。

「……どうやらお目覚めみたいだな」
「……具合はどう？」

一瞬驚いた両者であるが、冷静に今目の前にいる少年に向かって声を掛けてみる。
二人から見た様子では昨日無理矢理動いたとはいえ、包帯越しからの傷の様子はほぼ無くなりつつあることからおそらくはミルナの治癒の能力により再び治療されたのであろう。

「良い方です……」

少年、カイトから発せられた言葉からはもう大方回復していることが窺えるが元気がない。
イアルとラルモはその落ち着いた返答に少し安心すると共に改めて警戒をする。
何しろ昨日大暴れをして眼の使い手四人に抑え込まれたくらいなのだから今回もそれがない、という考え方で行けば何が起こるか分かったものではないからだ。

「落ち着いてる？」
「今のところは……」

イアルにそう返答を返し、カイトは足に掛けてあるシーツをソッと持ち上げて自分のお腹に掛ける。
どうやら気持ちの揺らぎは今のところ小さいようだ。

「すみません……怪我を治してくれたのに……気が動転してしまって」
「そうか。え～っと、オレはラルモ。眼の使い手だ」
「私はイアル。F・Gのガーディアンよ」
「どうも、ラルモさん、イアルさん。昨日はお騒がせしてすみませんでした。それと……ユキナさんにも謝っておいて下さい」

カイトは二人にそう言った。
意外な言葉にイアルとラルモは思わず顔を合わせてしまうが、警戒は余りしなくて良いと判断すると少し息を吸って吐き、ラルモから喋り始めた。

「いやいやいやいや！　誰だって知らねえ場所に来たらそりゃぁ暴れたくもなるわな！　ユキナにはイアルが言っておくからさ！」

この瞬間イアルは何故この眼の使い手を寄越したのか心底呆れると共に怒りを感じた。
今の良い緊張感を保ったままこの少年に聞くべき事は聞き、伝えるべき事は伝えようと思ったのに今までの緊張感をこの問題児が破壊してしまった。
拳で一度教育が必要か、そう思ってプルプルとどす黒いオーラを纏いながら握り拳を固めると、

「すみません、あなた方二人がここに来るまで、少し考えていました」

カイトがそう言ったのでイアルは拳を握るのを止め、そちらに注目を向ける。

「僕と姉さん以外にいる複数の眼の使い手、見たことのない設備、見たことのない服装……最初は信じることができなく夢だと思いこんでいましたが、どうやら違うようですね。」

「え～っと、頭どこか打ってない？」
「うっさい！」

ガン！

「痛ってぇ！？」

ラルモの失礼な発言に対し、イアルは容赦のない拳骨をかます。
拳骨は見事、ラルモの脳天に直撃し、固い物を叩いたような気持ちのいい音を出した後に涙目で頭を手で抑えさせる。
イアルは拳骨し終えた拳を口元に持ってきてフーッとスッキリしたと言いたげに息を吹きかける。

そんなやり取りをカイトはポカンとした表情で見ていたが、やがて堪えきれなくなったのか、

「クスッ」
「あ！？　笑いやがったなお前！」

小さく吹きだしたカイトに指を指してラルモが言う。
この一連のやり取りが清涼剤になったのか、先程あった互いの緊張感は無くなりつつあり、イアルは変わりつつあるこの部屋の空気を肌で感じながら、これもラルモの個性かと諦めると静かにまず伝えたいことを言った。

「あなたの姉さんなら無事よ」

「！　それは本当ですか！？」

イアルの唐突な言葉にカイトは思わずベットから身を乗り出しそうになったのでそれをラルモが両肩に手を置いて戻し、ゆっくり宥める。

イアルはコクンと軽く頷き、それから次の言葉を足す。

「あなたのお姉さんの名前はシルナさんでいいの？」

「は、はい！　名前を知っていると言うことは本当に姉さんのことを……――」

「彼女はあなたほどではないけど怪我をしているから今は私の知り合いの家で休んでいるわ」

姉の名を聞かされ、そしてこの少女の言っていることが正しければ無事でいると言うことである。

姉が無事でいた、あの状況から、部下達を幾度となく葬ってきたあの強大な怪物からよく生きてくれた、よかった、よかった。

そう思い、目頭が熱くなって視界がぼやけ、視線を下に落とす。

「うおおいっ！　ほらこれっ」

目の前の同じ歳の少年が涙を流している。

それに驚いたラルモはそう声を出し、慌てながらベットの横にある机上のティッシュ箱から紙を一枚取り出すとそれをカイトに渡す。

カイトは両眼に溜まった涙をそれで拭い去り、ラルモに礼を言っ

てからまた顔を上げる。
そのタイミングを見計らい、イアルは質問を重ねる。

「じゃ、じゃあ、あなたの姉さんも眼の使い手？」
「はい、姉さんも眼の使い手です」
（……やっぱり、一体どうなってるのかしら？）

カイトの言葉から嘘の微塵も感じられないことからやはり彼女も眼の使い手であろう。
旧式の鎧、二人の眼の使い手、謎の大怪我。
ここで何故大怪我をしたのかを聞いてみると、カイトは口を噤んでしまって答えなかった。
まるで、怖いことを思い出してしまった子供のように、口から先の言葉は出てこなかった。
それが今回のことに結びついていることは大方予想はできたが当の本人が話さないのならば無理に聞き出すことはない。

「分かった、じゃ、私はあなたの様子をシルナさんに伝えてくるわ」
「あ、ちょっと待って下さい」
「ん？　何か伝えたいことがあるの？」

聞きたいこと、伝えたいことを終えたイアルはラルモに部屋から出るよう促すと何か思いついたようにカイトから制止の声が掛かる。

「姉さんがいるとこに僕を連れてってくれないですか？」

「……はぁ！？」
「……えぇ！？」

今自分がどんな怪我、そして昨日無理矢理動いて傷口を広げたことをまるで意に介していないようなカイトの言葉に二人は思わず疑問系の声を投げかける。

「僕ならもう大丈夫です！　姉さんはこの建物のどこかにいるんですよね？　だったらこの目で確かめたいんです！」
「おまっ！　お前胸を貫かれたような死んででもおかしくない大怪我だったんだぞ！」
「死んででもおかしくない怪我……やっぱり姉さんが何かしたんだ、この世界が違うこともきっと……！　連れてって下さい！　姉さんなら全部知っているハズです！」

そう言い切り、真っ直ぐな瞳で二人を見つめる。
シルナなら全部知っている、なるほど。
イアルは頭の中で重要なことが聞けたと思うが、今はこの少年を落ち着かせなくてはならない。

「あ、会わせてあげたいのは山々だけどあなただってシルナさんだって怪我をしているのよ？　それに、あなたがここを勝手に抜け出すと傷口も開くかも知れないし……」

イアルの話を聞き、姉が怪我していることに少し驚いたような表

情をするが、それでも会いたいという気持ちは変わらない様子である。

「自分の体のことなんてどうでもいいんです！　お願いです！」

「まあまあ落ち付けって、イアルの言う通りだ。」

ここでラルモがカイトに近づいて両肩に手を置いて再びベットに押し戻す。

カイトはされるがままにベットに押し戻されるがその表情からはやはり諦めの念は消えていない。

「お前の姉さんに会ったことはないけど、お前が無理に行って傷口が開いた姿で会ったら悲しくないか？　俺だったら嫌だなそれ」

珍しくラルモからのまともな意見で反論ができなかったのか、カイトはしばらく何か言いたそうであったが渋々とベットの床に着いた。

「大丈夫、私たちはあなたの味方よ。傷もゆっくり治せばいいよ。私は今から知り合いの家に行ってシルナさんには言っておくから体大事にしなさいよね。じゃ、ラルモ行くわよ」

「分かった。でも俺は少しそこで休ませてもらうぜ。急な呼び出しだったからちょっと疲れてんだよ」

「あら、眼の使い手なのに？」

話も終え、ようやく一区切りついた二人はカイトに軽く手を振り、カイトもそれに応じて手を振って返す。
そして二人が出て行き、部屋がまた静けさを取り戻す。
カイトはベットで寝返りを打ち、そして少し不満そうに表情を歪めた。
これから起こる事を先に言っておけば、彼がこの時代の人間と同じ思考を持ち合わせているということがまず無理だということであろう。

そしてこの後、彼が二人の話を聞かなかったことが後で判明する……――――

「なるほど、護熾の家に、カイトの姉がいるんだな」

ワイト中央の廊下でイアルの隣を歩きながらシバはそう言い、イアルはそれに頷く。

「はい、何故現世に彼女が現れたのか、何故怪我を負っていたのかはまだ聞いていませんけど……そのことでカイトは怪我のことについては話しませんでした。」

今回のカイトへの接触を果たしたイアルはシバに彼は昨日より心情は安定している、や、護熾の家で介抱している少女はシルナと言い、その名を口にしたらカイトが食らいつきそうな勢いで反応したとか、シルナという少女は眼の使い手である可能性が高いなどを報告し終えていた。

「カイト……シルナ……”麟眼”と”炯眼”か……」
「え？」
「いや、こっちの話だ」

意味ありげな単語を発したシバは、少し悩むような表情でそのまま歩く。
イアルは不思議そうな表情でいたが、特に疑問に思わず足並みを揃えて歩いていった。

そんな二人の後ろ姿を、廊下の角から覗き込んでいる何者かがいると知らずに。

少し先にある廊下を右に曲がり、そしてまた少し歩くと左手に開いた空間が映り込む。
そこは芝生が一面に広がり、もうすぐ寒々しくなる季節にしては元気よく青々と草が生えている。
その芝生の庭の真ん中辺りに、口に白い棒を銜えた白衣姿の白髪

の男が立っている。
　トーマの姿を見つけた二人はそちらに進路を定め、草を踏みしめながら向かい始める。
　一方、後ろから密かについてきた影は初めて見る建物の構造、外装や自分が知っているとどの城壁よりも強固そうな壁がグルッとこの場所を囲んでいることに驚きながらも慎重に、気配を消しながら尾行していた。そして二人が白衣を着た男に向かって歩き出したので廊下の物陰に潜んで様子を窺うことにした。

「ご苦労さんイアル。もう準備はいつでも良いよ」
「いつもすみません博士。最近どうも此処と現世の出入りが激しくって」
「いいよいいよ。これが俺にできる精一杯のことだし、何より顔を合わせる貴重な機会だからな」

　イアルとの会話をしつつ、トーマは徐にポッケから札のようなものを取り出す。
　その札を持った手で、まるで壁に押しつけるかのように目の前の空間に突き出すと札はまるで本当にそこに壁があるかのようにベッタリと張り付く。
　そして数秒後にいきなり札が綺麗に上から下へ真っ二つに避けると一メートル間隔で両端に移動し、怪しい空間が蠢く扉が出来上がる。

「よし、開通だ。じゃ、イアル、二人によろしく頼む」

「はい、でもまあ、あの二人はいつも元気ですけどね」

イアルはそう言ってみせ、トーマとシバはそれもそうだな、と微笑んで見せる。

しかしトーマは微笑みから少し真剣な表情に切り換えると口に銜えていた白い棒を手に取り、そしてイアルを指さす。

「いいか、何か向こうであったらすぐ連絡をくれ。特に護熾は最近また妙な力を手に入れて、しかも寿命が縮んでいるんだろ？」

「……」

トーマの話にイアルはさっきまでの明るさをなくす。

彼女にとっても、彼の寿命が減っていることは心配の他ならないのだ。

そんなイアルに今度はシバが喋り始める。

「俺たちももう、仲間が死んでいくのは見たくないからさ。だから無茶をするなって言っておきたいんだ。まだお前達は若いからな。こっちは任せろ、向こうは任せた。いいな？」

「……はい！」

「おっ、活きが良いな今日のシバは」

「こんくらい言っておかないで、どの顔で先生で言えばいいんだよ？」

トーマの茶化しにしっかりと受け答えをしたシバはそう笑ってみ

せる。
二人の励を受け、イアルは一度二人に向かって軽く礼をしてから振り向いてゲートの方に歩み始める。
っと、此処でシバから声が掛けられる。

「おっと、イアル、後ほどお前の端末にメールを入れておくから確認しておいてくれ。その内容を護熾とユキナにも伝えておいてくれ」
「あ、はい、分かりました！」
「じゃ、行ってらっしゃい！」

まるで旅立つ子に親が送る言葉のような口調でシバは言い、イアルは改めて礼をしてから振り返ってゲートに向かい合う。ここから三歩踏み込めば簡単に海洞家の近くの道路交差点の約二メートル空中でゲートが繋がる。
一歩、二歩、そこまで歩く。
それと同じ瞬間、廊下の物陰から何かが勢い飛び出してきた。

隠れていた陰は一分前くらいに１３０メートルほど先にいる三人の会話を見ながら思っていた。

あの少女は確かに知り合いの家、つまりシルナの居る場所に向かうと言っていた。
だが尾けてみれば怪我をしているはずのシルナがいるこの建物ではなく何故かこの庭に来ている。

そしてさっき、あの少女と今はちょっと黙って貰っている少年との会話を思い出してみる。

少女はシルナのことを知っているようだった。だが少年の方は会ったこと無いけどと言ったのだ。
そして何よりも……いくら頭の中で気を探っても特定できなかったのだ。
シルナとはどんなに離れていても簡単に感じ取れるのに、まったく感じ取れない。
つまり、今見ているあの門のようなものの向こうに、姉がいるのだと『何となくの直感』で分かった。

そしてあの少女が門に入ろうとした。
今だ、そう思って飛び出そうとすると少女は背後の男に声を掛けられてこちらを振り向こうとしたので慌てて物陰に隠れ直す。無茶な動きをしたので少し胸が痛んだ。
そして再び覗き込みながら、様子を窺う。
ようやく少女が門にもう一度振り返って歩き出したのでもうこれしか機会がない。
そう思って地面を思いっきり蹴っ飛ばしながら走った。

走った。とにかく走った。
走っていて気が付いたのだが本当に傷の痛みがほとんどない。
手足も自由に動くし、昨日の騒動など無かったかのように身体が軽い。
ああ、こんなに怪我を治してくれているのに、自分勝手ですみません。でも、これだけはせめてやらせてください。

少年はそう思い、踏み込んだ芝生の上を裸足で駆け抜けながらとにかく目的地まで走った。
そしてこちらに少し遅れて気が付いた黒髪と白髪の男二人の間を通り抜け、そして驚いた表情で振り返った少女ごと身体を突っ込ませ――――見事、あの門の中に二人とも入っていってしまった。

そして時間切れとなったゲートは両端にある札が元の札になるようぴったり重なり合うとポトッと地面に落ちて乾いた音を出した。

「……」
「……」
「……えーっと、もしかして今のカイトくん？」
「……のようだな」

茫然としたシバにトーマが冷静に答える。
それからだんだんだが、事の重大さが身に染みてきはじめた頃、おうやくシバがもの凄い勢いでトーマに振り返る。

「これは非常に不味いぞトーマ！！　カイトくん、イアルと一緒に現世に行ってしまったぞ！？」
「ああ～、もう俺って大抵のことじゃあ驚かねえかも。近頃色々あったから……」
「いやお前よく冷静でいられるな？　とにかくだ、大怪我の子供が現世に行ってしまったんだぞ！？」

大怪我、というのは少し大げさかも知れない。
何しろああいった怪我を瞬時に治すのを専門とした眼の使い手に二回も治癒を受けているのだ。あれだけ元気に動き回るのは昨日み

たいに無茶苦茶に動かない限りは平気であろう。
それでも、それ以外の問題はあるのだが。

「やっぱり姉さんとやらに会いに行ったんだろうな。それでイアルに付いていけば自ずとその居場所にたどり着く。考えは単純だが尾行の仕方が見事だったな」
「……幸い、イアルと一緒だ。悪いと思うが護熾に頼むしかなさそうだな」

ゲートをもう一度開ける、という方法もあるのだがご生憎ゲートを開くには充電や現世でのゲート開通ポイントの設定やらの修正やこの世界と現世の間の”橋”の具合も見て決めなければならないという面倒な作業を行わないと行けないのだ。

そしてそれとは別に、カイトが姉のシルナに会うことで何かが分かるかも知れないという密かな期待も寄せている。何故ここに現れたのか、どうして怪我をしたのか。
あの三人になら事情を明かしてくれそうなものなのだが。

「シバ、お前イアルにメール送るって言ったろ？　早速送ればいいじゃないか。カイトのことも書いてさ」
「……ああ、あ～大人げないな俺たちは。いつも護熾に迷惑を掛けてしまう」
「そうだな、でも本当に書くのか？　麟眼と炯眼のあの二人を。むしろあの二人の正体の方に俺は驚いたんだけどな。」
「そうだな、まさか――――――」

シバは一呼吸を置いてから言った。

「二百年前の眼の使い手で、二度と戻らなかったっていうことが記録書に書いてあったからな」

六周目目　少年、この世界から消失（後書き）

どうも～ＰＭです。
いや～何かこうお話にエンジンが掛からないんですよ最近。
どうやら前から思っていたんですがどうもこういった『シチュエーション』を書くのが苦手なようです、私は。シチュエーションの部分はこれを見て下さっている方にネタバレ（そういう高尚なものではないんですけどね：汗）になるのであえて伏せさせて下さい。
では、あと何話でエンジンが掛かるかは知りませんがのんびりとやっていきますのでどうかお楽しみに、では！

七周目目　動く気配

「ふぐぉっ！　……何じゃこりゃぁ、もぉ……！」

ワイト中央付属病院の特殊治療室のドアのすぐ側の椅子に、何かしらの力に対抗するように全身を力ませていながらも床にへばり付いているラルモは悪戦苦闘中であった。

事態は五分前。椅子に座りながら今日の開眼の調子や護熾達のことやカイトの言った言葉などを独自に考え、現世にいると言われるもう一人の少女について関連性を一通り考えてから、よしアルティに会いに行こっと、と踏ん切りが付いたところで背後から気配もなく突然力が掛かり、今に至るわけである。

「ふんっ……！　……ああ～、ダメだこりゃっ」

気合いを込めた声を出すものの、すぐに電池が切れたかのように

力を抜いてしまう。
いくら力を入れても体力を消費するだけだと考えたラルモは一時的にすぐ大人しくしたのだ。
一応開眼状態でもなればすぐにこんな謎の力に打ち勝てると思ってやってみたが、開眼をするには数秒の集中がいるため、こんな力が断続的に続いている状態でしかも疲れているのでは少し深呼吸が必要となる。
まあ開眼できない原因の大半としてはラルモが何だ何だと大慌てで藻掻いた所為でもあるが。

「まったくよぉ～、これ絶対カイトの奴だよな～、何が『すいませんラルモさん』だよ～」

体力回復の目処を立たせるために暫し休憩中のラルモはそう愚痴をこぼす。
聞き違いでなければこの攻撃を受けた最中、確かに病院服の開眼状態のカイトが済まなそうな顔をしてそう言い、昨日まで重傷だったと思わせない軽快な走りでイアルの行った方向へ行ってしまったのだ。
おそらくは姉さんとやらに会いに行った。フッ、そんな二人の橋になった俺。
などと下らないことを考えているとふと、突然背中に掛かっていた圧力が嘘のように消えた。

「あれ……？　何だ急に？」

両手を床に置き、身体を持ち上げてみるといつものようにスクッと起きあがれた。
そして立ち上がり、う～んと背伸びをしてから急いでなに不利構わずイアルの方向へと走っていった。

午後の夕暮れ時。
秋頃の陽の沈み方は夏より早くなっており、前の暗明が既に過去のものとなるのを感じられた。
そんな人通りが少なくなる夕日に染まった住宅街のある交差点で、異変が起きていた。
交差点から約二メートルの宙に、空間の切れ目が生まれ始める。
そして人一人分が余裕で通れるくらいの大きさになると――――

ヒュッ　ゴトッ！

「～～～～～～！　～ったた～、何が起こったのよ……？」

空間の割れ目より背中から落ちてきたイアルは見事に道路のコンクリートに背中を打ち付け、数秒間痛みに打ち震えていたがやがて怪訝そうに起きあがって周りを見渡す。
視界にはいるのは夕暮れに染まった住宅、夕暮れに染まった道路、夕暮れに染まった道路標識、夕暮れに染まった生け垣、夕暮れに染

まった病院服を纏った人間。
イアルは病院服を纏った人間のところで見渡すのを止め、視線を注ぎ始める。

「ここは……さっきの場所とまったく違いますね……」

そんな冷静な言葉。さっきまでいた場所と雰囲気の違いには十分驚いているようではあるが。
イアルは暫し目の前にいたこの少年に対して驚きの表情を隠せなかったが、やがて何故自分がこんな目に遭っているのとこの少年が目の前にいる理由を思い始めるとプルプルと拳が唸りを始める。
そして殴ろうかどうか考えたが仮にも怪我人なので何とか衝動を抑え、スーッと軽く吸うと、

「なっ、ん……ってことしてんのよ！！」
「おおっと！　す、すいません。お怪我はありませんか？」
「背中を打っただけよ、でも別に何とも……ってあんた自分がしたこと分かってるの！？」

軽く別の話題になりそうになったのを感じ取ったので、イアルは思いっきり病院服の胸ぐらを掴んで引き寄せて叫ぶ。
此処に彼はいると言うことは、病室から抜け出した、怪我はまだ完治していない、などなどの問題が起こっているということだ。
しかし当の本人はことの重大さが理解できていない。

「確かに僕は、勝手に抜け出してきた身です。ですが……」

そう言って胸ぐらを掴まれながらも、顔を右に向けてジッとその方向に向かって目を細める。

イアルも釣られてその方向に顔を向ける。

「あっちの方向に姉さんの気があるんです。僕の探知が間違いないならば……」

カイトがそう言った途端、イアルはハッとなった表情になる。

あの方向には、確かに彼の言うとおりシルナがいる。

顔を向けた方向、その方向には海洞家がちゃんとあるのだ。

初めて来た場所で、眼の使い手であるがすぐに探知できたというのは正直すごい。

「あそこにいるんですね？　僕の姉さんは」

「え、ええっとうん……はぁ～、あとで先生に報告しなきゃ……」

一瞬送り返してやろうとも考えたが、今日はそれはムリである。

どうやら彼にはシルナを会わせた方が無難なようだ。

それに今は秋、午後は特に冷えてくるので此処で立ち止まっていても仕方がないので胸倉から手を離すとトボトボと歩き始める。

無論その方向は海洞家。なのだがカイトはイアルの脱力しきった

歩きに少し驚いた様子であったがそれに気が付いたイアルはバッと顔だけ振り向かせて睨み付けると、

「さっさと来なさい！　姉さんに会いたくないの！？」

「え？　あ、は、はい！」

般若のような表情で怒っているイアルにそう聞かれ、カイトは慌てながらも裸足でその後を追っていった。

「――――ってことで、ごめん、彼が付いて来ちゃった……」

ゲートが出てきたところから二百メートル先の海洞家に着いたイアルは家に着くなり玄関で丁度買い物から帰ってきた護熾を呼んで、事情を説明していた。

ユキナは呼んでも来なかったので大方コタツに籠もっているのであろう。千鶴は二人が来る前帰ってしまったらしい。

話を聞いた護熾はポカンと終始口を開けて驚いたまま固まっていた。

それからようやく首を動かしてイアルと問題の少年を交互に見る。そしてイアルに視線を固める。

「……向こう大変なことになってんじゃねえか？」
「たぶん……油断していた私も悪いけどね」

ガーディアンとして、風紀員としての自覚を怠っていたことを再認識したイアルは力なく項垂れる。
護熾はすっかり疲れ切ったご様子のイアルから今度はカイトに視線を移す。
彼は何故かニコニコでこちらを見ている。

「で、カイトか？　お前の姉ってシルナのことだろ？　今寝てるから会わしてやるよ」
「本当ですか！？　では早速――――」

カイトはそう言って上がろうとすると目の前で護熾が制止の手を翳す。
怪訝そうな表情のカイトに護熾はもう片方の手を差し出した。
白いハンカチ。それがカイトの前で少し揺れた。

「お前足汚れてるだろ？　拭いてから上がれ」
「あ、すいません……」

此処まで来るのにカイトは芝生やらコンクリートなどを素足で移動してきたため足の裏は真っ黒であった。その足で家に上がり込ま

れるのはいくら何でも許すわけにはいかない。
そして足を拭き終えたのを見計らい、ようやく護熾はカイトに付いてくるように言った。

絵里の部屋に入るなり、パジャマ姿のシルナと病院服姿のカイトは、互いに見つめ合って硬直した。

絵里の部屋に着いたカイトは今にも倒れそうなほど震えた。
今、ベットには上体を起こしてこちらを見ている少女も同じくこれ以上ないほど驚いていた。

護熾は二人が目を合わせた途端、硬直したのに驚き、イアルは一瞬で静かになった二人を交互に見て何かが起こるのではと不安がっている。

五秒ほどして、ようやくカイトは両手を前に伸ばした姿勢のままゆっくりと一歩、また一歩近づいてシルナに歩み寄る。まるでその一歩ごとに、相手の姿を確認しているかのように。

そして手で触れられる距離まで近づいたとき、二人は同時に思った。
互いに、もう会えないのかと思っていた。
どれだけこのときを待ち焦がれたのか。まるで一日が千の時が流れるかのように長く、不安でしょうがなかった。しかし今は、こうして再会が叶ったのだ。

「姉さん……？」
「か、カイトなのか……？　その傷はもう……大丈夫なのか？」
「え、ええ。この人達に、ごくあっさりと見たこともない治療法で……」
「そうか……カイト、こっちへ来い」

呟くように言い、シルナが手招きをしたので恐る恐る気を使うように近づく。
そして少し姿勢を落とすように言われたので言われるとおりにその場に座ろうとすると――

シルナはソッとカイトの首に腕を回し、思いっきり抱き締めた。ゆっくりゆっくりと。
カイトは姉の突発的な行動に一瞬頭を白くするがすぐに背中に手を回し、お返しにと抱き締め返す。

「この馬鹿者……！　よく、よく生きてた……！」
「姉さん……姉さん！」
「カイト……！　カイト……！！」

自然と二人の両眼から透明な線が下に向かって流れる。
それはやがて頬を伝って落ち、ベットの上で弾ける。
それから二人は懇々と、血の繋がった姉弟との再会を噛みしめるように、傷の痛みなど気にしないで抱擁を続けた。

「ん～？　何かあったの～？」

部屋の外からそんな声。
護熾は少し振り返ってみると目を擦って寝ぼけながらやってきたユキナが目に入った。
おそらく彼女は緊急避難所（人はそれをコタツと呼ぶ）に入っている間大方眠ってしまったのであろう。余談だが千鶴の膝の上で眠ってしまったので大層可愛かったと学校で話されることになる。

「おう、今ちょいと感動のシーンとやらを間近で見ているだけだ」

そう言って視線を二人に戻し、少し壁により掛かってみせる。
姉弟に、家族とどうやら再会できたようだ。その世数はこれを見れば一目瞭然だ。
護熾はそう思い、一種の同情を感じ取りながら、二人の気の済むまで泣くのを静かに見守り続けた。

「え～っと、で、お前らは何者なんだ？」

絵里の一室での騒ぎの後、居間の方に場所を移した一同のうち、護熾は椅子に座りつつ改めて二人を見ながら言った。一樹と絵里には『大人の事情だから少し席を外してくれ』と言い付け、各部屋の戻って貰った後にユキナとイアル、そしてカイトとシルナが向かい合うように座る。

昨日の騒動といい、その怪我と言い、そして二人が眼の使い手であると言い、ワケの分からないことだらけなのだ。しかしまずは、二人の正体について明かして貰わなければその発端や原因は分からない。大凡答えはしないと予想を持って。

シルナは護熾の質問に少し顔を俯かせて悩んだ表情になるが、すぐに顔を上げて答えた。

「そう、だな」

「姉さん……」

「案ずるな。介抱を受け、その上お前と会わせてくれたのだから彼らは敵ではないし、逆に信用のいく人達だ。それに、こっちも聞きたいことがある」

「でももしというのは？」

「お前は心配性だな。お前は釣った魚の怪我を治してから喰うのか？」

不安げな視線を向けた弟にシルナは言葉を掛け、そして三人に顔を向ける。
護熾は意外な返答だったので目を丸くしている。そしてあることに気が付く。
シルナは今朝に比べてだいぶ顔色は良くなっていた。元々怪我の具合も出血量が多いだけで大したこともなく、また眼の使い手と頷けるような自然治癒能力の高さもそこから窺えた。
シルナはゆっくりと息を吸い、吐いてから言った。

「改めて言う。私はワイト城直属第一部隊隊長兼眼の使い手のシルナ。与えられし称号は『麟眼』だ」

いきなり長い単語が発せられたので護熾とユキナは二人揃って『？』を頭に浮かべて首を傾げるが、イアルは何か衝撃を受けたかのように表情を固める。
カイトはあっさりと正体を言った姉に少々戸惑いながらも頭を下げて改めて自己紹介をする。

「えっと、僕もワイト城直属第二部隊隊長兼眼の使い手のカイトです。与えられた称号は『炯眼』です。」

そして二人の自己紹介が終わり、護熾は『何だかバルムディアの隊長さん達みたいだな』と軽く思いながらも今度は自分から自己紹介を始める。

「えっと俺は――」
「私は『烈眼』の眼の使い手のユキナと言います。訳あって今この家に居候の身です」

護熾の言いだしを遮ってユキナが簡単に自己紹介を済ませる。
護熾はそんなユキナにムッと来たが、すぐにユキナの後に続いて自己紹介を始める。

「えーっと改めて一応この家の家主の海洞護熾だ。一応『翠眼』っていう称号の眼の使い手だ」

一応という曖昧な表現が続く妙な自己紹介であったが何とか済ませる。
が、『海洞護熾』という異世界に置いては長い名前に敏感に反応した二人はすぐさま護熾を凝視して驚きのあまり少し身を引いた。

「一度区切りをつけて仰られた名前……まさか貴族の出なのですか！？　すいません、つい馴れ馴れしくしてしまったことをお詫びします！」
「だからあんな仕掛け（ゲートのこと）を施していましたか……！　勝手な行動をどうかお許しを……！」

急に敬語になって頭を下げて護熾に許しを請う二人。
護熾は唖然とした表情で頭を下げた二人を見ていたが、『ああ、

そういえば向こうでは名前が長い奴は貴族しかいないんだっけ』などと思いながら顔を上げるように言い、自分はそんな高等な地位にいる人物じゃなくてただの庶民だと告げると、二人は息ぴったりに安堵の溜息を付く。

「ああ、よかった。まさかと思ったがよくよく考えればこんな小さな家に住んでいるわけがないか」
「……代わりに世の中の広さを教えてやろうか？」

シルナのよけいな一言に表情を真っ黒にし、拳をボキボキと鳴らす護熾。
っとまあ冗談はさておき。
イアルは二人には自己紹介を済ませているのでスルーするとして、この二人がさっき言ったワイト城という単語が気になる。
二人が現れた服装を見れば、まるで城に使えるような兵士の姿であったがそもそもワイトには城など存在はしない。

「と、あと俺には妹の絵里と弟の一樹もいるんでよろしくな……と、その前に」

少々厄介事になる話は今のところ止めておこうと思い至った護熾は何か思い出したような声で言う。
それから目の前にいる謎の眼の使い手二人にジロッと視線を注いでから、

「カイトだっけか？　で、お前はこれからどうするんだ？」
「え？」

護熾の質問に一瞬狼狽えを覚えるがすぐにその意味が分かった。
仮にも、今カイトの目の前にいるのはこの家の家主なのだ。
ただでさえ、姉のシルナがこの家にお世話になっている身なのにさらに自分までもが入ったら迷惑この上ないであろう。
しかし、此処に来てしまった以上病院に戻るわけにはいかない。確かにあそこでの治療は素晴らしいものだが姉の安否を考えればここからは動きたくはない。
なので、無謀を承知で恐る恐る言ってみることにした。

「えっとぉ……行くアテもなく、抜け出した病院に戻るのはイアルさんの話から無理そうなのであの……昨日の無礼や今日の身勝手な行動を許してもらうつもりはありません。ですが、せめて今日一日だけでも……」

ガタンッ

突然空気が大きく動き、少し大きな音が立つ。護熾が立ち上がったのだ。
護熾はそのまま立ち上がると振り返って台所の方へ向かい始める。
今に残された一同は怪訝そうな表情でその背中を見つめていたが、やがて護熾は振り返るとカイトの方を指さし、

「……昨日、お前がしでかしたことについてユキナに謝ったら何日でも泊めてやるよ。それとその服はあとで洗う卯から俺の服貸して

やるよ」

それからプイッと振り返って台所に入っていってしまった。

残された一同は茫然と座ったままだったが、やがてシルナは静かに、徐に右拳を持ち上げると間髪入れずパシンッとカイトの頭に拳骨を食らわせた。

「痛いっ！　何ですか姉さん！」
「お前治して貰っている身でどうやら悪いことをしでかしたようだな。それならば即刻謝れ。今すぐにだ」
「ゆ、ユキナさん、先日は大変なご無礼を……」
「声が小さい！」
「ユキナさん！　昨日はどうも――――」
「もっと声を張り上げろ！　それと口だけではなく行動で示せ！」

どうやらこの姉は、弟に対しては相当に厳しい性格の持ち主のようだ。

そんなことを思っていたユキナはふと、護熾が昨日の騒動について自分のことを心配してくれたのではと密かに思った。

確かに昨日の彼の行動は自分がしても謝らなければならないだろう。

でも自分はされた側としてはあまり気にしていないのだが、護熾はわざわざ謝れと言ったのだ。

そういえばカイトが暴れたときに窓を蹴破って最初に来たのは、護熾だったな。

何だか、嬉しい。

そう、自然と顔が綻ぶと丁度視線がカイトと合う。
カイトはテーブルに両手をついている状態で座っており、そして勢いよく額でテーブルを割るんじゃないかという勢いで頭を下げ、軽く大きな音を部屋に響かせてから額を付けたまま、

「先日はどうもすいませんでした！　自分は如何なる処分もこの身に受ける覚悟の所存でございます！！」
「え、っとぉ……うん、分かった。許す」
「……ほ、本当ですか？」
「うん、私大して気にしていないし」

そう告げたユキナの言葉に、ようやく顔を上げたカイトは素直に笑顔になる。

「ほれ、お許しが出たんだから感謝の意を言え」

シルナからそう言われ、カイトはもう一度慌てて頭を下げる。

「あ、ありがとうございます！」

それからユキナも微笑んで『いえいえ』と言った。
そんなやり取りは聞き耳を立てて聞いていた護熾はようやくホッ

としたかのような溜息を付き、心の中でカイトの居候の許可を出したのであった。

しかし、本当にあの二人は何者なのだろうか。

眼の使い手であり、謎の服装、そして大凡人がやったとは思えないような大怪我。

そういうことは夜にでも聞いてみるか、と決め込んだ護熾は水洗いした野菜を早速手に取った。

それからの事、護熾は早速カイトにズボンやらシャツやらの服を押しつけるように私、洗面台で着替えてくるように言い付け、シルナには絵里の部屋に戻って寝てるよう言う。

イアルは早速シバやトーマにカイトがこちらに来てしまったため護熾の家で保護していると方向を書き、ユキナは引き続きコタツでゴロゴロとしていた。

そして夕飯の支度。

一応、シルナは今日目覚めた身なのでみんなとは少し違う夕食を食べて貰うことにする。

その点に関してシルナよりよっぽど大怪我をしたカイトの方はまるで何事もなかったかのように平然としていることについて、護熾はミルナの能力のおかげかね、などと思いながら二人分増えた食事

を何の気苦労も感じず作り上げる。

そしてできあがり、皿をテーブルの上に置く。

夕飯ができたことを告げるとバラバラに散ってた人は一斉に集まり初め、各自コップに茶をついだりお箸やフォークを分けたりとごく当たり前の行動を取る。

食べる準備が整い、いよいよ夕飯。

呼ばれたカイトとシルナは当然と言えば当然だが、テーブルの上に並べられた料理を怪訝そうに見つめた。こんな料理を見たことがない　それに見たこともない道具も並べられている、と思っているのが誰から見ても分かるかのようだった。

「ほれ、別に毒が入ってるわけじゃねえから食いな」

護熾にそう言われ、それと夕飯の匂いで胃袋が刺激された二人は釣られるように席に着く。

そして食事の開始の合図を言い、早速食べてみる。

美味しい、それが最初に出た正直な感想であった。

「……不思議だ、こんなに温かくて美味しい料理、初めて食べた。」

シルナは驚いた表情でそう言う。

何しろ、自分達はしばしば遠征やらで携帯食料や野宿で作る投げやりな煮込みスープを食べてきた身だ。それに何だか安心する感じ

がこの料理、いやこの空間にある。
カイトもどうやら自分と同じ考えをしているらしく一口食べてピタリと凍ったかのように固まっている。

「どうしたの？」

固まっているカイトのことが心配になったのか、ユキナが覗き込んでそう尋ねる。
尋ねられたことで我に返ったのか、慌てて笑顔で答える。

「い、いえ！　その……こんなに手の込んだ料理は初めて食べましたので……」
「あ～、それ分かるな～。護熾の料理は本当に美味しいからね」

そんなのんびりとした会話で自分がどんなものを食べていたかについての話し合いが展開される。その様子は本当に昨日、互いに武具を手に持って戦ったとは思えないような光景で、そんな穏かなひとときの中、二人は自然に打ち解けて行ったのが周りから見てよく分かった。

それからだ。護熾に『フロ』という場所を案内され、そこにあった湯が張られた大きな桶と勢いよく出てくる壁に掛けられていた道具に驚きながらも、軽く湯浴みを済ませ、着替えを手にとって着始めたときだった。

空気が震えるような感覚が頭を襲ってきたのだ。
それは、自分達人間にとってこの世で一番の良くない存在の出現の証でもあった。

「……！　何て事だ、此処にも現れるのか……！」

まさかこんな場所でも、もとい奴らの脅威で此処の住人に危険を晒したくない。
一瞬、身を強ばらせたシルナは直ぐさま着替えを全部着るとなに不利構わず洗面所から飛び出し、やかましく廊下を駆け抜けると玄関をくぐって外へ飛び出していった。
頭の中にあるのは奴らの殲滅と隊長としての義務だ。

「あ、姉さん！」

そして丁度、玄関を潜り抜けて行ってしまった姉を目撃したカイトは声を掛けて止めようとしたが向こうは聞き耳持たず、あっさりとまったく知らない外の世界へと赴いてしまった。
一応気で大体の位置は感じ取れるがここから離れるスピードがハンパではない。
どうやら傷や体調などは今日中にほぼ完了はしているようだ。
だがそんなことを思っている場合ではないのでとりあえずこの家の住民、今二階にいると言われる家主に事情を話すために階段へと向かう。

そして階段を喧しい音を立てながら上り、そして勢いよく開けた先には――――

「ん？　どうしたの？　海洞なら怪物退治に出かけたわよ？」
「Ｚｚｚ……」

風が少し入り込んでくる開いた窓と、こちらを怪訝そうな表情で見るイアルと、ベットの上で今起こっている状況がまったく分かっていないように幸せそうな寝顔で寝ているユキナがいた。

「あ、あの姉さんも同じく怪物退治に赴いてしまったもので……」
「……あ～、で、方向は？」
「向こうです」
「あ、じゃあ心配ないわよ。それにしてもシルナさん、すごい回復力。眼の使い手っていうのは色々と驚かされるわ。」

さすがのイアルももう、この姉弟の突発的な行動に驚き慣れたのか、平然とカイトにそう聞き、指が指された方向を見てそっちの方向に護熾が向かったと言った。
カイトはこの部屋にある自分の所では有り得ない光景に困惑しながらも『はて？』と小首を傾げて不思議がった。この人達は怪物の脅威を知らないのか、それとももしかしたら――――

一方、シルナの方はと言うと自分の知っている世界とは違う街並みや明かりなどに少々驚いていたがそんなのは二の次だ。何しろ怪物の位置をさっきから探っているのにその姿が一向に見えないのだ。
暗闇による視界の悪さと慣れない環境が主な理由であろう。
だが彼女だってだてに眼の使い手ではない。
一度暗闇に染まった道路の上で立ち止まり、もう一度深呼吸をして辺りを見渡す。
すると頭上の方で激しく動く影が２つ。

「いた！」

そう叫び、跳躍すると足の方に足場となる気を踏み固め、それを蹴って高さを稼ぐ。
体調は上々。不備はない。そう思って早速開眼状態に入ろうとしたときだった。
何か妙だな、とシルナは追っている影を見てそう思った。

追っていた影の内、片方は保護色なのか黒い体色をしているので確認しづらいが、もう一人はどことなくぼんやり光っているようなのだ。それも、鮮やかな緑色に。
瞬間、そのぼんやりの影から電気を纏った弾丸のような光が発射され、もう片方の影を射抜いた。
シルナはそれに呆気に取られ、茫然としていたが、射抜かれた影は黒い塵のように風に運ばれていって姿を為さなくなった。そして射抜いた方の影はぼんやり光るのを止めると軽く宙を蹴って下に降りていったので慌てて追いかけるようにその場所へと急行した。

「ふー、何とか飛光をまともな形で撃てたな」

先程の撃破を振り返りながらそう発言した護熾は道路に降りたって結界から出る。

すると先程まで静寂無音の世界から解放され、遠くの街や近くを通る車のエンジン音が耳に届き、元の世界に戻って来れたことを実感した。

さて、ついでだからどっかのコンビニでジュースでも買おうかな。

そう自分の欲求の手間を省けたと考えているとふと視界の隅に誰かが映る。

そちらの方に何だ、と顔を振り向かせると驚愕の表情が隠せなかった。

「あ、おまっ、何で此処に！？」

「護熾殿！　怪物を撃破したのはあなたであったか！」

パジャマ姿で裸足のやや赤色の長い髪をした少女が約一名、道路の上に佇んでこちらを見つめている。

因みに彼女は護熾のことを『護熾殿』といささか重苦しい呼び名にシフトしたようだ。

護熾はパジャマ&裸足少女の許へ誰かに見られてないか慌てて周りを見ながら側まで駆けつける。

「なっんでお前が此処に来てるんだよ！？　寝なきゃダメだろ！？」
「怪物が現れたのだ。それを殲滅するのが我々眼の使い手の指名であってぬけぬけと見逃すことはできない」
「それでもお前は怪我人だ。変なことをしてまた怪我をしたらどうするんだよ？」
「あれは……護熾殿が倒したような怪物によって付けられた傷では、ない」
「？　お、おい」

護熾が怪訝そうな声で訊くと、シルナは自分の肩を抱くようにして何かを思い出しているようだった。
そういえば、あの時もこんな夜だった。
一瞬のようで、でもあの時の死ぬ恐怖はぬぐい去れるモノではない。頭で否定しても身体が覚えてしまっているのだ。

「き、気にするな。さ、さあ帰るぞ」
「おめえが言うなよ」

このやり取りで護熾は大まか、彼女の評価を変えた。
最初彼女が目覚めて出会った今朝では警戒心が強く、どこにでもいるか弱そうな女子、とそう思っていたがイアルが連れてきたカイト（事実上、彼の勝手な行動）に対しあれこれ姉としての威厳が炸

裂し、そして今度はなに不利構わず一人で怪物退治に出てくる、など勇敢な姿や少々我が儘な発言から彼女のことをユキナやイアルと同じくらい気の強いある意味扱いにくい女子だと判断した。

そう判断した後の帰り道。

そういえばこいつ、裸足だったと改めて確認した護熾はまた雑巾か何かで拭かせるか、と考えながら隣を歩いていたがふと立ち止まると、

「あ～、そういえばお前、『結界』というのを知っているか？」

「？　寺院などでお祓いをする場所のことか？」

「あー、やっぱ知らないか、いいか？　結界ってのはな――――」

護熾は手振り身振りでどうにか彼女が理解できるよう、この世界に張られている結界について淡々と説明をした。

同じ刻、日本九州地方のある山林の中で、何かが激しく草むらを大きく移動したので寝床に集まっていた鳥たちが驚き、我先と瑠璃色の空に逃げていく。

そして草むらの中から黒い影、異世界の人間から言わせれば怪物

に分類される灰色の毛を纏った人型の狼のような怪物が飛び出して何かに怯えるかのようにその場から離れようと恐怖に満ちた表情でいた。

だがそれも束の間。
突然怪物はビクンッと身体を強ばらせると口を開いたままその場に固まってしまった。
そしてみるみると、体中の水分が奪われるかのように細くなっていき、皮が骨に沿って萎むんでいくとその場にドサッと倒れ、木々の間を駆けめぐる風に灰となって運ばれていった。

そして何かが引き抜かれるような音がして、それが仕舞い込まれる音も。
怪物が完全に塵となって消え去った後、林の奥から落ち葉を踏みしめて歩く足音が聞こえ、そしてその姿が先程怪物が居た場所に着き、その場所を見下ろしてから言った。

「此処はどこだ？　先程の人間といい、こいつといい、どうやら俺の知っている環境とは異なるものみたいだな」

そう、言葉に感情を一切含ませない言動で顔を見渡し、辺りを見渡してから、

「まあいい、大凡の連中の方向は分かった。どうやら遠くのようだな」

そう言ってその場を跳躍して月明かりが照らされる蒼天に向かって飛び立つ。
ほとんど一瞬での加速だったので影が動いたようにしか見えず、飛びだった際の風で木々の薄茶色くなった葉が多く地面に舞い降りることになった。

それから影は大凡の方向、朧気ながらも関東地区の方向に進路を決めて遙か上空、雲を見下ろせる地点でを保ちながら勢いよく雲に傷跡を残しながら向かっていった。

七周目目　　動く気配（後書き）

ん～、ようやくエンジンが掛かった、気が、する？（笑）
まあとりあえずは自分の山場は超えたかな～？とは思っています。私って苦手な話の部分を書くと一話で二週間近くも掛かってしまうんです。すいません。じゃあ超えたから更新早くなるかなって思えばそうでもないんですなこれが（泣）
　これから七日間少し忙しくなりますし、何しろまだ本編のリメイクと新連載の準備があります。もう、勘弁してくれ～って感じですね（苦笑）
　と、まあ無駄な私事を話しても仕方がないんで次話も心のどこかでこっそりトイレで読む読書くらいの楽しみを持って待ってて下さいね？　では！

八週目目　至極当たり前の日常

翌朝、カーテンの隙間から差し込んだ朝日が瞼を擽り、軽く覚醒を促す。
その光を鬱陶しそうに、逃れるようにベットの上で寝転がせている小さな身体を寝返りさせる。しかし一度覚醒を促されたので、再び心地よい眠りに入る前に、持ち前の根性で何とか起き上がる。

「う～ん、もう朝か～～」

上体を起こし、身体を捻るように伸びをし、軽く身体をほぐす。
そして頭を軽く振って少し乱れた髪を背中に垂らす。
それからまだ重い瞼を手でこすろうと腕を持ち上げたときだった。
ちょうど壁により掛かって寝ている護熾が目に入った。

「……護熾」

そういえば時計の表示ではまだ六時前後。

昨日当番だったのも併せていくら何でもこの少年が起きてくる時間ではない。
しかも今はこの部屋では自分と彼しかいない。

ユキナはジッとその姿を見てから、こっそりと音を立てないようにしながらベットから降り、忍び足で近寄る。
そしてすぐ手が届く距離まで近づくと改めてその姿を見下ろす。
眉間にしわを寄せていない穏やかな寝顔。
ユキナはそれを少し眺めてから護熾の横にソッと腰を下ろし、寄り添うように壁に背中をつけると少し寄りかかるようにしてみる。

あったかい、安心する。そして――――このどうしようもない気持ちが渦巻く。

ああ、これが好きってことなのか……

本気で、そう思う。
護熾は思ったより深い眠りなのか、寄りかかられたくらいではまったく応えない。
まあ、ユキナもそれを知っての行動でもあるが。

こうしている間にも、この少年は着々と普通に生きていく人の何倍、何十倍、と早い速度で命を消費しているのだ。
これが正しければ、あと五ヶ月。本当に短い時間なのだ。
それを考えると、自然と両目が潤んで不安げにまた護熾の顔を窺うように覗く。

もういつでもこの気持ちをぶつけたいのに、好きとは逆の恐怖が、

喉から出かかっている言葉を押さえつける。
彼女は言いたい気持ちが言えなかった悔しさと、言わなかったことで普通の関係のままでいられることの安心感を毎日持ちながら過ごしてきた。
それはたぶん、あの二人も同じ。

この人のことが好きか？　――うん
この人にすべてを預けられるか？　――うん
この人の隣にいつまでもいたいか？　――うん
この人がお前のすべてを持ってるか？　――うん
この人に今すぐこのどうしようもない気持ちを伝えるか？　――
それはまだダメ

最後の自問自答で彼女はあっさりと否定した。
だって、まだあの二人がいるもん。
それが大きな理由であって同時にまだ伝えることができない自分の弱さを隠すための言い訳でもあった。
まだ、時間はある。今は、こうして隣にいたい。
そう思ってから、だらしなく投げ出されている彼の手をソッと握る。
何もかも大きく包んでくれるような、大きな手。
ユキナはわずか三十分の間、早起きは三文の得以上の恩恵を楽しんで過ごした。

今日は月曜日である。
二日間の休息を終えた人々は、仕事場へ、学びの舎へ、足を運ばなければならない。
護熾達も例外ではなく、さっさと身支度をして学校へと向かわなければならない。
ユキナとイアルは現世の危機的状況をいち早く探知するために派遣はされているのだが、一応護熾を守るという名目でも動いているので彼女らも行動を起こす。
だが今日は少し違うのだ。

「……どこへ行こうとしているのだ？」

少しぶっきらぼうに、しかし興味がありそうな意志を瞳に覗かせているシルナは制服へと着替え終わり、もういつでも出発ができる護熾にそう声をかける。

「ああ、学校に行くんだよ」
「学校……？」
「ああ、それとお前ら二人は怪我してるんだから家の中にいろ。もし怪物が現れても俺たちがすぐに駆けつけるから無理して外に出るなよ。お昼は机の上に置いてるからそれを食べてくれ」
「護熾～、置いていくよ～？」
「はいはい」

外からユキナの声が聞こえ、護熾は返事をする。
それから顔を振り向かせ、シルナを見る。
傷など昨日のうちに治ったようで、顔色もずいぶんよくなった。
気力も機能までとは比べものにならないほど増大しており、なるほどこれは確かに目の使い手だと確信させた。

一方シルナというと学校というのは一体どんなのであろうか？
こんなに朝から慌ただしく行かなくてはならないのか？　まさか軍隊の招集なのか？
そんな様々な疑問が浮かんでくるが、その疑問に応えることもなく護熾は再度念を押すようにシルナにとにかく休んでいろと言い、慌ただしく玄関から出て行ってしまった。

「……」
「姉さん？」
「ん、カイトか」

後ろで全員が家からいなくなった時を見計らっていたのか、カイトが呼びかけ、シルナもそれに応じて顔を振り向かせるとその表情に少し驚いた。
何か聞きたがっているような、そんな表情。

「”あのとき”傷口を止めたのは……姉さんだよね？」
「……そうだ」
「じゃあ……”あいつ”は？」

あいつ、とは無論あの怪物のことであろう。
シルナはまるで言われるまで忘れてたかのような表情をし、それからすっと息を吐いてゆっくり歩き始め、カイトの横を通り過ぎ、今へと向かう。
カイトもその後に続いて追い、彼が居間に入った沖にはすでに彼女はソファーに座っていた。

「……わからん」

その言葉の意味を理解するのに数秒を要したが彼女があの怪物の生死について答えたのだとわかった。彼はその答えに一瞬息をのむが、すぐに声を出す。

「分からない、というのは……？」

「私の能力は知っているだろ？　その力を最大限に振り絞って奴にぶつけたのだ。やったことがないから私も死ぬかと思っていた。だが……何かの拍子でどうやら私たちが思った結末とは違う方向に向かったようだ」

「……ごめんなさい、僕の配慮が甘いせいで、心配をかけさせてしまって……」

「それは、もう昨日のうちに許した。問題は今私たちがいるこの場所、この……時代だ」

「ええ」

薄々二人は気づいていた。

この世界の雰囲気、この世界の技術力。

カイトは病院の施設で、シルナは昨日の夜の町と護熾から聞いた結界という、怪物達の戦いにおいて周りに被害が及ばないようにするカラクリから自分たちが知っている技術とは比べものにならないほど飛躍していることに内心驚いていた。

今だってこの家の中にはそのような見たこともないカラクリがたくさん潜んでいるのだ。

指で壁についている湾曲した四角いボタンを押せば火ではない明かりが灯り、謎の黒い薄い板からは動く絵が写る。

この世界は一体なんなのか、それが今二人にとって一番の疑問だった。

「――とまあ、考えたところで何の解決にもならんがな」

結局、自分たちの考えの及ぶ範囲ではないと判断したシルナはそう呟いてふと、机の上にあるものに目を向ける。

きれいに三角に握り込まれたおむすび。

それが八個ほど皿に盛られ、一つ一つが丁寧にラップで包まれている。

「あの男に”休む”ように言われてるからな」

そしてようやく改めて顔をカイトに向ける。

「ここに住んでいる人たちが戻ったら、何もかも話した方がよさそうだ。どうだカイト？」

「はい、そうだと思います。ここの人たちにはずいぶんお世話になっていますから……姉さん、そういえば何だかうれしそうですね？」

「……そうか？」

不意にそう聞かれたことが意外だったのか、シルナはごく当たり前に答えたが、どうも弟の言っていることがまったく外れではなさそうだ。

そういえば、カイト以外の男の眼の使い手なんて、見たことがなかったな。

そう思ってから、彼女にしては珍しく少しだけ顔を綻ばせた。

七つ橋市という名前には由来がある。
それはこの町が時代の流れに乗って近代化しようとしたとき、資材やら人が行き来するために橋の建設が行われ、その橋の数が全部で七つ建設されたからこのような名前になったという。今は取り壊されたりして五つほどになっているが今でもその橋が使われ、いろんな人が今日も行き交っている。

今、護熾達が学校に行くために渡っている橋もそのうちの一つである。
季節は秋、春とは真逆の、肌寒い空気が体中を包み、密かに冬の到来を伝えるこの時期の中、三人はぞろぞろと並んで歩いていた。

「今日の体育って体育館だっけ？」
「そうみたいね。内容は確かバレーだとか」
「うわ～～、突き指すると包丁握りづらくなるんだよな～」

日本全国でバレーの突き指で家事に支障が出ることを心配しているのはおそらく彼だけであるとは思うが、そんなことは気にせずに学校に向かう歩速は変わらず向かっていく。

その道中ではユキナが時々護熾を突いたりして少しじゃれたり、イアルが『また昨日ギバリがさ～』とF・Gで起こった騒動を話したりとごくごく普通に退屈なく学校の正門までたどり着いた。

護熾、ユキナ、イアルの三人は１－２である。
このうち二人は学校の先生方や教育委員、または生徒の数を突いてこのクラスに滑り込んできたのだがそれは気にせず、上履きに履き替えた三人はその教室の中で今はおとなしくしていた。

教室内は少し暖房が入っており、廊下の温度と綺麗に相殺して快適な環境が生まれており、今すぐにでもまだ身体の奥底に眠っている眠気に身を任せて寝てしまおうという気を起こしてしまいそうになるが今回はぐっと堪えていると教室の引き戸から入ってきた人物が早速三人を見つけて声をかけてきた。

「おーっす海洞、木ノ宮さん、黒崎さん」
「うーっすっ沢木」

教室に入ってきたのは外見も背もまあまあの男子で名を沢木雄一と言う。
中学からの護熾の友人でこのグループの中では副リーダー的な存在である。
そんな彼に続いてヒョコッと開いた引き戸から顔を覗かせ、一人の、椅子に座る我がクラスの妹キャラを見つけ、それから手を振ってこちらに来るは、

「おっは～、今日も冴えない顔の海洞、沢木、黒崎さん、そして我が愛しのユキちゃん～～～～！！」
「あ、近藤さんだ～、うぅ～～～」

ユキナは嬉しそうにそう言い、後からくる抱擁も嬉しそうにする。
次に入ってきたのは女子で、外見は勝ち気、世間で言うところのボーイッシュな外見をもつ少女で名を近藤勇子と言う。
彼女もまた中学から護熾を知るよき理解者（？）で、とある一件

（沢木と近藤はそれをチェリー騒動と言う）で仲良くなった一人でグループの中ではその男勝りな性格を発揮してリーダー的な存在となっている。

彼女が人きしりにユキナにハグハグしていると続いて後から男子二人組がやってくる。

「うお～っっすみんなおはよ～～」
「おはよ～みんな。ええと、木ノ宮さん、おはよ」
「あ、おはよう宮崎君、木村君～」

愛嬌のある顔でいかにもスポーツマンな方が宮崎隼人と言い、最近自分だけ”マ行”の所為でみんなから席が遠かったが、最初の席替えで見事みんなが密集する席順になったことを密かに喜んでいたりする。

そしてもう一人、彼が大抵の女子に声をかければホイホイとついて行くような甘いマスクを持つ二枚目だが、護熾達との交友では三枚目も覗かせる少年は木村雄二という名で、ユキナが転校してきた初日からその笑顔に魅せられて、恋心を抱いている。

以上ここまで四人が集結し、三人から七人に大幅に増えたがまだ一人足りない。
そのもう一人は四人が到着してから数分後、静かに引き戸を開け

て教室に入ってきた。

控えめな外見であるが、肩で切りそろえられた髪は柔らかそうで、七人を見つけた彼女はホッと誰が見ても穏やかな気持ちにさせられる微笑みを浮かべると七人に近づいて八人となる。

「おはよみんな」

「千鶴～遅かったわね～」

「うん、ちょっと朝練手間取っちゃって」

控えめで地味なタイプ、でも大人しいだけで外見はかわいいの一言に尽くこの少女の名は斉藤千鶴と言う。そんな彼女は改めて七人を見て、その中で護熾を見つけると少しだけ顔を赤くして顔を伏せてしまう。

実は彼女、初夏のとある日に護熾に親切にさせてもらったことがある。

そのときはまだ　あ、見た目とは違って優しい人だな、と少し気になる男子くらいだったがある日彼と商店街でばったり会い、そこで身体目当てで襲ってきた不良軍団から彼に護られた時、自分の気持ちにようやく気がつき、以来もじもじとするようになってしまったのだ。

近藤はもちろんそのことを知っているし、ユキナも、イアルも知っている。

知らないのは男子陣だけなのだ。

それと彼女は『意外と着やせするタイプ』でそのあどけない顔立ちとは裏腹に見事なボディを持っているのだ。それは、毎度のごとくユキナの羨望を浴び、近藤にそれを冷やかされたりするのだが。

しかし彼女が持っているのはそれだけではない。

彼女はこの世の中で二人目に――――真実を知った人間でもあるのだ。

「大丈夫？　……もしかして体育館倉庫の裏で、旺盛な男子に押し倒されたりしちゃって――」

「ち、違うよ勇子！？」

「朝っぱらからなんてことを言うんだよ近藤！？」

「ふっ、今世間では草食系男子って嘆かれているこのご時世にちょっとした刺激よ」

「その世間のために友を売るなよ」

「それに草食系男子草食系男子っていうけどじゃあ何がお望みなんだよ？」

草食系男子？　っと思ったユキナはややお下劣な発言をした近藤にわいのわいのとやっている沢木、宮崎、木村を見てから宮崎君は違うとして確かに二人はサラダをたくさん食べてそうだと、至極まったく見当違いの結論を出す。

「簡単よ、積極的になればいいのよ女子に対して。人はそれを肉食系っていうのよ」

「えらく簡単に言ってくれるな。それってプレイボーイになれってことか？」

肉食系、と思いつつイアルは護熾にチラッと視線を向ける。

自分が知っていることについてはまた彼も草食系に当てはまるタイプであろう。

しかし、今の彼がその肉食系とやらのタイプに変わったらどうなるだろうかと他愛もない妄想を描いてみる。

夜になると、積極的で、力強く自分を抱いて、『好きだよ』と耳元で囁き、自分もそれに頷いて、いつのまにかベットへ――――って

何を考えとるんだ私は！？

っと、風紀委員長でもある彼女は自身が描いた妄想の中で自分を殴りつける思考に切り替えたときに、なにやらさっきの妄想で苦悩している自分を心配そうに見ている眼差しが一つこちらに向けられていることに気がついてそちらに視線を向けた。

「あ、あの黒崎さん大丈夫？」
「え？　ええ、ああ、うん、だいじょぶ」

若干背筋が冷える感覚を覚えながらあくまで冷静に言ったイアルは目の前に、近藤と男子三人のやりとりを背にしている千鶴に顔を向ける。

「あの人……シルナさんの具合はどう？」
「うん、さすがは眼の使い手って思うほど一日でもう全快よ。今は家でまだ休むようになってるけど」
「め、眼の使い手！？」
「あ、言ってなかったわね。彼女は間違いないわ。それと昨日、彼女の弟さんが無理矢理私を尾けてこっちに来ちゃったのよ」
「そ、それは大変だったね……」
「そ。だから同じように家の中にいてもらってるけど、長くいさせるのは海洞に悪いからあの二人がこちらを信用してくれたらすぐにでも向こうの病院に移すわよ」

どうやらこの先の措置は考えていたらしく、千鶴もその方がいいと思った。
しかし彼女が眼の使い手だったなんて、確か眼の使い手は八人しかいないって聞いてたけど。

「お二人さんして何の話？」

不意にそんな声が聞こえ、そちらに顔を向けるのと同時に小柄な少女がヒョコッと横から顔を出し、顎を机の上にのせる。

小柄な少女、ユキナがこちらに来たのはおそらくこの”二人”の話している内容が大凡彼のことだろうと予測しての行動であろう。

しかしイアルはそれを見透かしながら、彼女の小さな頭を撫でるようにしながら少し意地悪な口調で言う。

「残念、あんたがお望みの会話じゃないわよ。昨日ウチに来た二人を何とか信用させて向こうに戻すっていうプロセスの話よ。」

「べ、別に護熾の話をしてるのかなって思ってきたわけじゃ……」

「口から思ってることが漏れてるわよ？」

「む、ぐぐっ、しまった」

思っていることがバレたユキナはキョロキョロと誤魔化すように大きな瞳を左右に揺らす。

「本当にユキちゃんって……海洞くんのこと好きなんだね？」

「えっ……それは……うん、好き」

「おそらくこの三人の中じゃあこの子が一番べた惚れよ。まあティアラちゃんには負けるかもしれないけど」

「むぅ～、あの子はまだ１４なの！　あの子に比べたら私なんてもっともっと――！」

そうムキになって返す彼女の姿は、本当に見た目通りの少女なのだと、思える。

「はいはい、そんな声出すと彼に聞こえるわよ。」

「うっ、む、むう～……」

「あはは、まあ落ち着いてユキちゃん」

イアルにズバズバと言われ、意気消沈したユキナは穴を開けられた風船のようにヘナヘナとまた顎を机に付け、千鶴はその光景をほほえましく思って慰めで頭を撫でる。

そしてふと思う。

確かに彼女はこの中では彼のことを意識している。

ただ、自分たちのことがあるのか、それとも責任があるのか、そのまっすぐな気持ちが彼には伝わっていないのだ。まだ伝わっていないことに少し安心した自分に気がつき、少し呆れる。

少し前のあの日、彼は大怪我をして、身体が小さくなった。

何しろ今目の前にいる少女、イアルを助け出そうとして相打った結果でそうなったのだから。

その時の彼は本当に可愛く、本当に弱かった。

全身包帯だらけで傷だらけで、見るからに痛々しかったが、それでも闘志の灯いた両眼は今でも覚えている。

それから自分は、話を聞いて、護られているだけの自分に嫌悪した。

同じ年なのにその許容量を超えた使命を背負っている彼がかわいそうで、泣きながら思わず彼を抱きしめ、自分の気持ちを伝えた。

しかし彼はすでにご就寝だったので今にして思えば幸いだと思い出して勝手に顔を赤くした。

「さて、時間だからもう戻った方がいいかもね」

「そだね」

「え？　ああうん」

「ん？　どうしたの？　ってか何で顔赤いの！？」

「え？　あ、違うの違うの！」

ユキナにそう聞かれ手振り身振りで誤魔化す千鶴はそう答えるがこの二人には誤魔化しようがないであろう。

「んっふふ～ん。分かってるわよ斉藤さん。そう慌てなくても」

「う、く、黒崎さんの意地悪～」

「ま、でも彼は元気よ。ほら今だって――」

イアルはそう愁いを帯びた表情でソッと、彼が、護熾がいる席に顔を向けると――

「ガツンとしなさいガツンと！　草食系男子代表の海洞！」

「何でそうなってんだよ！？　いつから巻き込まれた俺は！　えぇ！？」

近藤の草食系男子論に巻き込まれたのか、彼女のヘッドロックを喰らってぺしぺしとギブアップ宣言をしている護熾の姿が今はクラスの光景となっていた。

そんなこんなで普通に一時限目を終了し、二時限目との合間の十分休憩。

護熾は椅子に座って入り浸り、ユキナは恒例のあんパン買いからすでに帰ってきており、四つくらい入ったパン袋を横にハムハムと幸せそうにあんパンを頬張っていた。

それと余談だが、あんパンが入った以外の袋も数個あり、それぞ

れ甘い系の菓子パンがずらりと並んでいる。普通は小柄な少女が食べきれない量だが生憎彼女は眼の使い手だ。
いざ戦闘となれば消費するエネルギーなど馬鹿にならない。
が、

「――にしたってよく食うよなこいつは」

ジッと目の前にある小さな背中を見ながらそう呟くと、小さな頭がこちらに振り向く。パンは咥えたままだ。

「……あげないからね？」
「そんなの期待してねえよ」

バッと袋抱え、本能に従っている少女に護熾はそう答える。
今はこの二人以外の六人はトイレや飲み物やパンを買いに出かけていたりしている。
それと同時にクラス内の人も疎らであり、若干寂しい雰囲気だった。
なのでとりあえず暇な護熾は頬杖を付いて窓の外の景色を見る。

もう冬間近の１０月下旬。
申し訳程度に付いた葉っぱが風に何度もさらわれそうになっている。
それとは裏腹に、穏やかな日差しが今見ている世界を明るく染めている。
いつもの光景だ。本当にこの世界が驚異に晒されているのが微塵も感じられない。

「外はなかなか賑やかだな」
「ああ」

自分のすぐそばで誰かが言ったのでそれに頷いて返事をする。
「どうも寒くても元気な奴らが多くてよ、俺は寒いの好きじゃねえからいつもここにいるんだけどな」
「確かに、寒いと身体の機動が削がれ、集中力も鈍くなる」
「そうそう、たまに暖房が効きすぎて眠くなることだって多くなるし」
「それは根性で立て直すしかないであろう」
「まあそうなんだけど……んっ？……ちょっと待てよ――――？」

ようやく違和感に気がついたのか、さっきから自分と会話をしている人物に顔を向けるととたん、表情が固まった。
七つ橋高校特有の藍色と水色のラインが入った女子生徒専用の冬服。
やや長めのスカートにネックの赤いリボンが印象的だ。
だが問題は制服ではない、着ている人物の方だ。

仏頂面で胸の前で腕を組み、気の強そうな整った顔でやや赤めの長い髪をポニーテールにしてそれを二つに分けている珍しい髪型。
護熾は確かにその人物を知っていた。それよかつい一時間前に会ったのだ。
護熾が何かを言い出す前に、怪訝そうな表情をしている少女は言った。
「結界とやらの使い方を教えてくれ、護熾殿」
シルナは至極当たり前そうに目の前で固まっている少年にそういった。

八週目目　至極当たり前の日常（後書き）

どうも、一ヶ月近く書けないとは運命の悪戯というのはほんと怖いですね。

さてさてこの物語もこの話をいれて5話で一旦停止です。

停止予定ですが新連載が始まったらちびちび書くつもりなのでもしこれの続きを楽しみにしているかたがおりましたら、まあ新連載の方にも目を通しつつこの更新も楽しんでいただけたら、最高ですね、自分としては（笑）。

じゃ、次回もまた！

九週目目　屋上での集結

「え……何で？」

護熾の異変に気がついたユキナは楽しみのあんパン食いを一時停止させ、後ろに振り返ってみると我が目を疑う光景がそこにあった。

この学校の制服を纏い、腕を組んで驚いている護熾を見下ろしている人物。

家にいるはずのシルナが確かにそこにいた。

「なっ……なっ……家で大人しくしろっていったのに……」

完全に呆気にとられた護熾はワナワナと肩を震えさせるが当の本人は得意そうに胸を張る。

「護熾殿は”怪我をしているから大人しくしろ”と言った。だがもう私たちは怪我など無く、大人しくしている意味はない」

「ただの屁理屈じゃねーか！」
「命令の穴を突いたと言ってほしい、それに……ほれ」
そう言いつつ、制服の裾を捲りあげる。すると柔らかそうな肌が露わになる。
鳩尾から下腹部までの腰の絶妙なラインがそこにあり、なるほど傷は跡形もなく消えている。だがそれはあくまで客観論。
この光景を目の当たりにしている少年にとってはメガトンクラスの衝撃でポカンと開いた口が塞がらないかのようにその場に固まる。
それに、彼女の腰から上の、そう、胸の辺りが少し不自然なのだ。
少しだけ、何か膨らんだ肌の部分がわずかに見える。
そう、彼女には上半身の下着を着ける習慣がないのだ。

「なっ！　なっ！！　なっ！？」

その光景にユキナも困惑の声しか出ず、慌てて席から立つとシルナに飛びつくように駆け寄る。

「だ、ダメだってシルナさん！」

駆け寄ったユキナはそばに着くなり両手で捲り上げられた裾を下に引っ張って戻し、露出した肌を隠す。そこでようやく顔を真っ赤にして固まっていた護熾も意識が戻り、首をぶんぶんと振って今の自分の状態を確認する。

「わっ！　え～っと、ユキナ殿？」
「シルナさん！　男子にそんなやすやすと肌を見せないで！　相手が護熾だったからよかったけど……」
ほかの男子じゃなくて安心したが、逆に護熾だと自身の気持ちに

少しチクッとくる。

「そうか？　まあ、この服も確かに落ち着かないであるが」

シルナはそんなことを言いながら改めて自分の服装を確認するように見る。

今シルナが着ているこの制服は、サイズから見てイアルの予備の制服を拝借したのであろう。

意外と似合っているという褒め言葉は抜きにして、ユキナは問い質す。

「どうしてここにいるの！？」

「どうしてって言われると……そうだ、結界とやらの使い方を聞きに参ったのであったな」

「だ　か　ら、怪物の処理なら私たちがするからまだ安静にして――」

「そうですよ姉さん、ユキナさんの言うとおりです」

ふと別の声が教室の隅から聞こえた。

その声の方向に従って顔を向けてみると少し困ったような表情の男子が引き戸のそばに立っていた。服装は間違いなくこの学校の制服であったがまたしても違和感があった。

それもそのはず、何しろ男子専用の制服を纏ったカイトがそこに立っていたからだ。

おそらくこっちは護熾の予備の制服であろう。

「な、お前も来ていたのかよ！？」

「すいません護熾さん。姉が身勝手な行動を起こしてしまって……」

そう、申し訳なさそうな表情でカイトはこちらに近づき、シルナ

の隣に立つ。

「……え～っと、だいたい想像着くけどおいカイト、改めて言うけど何でお前らここに来てんの？」

「はい、今朝姉さんは皆さんが家を留守にしてから半刻と少し立ってからいきなり皆さんのこの服を手に取ると『護熾殿にまだ聞いていなかったことがある』などと言って勝手に家を飛び出してしまったので僕もやむを得ずこの服を拝借して追いかけてきたんですけど……」

で、この結果だというのが語尾の弱さで分かる。

そして今度はカイトから改めてシルナに視線を移すと、

「うむ、護熾殿を探知してここまでくるのに少し手間取ったが何とかここにこれたのだ」

そう言って胸を張る。

どうやら弟同様で割と身勝手な性格の部分もあるようだ。

幸い、二人はしっかりと家を出て行くときの三人の姿を見ていたため服装の選択は誤り無く、ここのクラスの生徒達からはそう違和感なく他のクラスから遊びに来た生徒としか彼らを認識していないようだ。

だが、やはり問題だらけだ。

「～～～～～んっ、あ～！　ちょっ、お前らこっち来い！」

「わっ！」

「おっ！？」

人きしりに悩んだようにした護熾は頭に浮かんだことを即実行するかのように席から立ち上がると二人の腕をつかみ、力強く引っ張

る。
腕を捕まれた二人はその力強さに圧倒され、ぐいぐい引っ張られる。
やがて、教室ではユキナだけがポツンと残された。

「……」
「たっだいま〜ユキちゃん〜〜」

後ろ姿を見送っていたユキナの後ろからムギュッとちょうど入れ違いに入ってきた近藤が抱きしめ、うりうりとするが、いつもの嬉し声が聞こえなかったので途中でやめて顔を窺うようにしてみる。

「どしたのユキちゃん？」
「ん。ん、いや、何でもないよ近藤さん？」
「……そう？　何か困ったことがあったら言ってよね？」

ここぞとばかりに姉御肌を見せる近藤にユキナは微笑んで答える。
それを確認した近藤はうんうんと言いながら頭を軽く撫でてあげる。
ユキナは撫でられながらふと思う。
困ったことがあったとしたら、意外とシルナの胸があったことについてであろう。

それから少し経ち。
千鶴達が帰ってきて、二時間目が始まる一分前に教室の引き戸を開け、廊下から息切れを起こした護熾が帰ってきた。あの二人の姿

は見えない。

「あ、海洞くんどうしたの？」

「あら海洞、何盛ってんのよ？」

「誤解を、招くような、発言はよせ、近藤」

近藤にそう言いながらふらふらと自分の席に戻り、突っ伏す形で机に頭を付ける。

次の休み時間で分かったことだが、彼はあの二人に一旦家に戻って、それから彼女にこういわれたそうだ。『もし怪物達が我々を狙って来たら、昨晩話した護熾殿の話が本当であるならば、太刀打ちができない。ならば自分たちの身を一番安全にできるのは間違いなく護熾どの達なのだ』、と。

確かに怪物達は身体の表面に異空間を広げ、それを使って人間達を狩っていくのだ。

それに、怪物達は気力の高い人間に引き寄せられる傾向がある。

それは、マールシャ戦で自身の気力を覚醒させてしまった千鶴がいい例で、最近彼女の家の周りで怪物達がよく出現するようになったのだ。今のところ彼女に直接被害が加わるようなことは起きてはいないのが幸いといったところである。

「それでなんて言ったの？」

「怪物の気配を察しったらこっちにすぐ来るように言いつけた」

そう言いつけたとき、シルナの表情が少し微笑んだことに彼は気がつかなかったが。

「ふ～ん、そうか。それならいいかもね」

「ったく、姉弟そろってじゃじゃ馬だな」
そう言いつつ護熾は買ってきたココアパックにストローを刺した。

それから三時間目、四時間目が無事終了し、お昼の時間である。
お昼では友人同士が席をくっつけあってグループを形成し、弁当をつつきながら少し長いこの時間で談笑を楽しむのがセオリーであり、午後に向けてのエネルギーチャージでもある。
護熾も例外ではなく彼の周りでは七人がわらわらと席を寄せ合って談笑を開始していた。
しかし今護熾は、そんな会話は聞こえていなかった。
その様子に沢木は不思議がり、宮崎は突いてきたり、千鶴が少し困惑し、ユキナは頭にちょっかいを出してきたので適当にあしらってお返しに軽く頬をつねられ、イアルは不思議そうにし、木村は気がついていないようでユキナと話し、近藤は『どうしたの海洞？』と聞いてきたが敢えて無視していた。

何か、こっちに近づいている気がする。
それは頭の中で薄ぼんやりと、しかし確実にこちらに向かって何か近づいてきていた。
それが何なのかを理解する前に、イアルの携帯、基い通信端末が鳴った。
そしてそれを取り出し、折りたたんでいた電子板を解放させ、その内容を見たイアルはソッと呟くように言った。
「え〜っと……海洞、ユキ———」
全部言い終わる前に、護熾はガタンと席を立つと猛ダッシュで教

室から出て行く。

「え？　ちょっと海洞どこ行くんだよお前！？」

沢木が呼び止めようとするが、言い終わる前に既に廊下の彼方である。

「いきなり動いたからびっくりしたわよあたし～。ねえ千鶴」

「う、うん、ってあれ？　ユキちゃんも？」

千鶴がそう怪訝そうな声で先程モクモクとお弁当を食べていたユキナが忽然となっていることに気がついてポカンとする。もちろん弁当箱も消えて無くなっている。

「あれ？　木ノ宮さんいつの間に！？　ってあれ黒崎さんも！？」

続いて今度は木村がイアルもいなくなっていることに気がついて呆然とする。

さっきまで三人がいたのに、ものの五秒程度でまるでこちらの意識の死角を突くかのように姿を眩ませたことにさすがにその場に残った五人は唖然とした様子で固まる。

っと、ここで千鶴は何かに気がついたかのようにハッとなると彼女らしからぬ物凄い速さで弁当を食べ終わると、席から立ち上がり、

「あ、私も行くね！」

「え、ちょっ千鶴って、って食べるのはやっ！」

近藤が呼び止めと驚きの声を最後まで聞かず、ほぼ全速力で教室を出て廊下を走る。

そして取り残された四人の内、近藤は少しだけため息を吐いてから、男子三人に目線を移し、

「最近何だか置いてけぼりを喰らうようになったけど、あんた達は？」

近藤の求めてきた同意に、沢木、木村、宮崎は激しく頷いた。

それから僅か数十秒後のことである。

今日は何と言ってもどこまでも広がりそうな、わたがし雲がちょくちょくある蒼天である。

そんな青空の下の元、異変は起きていた。

住宅街の屋根を疾走し、そして大きく跳躍する二つの影。

あまりにも速く、屋根の上ということもあって道を通る人々はまったく気がついていない。

だがそこには確かに、銀色の長髪と金色の髪というこの日本では些か異様な色の髪をした若い男女が昼間に人ん家の屋根を伝いながら何かから逃走しているのだ。

「くっ……護熾殿の言ったことは本当だったな！」

そう悪態をつきながら着地した別の屋根で疾走を再び開始する。

「本当にこちらの攻撃の類が一切通用しないとは……やはりこの世界は僕たちの知っているのとは先が進んでいる、っと、ようですね

！」

そう言いつつ足に力を入れ、また大きく前方に跳躍する。

「ああ、だからこそ、今この世界にいる眼の使い手殿に、情けないが助けを請うしかないのだ」

それから前方に顔を向け、コンクリートの道路に足を付けるとヒビを作り上げるくらい力を溜め、そして先程までとは比べ物にならない跳躍力を見せる。

この飛んだ先で、彼は自分たちに来るように言った。

学校という建築物の、頂上部。

黒緑色の、小さな六角形の穴をたくさん作るかのように仕立てている囲いの中で、確かに彼は待っていた。

昨日見た、鮮やかな緑色の髪を持って。

そして傍らには、今度は鮮やかな夕陽を思わせるオレンジの髪をした少女が肩に刀を担いで立っていた。

そしてその二人が、待ち侘びたかのように、自分たちを見つけるとすぐ様臨戦態勢に入る。

そして銀と金の二人組が、屋上に着地する瞬間、二人は”異空間”に突入した。

突入すると同時に、二人を追ってきた黒い影が視界に入る。

体長二メートルほどの虎の頭を持つ人型の怪物、それも三体。

おそらくシルナとカイトの高い気力を狙って追ってきたのであろう。

しかし二人はこれまでも何度も戦ってきたし、何しろ今の状態より一段階上の状態にも変身できるのだ。抜かりはない。

ここでまず最初にユキナが、二人の足が地に着いた瞬間、神速、ほぼ一瞬の跳躍で左の一体の懐に潜り込むと、途端、手にした『紅碧鎖状ノ太刀』の切っ先を突きだして深々と突き刺す。

怪物は断末魔の絶叫を吠え、程なくして灰となる。この間僅か四秒。

残り二体となった怪物達は仲間が一人殺され、困惑の色を見せたかと思うと、その内の一体が怒りの雄叫びを吠えたかと思うと地面に足を付け、否、まだ宙にいるユキナに向かって方向転換するとそのまま跳躍をする。

ユキナは自分に迫ってきた怪物に気がついてすぐさま臨戦態勢に入ろうとすると、途端、自分と怪物との間に人影が入り込み、

「俺がいんの忘れんじゃねえ」

そう吐き捨てるように言って飛びかかってきた怪物に力を込めた右豪腕を突き出すとまるで紙のように怪物の胴体を貫き、声も上げさせずに一気に灰へと帰させた。

「護熾……」

自分を護ろうと間に入ってきたこの少年に対し、ユキナは胸の中で心地のよい気持ちを生まれさせると自然と頬を朱に染めて上気する。

だがまだもう一体いるのでボーッとするのを止め、すぐさま冷静に戻ると鋭い視線を投げかける。

すると不思議なことに、最後の一体から断末魔の叫びが聞こえた。

「まったく、変な連中まで連れてくるなんてほんと困った二人ね」
見るとイアルがそう文句を垂れつつも二メートルもある怪物の胴体を普段、背中に飾るようにして携帯している迷彩を掛けた超振動刃ブレードで横一線に切り裂いており、見事に灰へと変えていた。
そして屋上での静かなる戦いはものの一分程度で幕を閉じた。

「す、すごい、これがこの世界の眼の使い手の強さ……！」
その一部始終を見ていたカイトは素直な感想を述べる。
シルナもそれには同意のようで軽く頷いてみせる。
頷いてから、戦いを終えた一人の少年を見つけるとすぐさま駆けつける。

「護熾殿！」
そう叫んでからこちらを振り向いた少年はそのまま歩き――まるで気がついていないかのようにそのまま歩いてきたので、

「え？」
ぶつかると思いきや、その身体がすり抜けたのでシルナは驚きの声が隠せず驚愕の表情になる。

「ご、護熾殿……？」
そう言って振り向くと自分の身体をすり抜けた少年は辺りをキョ

ロキョロし、そして元の黒髪の状態に戻ると少しだけ彼の周りの空間が歪み、すぐ治まった。

「ふ～やれやれ、っと、おっ、そっちにいたかシルナ」

こちらに不思議顔を向けている彼女に気がついた護熾は声を掛け、それから歩み寄って数歩手前で立ち止まる。

「怪我はねえか？」

「え、あ、ああ。……さっきのが護熾殿の言った『結界』というものなのか？」

「ああ、これのおかげで周りのもん巻き込まなくて済むし……でも……悪い」

「え？」

「怖かったろ？　倒せない敵がいてさ」

「……いや、平気だった」

「そうか、それにしても本当に怪我がなくてよかった」

そうやって本当に安心したかのように少し微笑んだ彼に、彼女は少しだけ気持ちはうずくのを感じ、頬を少し朱に染めてから軽く微笑んだ。

一方、戦闘を終えたユキナも鞘に刃を収めてから開眼状態を解き、カイトの様子を見に行っていた。

そして彼の前に来てから大きな両眼で彼を見ながら訊いた。

「怪我ない？」

「あ、はい。それにしても、本当にお強いですね」

「ん、でもあのくらいだったらカイトやシルナさんでも簡単だよ。でも今回は結界がなかったから……怖い思いさせちゃってごめ

んね？」

そう言ってから少し済まなそうな顔をする。

その表情を見たカイトは慌てて手振り身振りでフォローするように言う。

「い、いいえ！　僕が単に対処しきれなかったという不届きな態勢の所為です！　それに謝るのはこっちです！　男たる者がおなごに護られるなど言語道断です！」

「……じゃあ私に助けられたの、嫌？」

「あ、いえ、そういうことではなく、僕の情けない姿を見せたことに対してです……」

「……ふふ、分かったよ。でもホントに、怪我が無くてよかった」

そう言ってからユキナは笑ってみせる。

その笑顔は、見た目相応というと失礼だが、とても魅力的で、可愛らしく、同時に安心させられるかのような、太陽のような笑みであった。

（ほ、本当に、か、可愛いなこの人は……）

それを見て、不意にカイトは自分の頬が赤くなっていることに気がついて首をブンブン振って冷静になる。

「と、とにかく本当にありがとうございました！」

「うんいいよ」

そう言った時だった。

不意に屋上の鉄扉が開いたかと思うと、

「海洞くん！　ユキちゃん！　黒崎さん！　ってあわわっ！」

後からやってきた千鶴が息を切らしながらやってきて、三人の姿を見てから、躓いて派手に転んだ。

九週目目　屋上での集結（後書き）

う～ん、何だかもっと執筆が苦しくなってきたと思う今日この頃です。
何で書いててこんな苦しい思いをするんだろうか？　絶対変だ。

っと、最近何だかレギオン編がきつくなってきた私です。
護熾は好き、ユキナも好き、シルナも好き、カイトも好き、レギオンも好きで物語自体も好きなのに、何でこんなに苦しいんだゴットよ！
ってなわけで誠に勝手で誠に勝手ですがキリが良いので次回の１０話で一旦停止と変更させていただきます。
そしてそのあとに本編の方でラルモ＆アルティのその後みたいの何かを書き下ろしてから新作の方に力を注いでいきたいと思っております。
では次回の話のあとがきで会いましょう！　では！

十週目目　それは標的を目指す。

「え～っとじゃあ、シルナさんとカイトさんは怪物を倒してもらうために此処に来たんだね？」
「ああ、不甲斐ないがそうするしか手がなかったのだ」
「そう言っておいたから今回は無事だったけどな」

戦いが終わってからやってきて転んだ千鶴を起こした後、軽い状況説明をすると彼女はたいそう驚いた表情になる。無理もない。現にこうして三人が同時に行動し、僅かではあったが黒い灰が屋上の床に落ちていたのだ。
こんな身近で、人外の者との戦闘が……
そんな不安げになっている様子に気がついたのか、イアルが安心させるかのように、

「斉藤さん大丈夫、気にするなっていうと傲慢だけど、いつものことよ。だって私たちがいるじゃない」
「う、うんそうだね」

その言葉で千鶴も微笑み、それから『怪我が無くてよかった……』とみんなに伝えた。
それを聞き入れたユキナがゴソゴソと自分の懐から何かを取り出しながら、

「さ～てお弁当お弁当」

と、先程まで中断していた昼食をその場で再開する。

「って、おまっ、持ってきてたのか！？」
「うんそうだよ。いちいち戻って食べに行くの面倒だし」
「あ、じゃあ私も……」

と言いつつ今度はイアルがその場で座り込み、持ってきた風呂敷を広げて弁当箱を置く。

「なっ、お前も……」
「そうだカイト、護熾殿の作ってくれた携帯食料を此処で食べよう」
「そうですね。此処にいた方が安全ですし、良い案です」

そして最後にシルナとカイトが制服のポッケに無造作に突っ込んでいたラップで巻かれたおにぎりを四つずつ取り出すと同じく座って広げ始める。

「……」
「み、みんな用意周到だね」

唯一、弁当箱を空けたままほったらかしにしてきた護熾は何か言いたそうだったが、この場で佇んでも仕方がなかったのであとで戻

ってくると告げ、千鶴は一応この場に残ることにして一旦解散となった。

護熾が行ってしまった後、モクモクと幸せを噛みしめていたユキナはふと気がついたかのようにジーッとシルナの方に視線を向ける。

改めてみれば、少し赤い髪の色以外、おかしなところはなくむしろ美少女に当たる。

それに背だってイアルより少し低い程度で、む、胸も割とあるし……

「？　どうしました？　ユキナさん？」

「あぇ！？　い、いやあの……」

不意にカイトから声を掛けられたユキナは慌てふためいて箸を落っことしそうになるが何とか堪え、急いで誤魔化しの文を述べる。

「ええっとね～、そういえばみんなで食べてるのって全部護熾の作ったものだなって……」

「！　そうなのか？」

これに反応したシルナは自分が初めて食したおにぎりを見つめ、それからユキナとイアルがつついている弁当を見る。

色とりどりの野菜とおかずと白いご飯が詰まった食欲を沸き立たせそうな具材の入った箱、と彼女は解釈し、もう一度自分の食べているおにぎりを見つめる。

中身は何か桃色の魚の崩し身と謎のタレで絡めた獣の肉が入った米粒の固まり。

この違いは何だろうか？　っと眉間にしわを寄せて考えたところで、

「なるほど、じゃあ僕たちの分も作ろうとしたけど、時間がなかったから敢えてこのお米に魚や肉を入れたんんですね」

カイトがそう言い、時間がなかったからしょうがなくこのような形になってしまった、と理解したシルナは少し安心したかのようにフッとため息をついた。

「へえ～、改めてやっぱり海洞くんってすごいね～」
「しかも使っている食材は同じなのに調理を変えてユキナと全然違うようにしてるし」

ここが彼のすごいところ。
同じ食材で同じ弁当だったらすぐさまクラスの人たちに疑われるので、自分とユキナとイアルの弁当をそれぞれ別のに変えるように調理しているのだ。しかも旨い。
なのでほぼ毎回、ユキナとイアルは互いに弁当のおかずを交換して二つの味を楽しんだりしているのだ。

「……昨日から護熾殿の様子は見ていたが……一人で全部やってるのか？」
「うん、護熾は本当に色んなこと上手だよ。特に料理と特売狙いは」
「ねーねー、シルナさんはもう怪我とか大丈夫？」

千鶴はそう何気なく言い、シルナはソッと微笑んで答える。

「ああ、御陰様で。これも、斉藤殿のおかげだ。改めて礼を言う」
「い、いいって！　人として当たり前だしほら！　私の家じゃなくて海洞くんちだったから……」

最後に結局あの人に頼ってしまったことが情けなく思ったのか、

語尾は落として言った。

「いいえ、あなたのような優しい方が、姉さんを助けてしかも今、こうしていられるのですから。なので僕からも礼を言わせてください」

「え、えぇ〜！？」

続いてカイトが礼を言ったので、感謝され慣れていない千鶴はここぞとばかりにあたふたと大慌てし、助けを求めるかのように脇で弁当を食べている二人に視線を向けるが、イアルは苦笑いで手をフイフイと軽く振って『ま、受け取っておきなさいよ』と言ってきたので顔を前に戻し、

「ど、どういたしまして」

本来感謝される側の彼女が何故か二人より深々とお辞儀をしていた。

結局のところだ。

このあと昼食を済ませたがいいが、先程怪物に襲われたと言うことで今度はシルナがここから離れたくないと言ったのは護熾が食べ終わってからやってきた後のことである。

確かに結界に連れて行って置き去りというのもあるが、それではいざとなったときに護熾達の索敵に引っかかりにくいので結論からして『誰にも見つからないように、此処にいろ』と言われたので今二人は屋上で辺りを警戒しながら佇んでいた。

時折穏やかな風が吹き、過ごしやすい環境なのでのんびりすごせ

るのはいいが、5時間目の休み時間に、この建物内にいる男女二人組が入ってきたので急いで給水区画に隠れる。
そして給水タンクの隙間から屋上の様子を見る。
服装からして二年生ということだけは分かるが、ご生憎二人にはそれが判別できない。
むしろ気を探って、一般人かどうか見極めているほどだ。

「先程不思議な鐘の音が聞こえたから休み時間のようですね」
「うむ、しかしわざわざたった二人で此処に来るなんてどういった了見だろうか？」

1－2組の教室では護熾が何かあの二人がやらかさないか心配になって廊下に出たのを知らず、二人は互いに自身の考えを述べ合う。

「あ、姉さん。今女性があの枝組みされた壁に凭りかかりましたよ？」

そう言うと、その女子に今度は男子生徒が自分の身体とフェンスで女子を挟み込むような格好で立つ。互いに、うっとりとさせた目で見つめ合っている。

「？　何をしようとしているんだあれは？」
「いや、もしかしてあれは……あっ」

カイトがあの男女が何をしようとしているのか先読みした直後、穏やかな日差しが屋上に差す中、そのカップルの顔と顔とがゆっくりと、重なった。

「……」
「……」

その光景、僅か三十秒。
三十秒後に、男女は顔を離し、互いに恥ずかしそうにしながら手を繋ぎ、それからまた屋上の鉄扉の方に戻っていった。どうやらそのためだけに此処に来たようである。

その一部始終を生中継で見ていた二人は、少しの間絶句していたが、やがて、

「……接吻か」
「軽く言えばキスですね」

互いにそう言い、また無言になる。
彼らにとってそれは、割と身近にあった行為なのでそれほど驚きはしなかったが、何かこう、自分たちのよく知っている何かとは違ったのだ。
自分たちがよく知っているとして、負傷した戦死の呼吸を取り戻すために気道を確保し、口と口を合わせて空気を送り込む作業である。
しかし先程のは、互いに全てを任せて良いような、信用しきっている上での行為。
決して互いに呼吸困難に陥ったからした行為ではないのだ。
そうそれは、自分たちの世界とはほど遠い甘い世界。

「……いやなものを見てしまったな」

やれやれと言いたげに重い腰を上げ、誰もいなくなった屋上にトボトボと移動を始める。
すると、また誰かが鉄扉を開けて入ってきたので急いでUターンしようとすると、

「お～い、様子見にきたぞ～」
「元気～？」

今度は違う男女の組み合わせの二つの声が掛けられ、それが知った声だと判断するとすぐさま振り向いて確認する。
そして、屋上に足を踏み入れた二人の姿を確認すると、少し安心した口調で名前を言う。

「護熾殿、ユキナ殿」
「護熾さん、ユキナさん」

見知った姿に安心した二人は小走りで二人の元へ向かい、そして数歩手前で立ち止まる。

「で、どういった了見でここに？」
「いや、何か無茶なことしてないか心配で」
「でも今のところは大丈夫そうだね」
「そこまで信用されてないと逆に落ち込みますよ」

此処で互いにちょっとした笑い声。
それから次の時間で終わるから四時二十分になったらあの道路の交差点で待ち合わせ、という約束事をするとじゃあね、と言ってから二人は屋上の鉄扉へ引き返していった。

「……」
「……」

それから暫し、互いに無言で陽が落ち始めた七つ橋町を見ていた。
明るい緋色からオレンジ、そしてほんの少しだが瑠璃色も混じり、もうすぐこの町も夜を迎えようとしているのが分かった。

「綺麗だな」
「……はい」

そのやりとりがあった後に、

「姉さん……」
「ん？　どうしたカイト？」
「随分、護熾さんを信用してますね？」
「え？」
「僕がまだ、こっちに来ていなかった時に何かあったんですか？」
「い、いやそんなのではなく……その、彼は確かに赤の他人ではあるが一応命を救ってくれたし見た目は少し怖いが男としては中々で、ってそういうわけではなく、負傷した私を別段疑いもなく介抱してくれて感謝しているだけだ！」

不意打ちのように訊いてきたカイトにシルナは珍しく千鶴バリに大慌てで手振り身振りで応え、そして自分が不思議な踊りを踊っていることに気がつくとすぐさま冷静になってごほんと堰を切った。

「そういうお前こそ、随分ユキナ殿と親しげだな？」
「え？」
「お前はユキナ殿と話すとき、何か緊張していないか？」

「そ、それは、その……い、いや別格に気にしているわけではなくただ話しやすくて笑顔がとても素敵、ではなく身体が小さいのにとても強くて凛々しくって、ではなく……実は彼女に狼藉を働いてしまったことがあるので、まだ怒っているんじゃないかと疑っておりまして……」
「……狼藉？」
「い、いや決して淫らな行為に及んだというわけではなく……」
「……まあいい、それは後で訊こう」
「……はい」

互いに何故か思っていることを暴露してしまう辺りはさすが姉弟と言ったところであろう。

「ともかく、時間的にはもうじきだ。我々は、今日、こちらの持っている情報を提示することだ」
「そう、ですか。それは、どの範囲で？」
「もちろん、この場にいる経緯を、あの怪物に襲われたからここにいるということをな」

それから暫しの間、二人はまた地平線に沈み始めた夕陽を見つめ、それから足に力を入れ、軽々とフェンスを乗り越えて飛び降りていった。

「それで、イアルはあの二人を明日か明後日向こうに連れて行くと？」

「うん。だって今日みたいなことがあったら大変でしょ？　今回がたまたま昼休みだったからよかったものの、授業中に起きたらどうするの？」
「うっ……」

すっかり日が沈みきった六時十分。
夕飯の支度を始めた護熾の隣に調理器具を出したりコップを用意したりと手伝ってくれているイアルはあの二人が心身共に問題がないのならこの現世よりより安全なワイトに連れて行くという提案を出し、護熾は少し困ったような表情になる。

「でもよ、俺としちゃあ、あの二人が大人しく行くとは思えねえんだよな」
「まあ、それを考慮に入れたらあんた達二人の力も借りるしかなさそうだけどね」
「そんな乱暴な……乱暴……」
「？　どうしたの？」
「いや、あのさ……」

野菜をみじん切りにしていた手を止め、イアルの方に身体の向きを変える。
イアルは少しだけ胸の奥が高鳴る気がしたが、すぐ取り押さえて冷静になる。

「俺が初めて向こうに行ったときさ、何故か手錠を掛けられるって言う罪人扱いだったんだよ。それでお偉いさんがどやどやと何か話して正直怖かった。だから、あの二人が何か乱暴されなきゃ……ってな」
「ふ～ん、ま、そんな顔じゃ罪人扱いも免れないわね」
「さらっと嫌なこというなお前は！　ユキナみてえだ！」

「はっは、大丈夫大丈夫。いざとなったら私が何とかするからさ」
イアルはそう言ってみせるが、護熾は再び身体の向きをプイッと戻し、野菜切りを再開する。
怒っているわけではない。やっぱり心配しているのだ。
一瞬、私じゃ頼りないのかな、と不安な気持ちになるが、彼はそんな信用してくれないはずがないのだ。だから、少しだけ、今思った気持ちを言ってみる。
「……でも、海洞は……優しいね」
「……優しいだけじゃ、解決しねーよ」
素っ気なく、ごもっともな意見。
彼が何を懸念しているかというと、二人の眼の使い手、そしてカイトの脱走による問題。
大凡、まともな扱いではないはずだ。
疑って、疑って、本当に眼の使い手と明かされれば、彼らは優遇されるだろうが、あの二人は、あの二人は――――
イアルは既に、あの二人のことを大体は知っていた。
それは、あの昼休みの時間、怪物の出現報告と共に来た一通の手紙。
内容は――――馬鹿馬鹿しく、何の根拠で、でも不思議と、信じた。
それを今晩、二人に訊くつもりである。
「じゃ、用意できたからあとはご勝手に」
「ああ、ありがとな。絵里！　お前の出番だ！」
「はいは～い！」
用意係が仕事を済ませると今度は料理助手係の護熾の妹の絵里が

居間からやってきた。
彼は最近、絵里に何をどう加えたり、何をどう調理すればいいかを教えている。
何気ない光景だが、彼はこうして妹に料理を教えることで、自分がいなくなったときのために保険を作っているのだ。
そういう風に考えれば、胸が痛い。

その光景を見ていたイアルは、ふと廊下の方からの視線に気がついたのでそちらに顔を向けると、悲しそうな視線で、ユキナがその様子を見ていた。
いつもの明るい感じではなく、兄が妹に料理を教えている光景を、自分を責めるような視線で、ただただ見つめている。

またこれか、とイアルはユキナの方に歩いていき、

「ユキナっ」
「え、あ、イアル？」
「何見てんのよ。ほら、テレビ見よっか？」
「う、うん」

そう無理矢理促すようにして彼女の視線を遮る。
これくらいしか、私にはできないから。
そんな、自己満足している自分に、嫌気が差しているのを静かに耐えながら。

夜、全員夕飯が終わり、お風呂に入り終わり、見たいテレビを見終えた後、各自の自由時間であれこれし、歯磨きやトイレを済ませてから、一樹と絵里を寝かしつけ、１６歳の人間しかこの家で覚醒

しなくなったら、互いに話し合いが始まる。
会議場所はもちろん護熾の部屋。此処ならば一樹と絵里に話を聞かれることはない。

「言いたいことがある！」「言いたいことがある！」

ほぼ同時に、シルナとイアルがそう言い、重なった声が響いたのでこの場にいる全員が少々驚き、互いに一時無言になるが、先にイアルが言う。

「そっちからどうぞ。元々私はあなたたち二人に訊くつもりだったから」
「申し訳ない。では……」

そう言い、全員の視線を集める。
因みに、ユキナのすぐ隣には通信端末を作動させ、回線をオープンの状態にしている。
一つは、千鶴の携帯に（護熾はいつのまにと言っていたが）、二つめは、ワイトのトーマに繋げてこの話を密かに聞いてもらうことにしている。

「護熾殿、ユキナ殿、イアル殿、私たち眼の使い手の正体を疑ってきたであろう。我々も、そなたたちを疑った故に、細かい正体は隠してきたが、此処で明かそうと思う」

カイトはただ瞳を閉じて、姉に全てを委ねるようにしてただじっと聞いている。

「私は、”麟眼”のシルナ。ワイト城直属の隊長の任に就いている。同じく”炯眼”のカイトもワイト城直属の隊長だ」

「……イアル、ワイト城って何だ？」
「今から二百年前ほどの、今の中央にあった建物のことよ」
「！？」

イアルからの返答により、護熾とユキナ、そして電話越しの千鶴も驚愕の表情になる。

「……二百年前、か……予想より随分、未来に来てしまったようだな……」

そう静かに、シルナは事実を受け止める。
護熾は嘘だろ？　と言いたげな表情で彼女を見るが、生憎彼女の表情には一切嘘をついてはいないという気迫が溢れている。

「おいおいおかしいぞそれ。今の話の流れだとお前ら二人は過去から来たと言いたげだよな？」
「だからそう言っている」
「そんな、根拠も証拠もなしに……」
「証拠ならある、見ろ」

そう徐に、胸の前で掌を上にした形で差し出すと同時に瞳の色が銀色になり、髪も透き通るような銀に変わる。まるで、銀河の輝きを思わせるような、美しい姿。
その姿を見た三人はこれが二度目であるが、一度目は戦闘中でしかもすぐ解いたのでよく見なかったのでまじまじと見るのがこれが初めてである。

そして上にした掌の上に、丁度収まるくらいの炎のような気が灯り、そして時計盤のような模様が中で回転している。

「……これは？」
「私の能力だ。ここに、先程壊したお皿がある」
っと徐にもう片方の手で三分に割れた皿が取り出される。
因みにその皿は海洞家のもので、しかも大黒柱の武の愛用品だったものでもある。
「ちょっ！？　て、てててめっ！　何人様のもん壊してんだよーー！？」
「黙って見ててくれ」
護熾がカンカンになって怒っているのも気にせず、シルナは床に置いた割れた皿に向かって先程気を灯した手を向ける。
すると、不思議なことに、気を向けられた皿同士が互いに共鳴するかのように細かく震えたかと思えば、まるでテレビの巻き戻しかのように割れた部分からくっつきはじめ、ものの五秒で割れる状態の前に戻る。
「ほれ」
そしてシルナはその皿を持ち、護熾に渡す。
その光景に驚いたままの護熾は、皿を撫でくり回すようにさわるが、ヒビ一つ入っていない、完全な姿で戻っていた。
「……驚いた……もしかしてシルナさん、”時間”を操れるの？」
「時間を戻す、が正確な言い方だ。しかし命や、大規模な破壊には、対応できない」
開眼状態を解き、元の姿に戻ったシルナは静かにそう言い、護熾に改めて視線を向ける。

これで信用したか、そう言いたげな感じで。

「じ、時間を使う能力だってのは分かったけど……じゃあ何でお前ら、”ここ”にいるんだ？」

「……」

「それは、僕から話させてください」

護熾の質問に黙り込んでしまったシルナの代わりに、カイトがその答えを話す。

「僕たちはある日、近くの森で身体が干涸らびて死んでいる奇怪死を遂げる人が現れたと言うことでその調査と共に討伐を命じられていました。大凡どこかの獣に襲われ、長い間発見されなかったものだと思っていました。しかし、違いました」

「違った？　じゃあもしかして？」

「ええ、本来、人を殺さずに連れ去る、あの怪物でした」

「こっちか？」

岡山の繁華街のビルの屋上で、両眼を左右に動かしながら探って

いる黒いそれはそう呟き、触手で貫いていた男性を無造作に捨てると上空を仰ぐようにする。

「やはり東か。しかも大体分かってきたところだ。あの二人の眼の使い手、予想より遙かにいい能力の持ち主のようだ。」

そう言ってフェンスの縁に足をかけると、爆発的な力で蹴り上げ、雲一つ無い、月がよく見える夜へと身体を飛ばしていった。狙うは、この時代まで送り込んだあの二人。

ビル群を通り過ぎ、
明かりに包まれた住宅街を眼下に、
それは、標的を目指す。

十週目目　それは標的を目指す。（後書き）

一応これでレギオン編は一時的に中断です。
うん、終わりです。
まさかこのようになるとは、パソコンが使えなかった一ヶ月間がもしなかったら何か変わったかもしれません（↑単なる言い訳）
いやほんとすいません！　でもしょうがないのです。まさかこれがこんな心身苦しいものになるとは思わなかったので。

まあこの後の展開を簡単に話しますと、シルナとカイトの二人は自分たちの正体を明かし、イアルが異世界に連れて行こうとしたり、
護熾はお米券を手に商店街大安祭りに殴り込んだり、
ユキナは護熾に髪を切られたり、
レギオンが七つ橋町にやってきて物語が急変したり、

っという展開の予定でしたが、このままでは物語自体があらぬ方向に行ってしまうと危惧したので頭の体操、および気分転換で中断させていただくことにしました。
うん、怒らないでください。一応本編のその後シリーズを更新しますからそれで勘弁してください。
それでは約三ヶ月間のご愛読、ありがとうございました！　では！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8925j/

ユキナDiaryーＡＬ　～Attack Legion～

2011年1月31日21時27分発行